十人十色
名物男

序

この人物を山にすれば、この山なり。あの山を人物にすれば、あの人物なりと、山水に對しては、人物を思ひ起し、人物に對しては、山水を思ひ起すこと、余ひとりの感想にはあらざるべし。山水は山水也。人物は人物也。然るに彼此相比較して、山水と人物とを一致せしむるは、見るものの主觀に基づく。その主觀にして平凡なれば、見る所皆平凡也。奇拔なれば、見る所も奇拔也。故に英雄、英雄を知ると云へり。又大蛇の道は蛇が知ると云へり。余、平生旅行を好みて、山水を品評すること久し。玆に一風變りて、近き頃の人物を品評せる舊作を集む。余や愚物也。爭でか英雄を知らむ。又爭でか才物を知らむ。人物を品評するといふものの、實は己れの思を發表せるに外ならず。唯求むるが爲めに褒

めず。挾む所あるが爲めに罵らず。全く思ふがままを吐露して、秋毫も筆を枉げざるは、世に廣言して憚らざる所也。

大正五年春

大町桂月

十八十色 名物男目次

德富蘇峰……………………………一
夏目漱石……………………………八
　夏目漱石論……鼠の見たる夏目の猫
高山樗牛……………………………二八
　樗牛の一生……帝國文學創刊時代に於ける樗牛君
正岡子規……………………………四三
　子規の句……子規の遺著
尾崎紅葉……………………………四六

尾崎紅葉を弔ふ…紅葉の句
東歸の露伴……………………………四九
鹽井雨江……………………………五〇
酒に死せる押川春浪……………………七五
醉中の小栗風葉……………………………八〇
田岡嶺雲……………………………八一
不仕合せなる田岡嶺雲…數奇なる田岡嶺雲
晩成の人たるべき齋藤野の人……………八五
一代の才人齋藤綠雨……………………八八
才の人福地櫻痴……………………………九二

一代の文章家藤岡東圃……………………九四
交番に小便したる芳賀博士………………九七
腹のせまき山路愛山…………………………一〇〇
冥途文壇消息……………………………………一〇七
文壇名勝誌………………………………………一一一
陶庵侯に謁するの記…………………………一一八
偉人福澤諭吉翁…………………………………一二四
翁の脅我慢説を駁す…翁と大隈伯
伊藤博文公………………………………………一四〇
逸事紛々たり後藤象二郎……………………一五〇

劍難の相ありたる星亨……………………一六五
當年の海上王岩崎彌太郎……………………一六八
一…二…三…四…五…六…七…
八…九…十…十一…十二
余る恩人佐々木高美先生……………………一八一
吃る男……………………………………一九〇
日蓮と蘆原將軍…………………………一九三
諧謔なる馬醫山岡翁……………………一九八
仁術の實行者根本鯨坡先生……………………二〇四
大勇の大工某………………………………二〇八

亡き叔父……二〇九
常陸山君足下……二一〇
因業爺論……二一八
乃木大將……二二三
晩年の乃木將軍…乃木大將を弔ふ

目次終

十人十色 名物男

大町桂月著

德富蘇峯

嘗て聞く、或る小學校にて『楠公』といふ題を出して、文を作らしめしに『楠公は人を以て作り、忠義のために用ゐるものなり』といふ文を作りたる一生徒ありきとかや。この筆法を以て『德富蘇峯』を評すれば『蘇峯は才子を以て作り、新聞の爲に用ゐるものなり』とでも云はむか。

學、漢洋を兼ね、識、內外に亙り、政治、宗教、哲學、教育、文學、歷史、美術、何で

も一通りは知り、趣味ひろく、學才もあれば、世才もあり、文章も達者、口も達者、交際も上手のやうなり。而して勤勵にして、壯健にして、新聞を經營し、筆を新聞に執ること、十年一日の如し。まことに新聞記者として、至極調法なる人なり。

かく言へば、蘇峯は、新聞記者として、えらきやうに聞ゆれども、すべて、調法なるものは、決して、えらからざるなり。何でも出來るといふ人に、たいした人なし。分業の世の中、一事に精通するを尊ぶ。田舍の店屋の如く、何でも間に合ふは調法なれども、良き品を求むべからざるなり。博士の學位は、何でも知つてゐるといふ事を意味するにあらずして、一事に精通する事を意味するなり。新聞記者とても、必ずしも何でも知るを要せず。經濟なら經濟、外交なら外交、軍事なら軍事と專門的に深き知識あるが肝腎なり。その方が新聞記者として價値あるものなり。知らず蘇峯に專門的知識ありや否や。又よく新聞記者は、布衣の宰相との語あるが、知らず、蘇峯は、布衣の宰相たるの器量ありや否や。

余は、蘇峯に面晤したることなし。其文とても、絕えず讀んで居るといふ譯でもなく、

蘇峯に就いて知れる所、多くは世上の噂なれば、或は誤解なきを保せず。元來、批評、殊に人物評は、人を評するにあらずして、己を評するなり。人を罵るは、己を罵るなり。今の余の主觀に映ずる蘇峯は、至極調法なる新聞記者たるに過ぎざるなり。

余は、前後二回蘇峯の演說を聞けり。その云ふ所は、氣が利きたり。音聲はどうも快感を與へざる一種のしやがれ聲なり。その聲にて其人となりを想像するに、常人以上を感ずべき人とは思はれず。鳥にたとふれば鴉なり。鴉は、好んで、腐れたる腸などを食ふ。よき聲の出づべき筈なし。知らず、鴉の腹中、何ものかある。天下の名士、蘇峯ともあるべき人を、鴉に比するは、大に氣の毒なれども、實際余が蘇峯の聲を聞いて感ぜし所を直言すれば、鴉以上には思はれざるなり。

聞く、蘇峯は、日曜每に、必ず逗子の別莊に赴くと。此一事を以て察するに、蘇峯は規則正しく、よく己れに克ち得るの人なり。世の事務を執るに、必要なる性格なり。かくて、活きたる新聞機械たるを得べし。聞く、蘇峯が當年御用新聞記者たりしや、每朝、雨が降

らうが、火が降らうが、御用があらうが、あるまいが、必ず元老の交鬪に伺候せりと。これ日曜毎に逗子に赴く者はさもあるべき事なり。三太夫たるものは、必ずこの通りならざるべからざるなり。御用記者は、三太夫にあらず。苟くも、我が政見、時の政府と合する所あれば、筆を執つて政府を助け、反對派を壓し、以て我が政見を貫き、政府をして我が經綸を行はしむ。名は御用記者といふも、實は依然として布衣の宰相なり。よしや、實際の宰相の上にあらずとも、其外にあり、其下にはあらざるなり。之に反して、たゞ政府の意を迎へ、政府の申譯のみをなさば、それこそ眞の御用記者、布衣の宰相は、下つて三太夫となる。殿樣の仰せられることは、何事も御無理御尤、謹んで承はれと忠義顔するいはゆる三太夫根性は、一片氣骨ある男子の爲すに忍びざる所なり。われ蘇峯が御用記者としての態度は、前者なりしか後者なりしかを知らず。さき頃、萬朝報にて、淸浦家の諸子の無賴荒淫なることを記せしが、五月十六日の同新聞に記して曰く「淸浦家に關する當社の記事に就き、淸浦氏と同鄕の關係ある德富蘇峯が、當社に來りて語りたる所によれば、淸浦家の

家庭に、紊亂といふ語に相當する如き事實は認むるに由なし。清浦氏は同情に富む。品行方正なり。夫人と琴瑟相和す。夫人は賢良の聞えあり。人並よりも子を愛する方にて、夜分歸りの遲き時などは、深更までも端座して待つ程なり。されば子に甘過ぐることは、或は云ふを得べけれど、最も圓滿なる家庭なることは十分に認めらる」と。もし之を事實なりとすれば、蘇峯饒舌、清浦家を辯護せんとして、清浦家の非をあばきたるものなり。人並よりも子を愛す。否、子に甘過ぐ。このやうな女は、決して賢良といふべからず。道樂息子は、必ずこのやうな母を有する也。萬朝報に記したるが如き、清浦家の諸子の無頼荒淫なるは、全くこの夫人の致すところたらずんばあらざるなり。要するに、この蘇峯の辯護をして事實ならしむれば、蘇峯は、萬朝報の記事に證明を與へたるに外ならざるなり。このやうな人に、御用記者となられては、政府も有難迷惑の思ひをなすこと、なほ清浦家の如くなるべきなり。

一面より云へば、蘇峯は、文章家なり。當年、一個無名の青年にして「將來の日本」を著

はし、『國民之友』を發行し、その清新なる文章は、實に天下を風靡し、明治の時文に一紀元を劃せり。明治の操觚者中、第一の才子ともいふべし。余の如きは、蘇峯の文章に感化せられたる一人なり。この點は、われあくまでも感謝せざるを得ず。その後、凡そ二十年、蘇峯は、一度も筆を絕たず。思想豐富、文章ますます暢達したり。兎にも角にも一代の文章家といふべきかな。

文章上の恩は、恩として、こゝに、蘇峯の文章に就いて、余の感ずる所を申さば、蘇峯が調法なる新聞記者なるが如く、その文章もやはり調法なる文章なり。篇を終るまでも、すらすらと面白く讀めるが、さて讀み終りては何も殘り居らず。威壓するの强みもなければ、人をひきつける溫かみもなし。文章家は文章家なれども、文章の大家とは云ふべからざるなり。

世には、蘇峯見たやうな型の人も少なからず。事務を執りて、世に生活するに、至極調法なり。間違ひなし。俗に所謂喰ひはぐれなし。之を官吏にあてはむれば、判任官以上なり。勅任官の貫目なし。先づ奏任官として、恰當の人材なり。其弟、蘆花は蘇峯ほどの俗

才なし。勅任、奏任、判任以外に逸出す。其文は、天下の逸品なり。蘇峯は、奏任官的の處より逸出せざるべし。思ふに蘇峯は、才の人なり。才の爲に累せられて、大きくもなれず、高くもなれず。今のやうな具合にて行けば、一生の間、如何ばかり、多く書を讀むも、如何ばかり、多く文を作るも、いはゆる垢ぬけのせざるなり。其人や、大に間に合ふ人なり。常人以上にあらず。其文や、勸工場物なり。床の間におくべき品柄にはあらざるなり。

夏目漱石

夏目漱石論

絶代の奇才といふべき哉。大學を出でゝ、田舍の中學教員となり居りし間は、日本派の一俳人として、一部の人に知られしのみなり。さまで奇とするには足らざりし也。進んで、高等學校の教員となりしも、これは鰻上りといふものにて、さまで奇とするには足らず。留學を命ぜられ、歸りて、大學の教員となりしは、秀才には相違なけれども、他に其類も少なからざることなれば、さまで奇とするには足らず。一朝、『我輩は猫である』を著はすに至りて、夏目漱石の奇才、こゝに始めて頴脫せり。啻に其作が奇拔なるのみならず、大學教員にして、而も四十歲近くになりて、始めて小說を草し、而も其小說が文壇を風靡す

るといふ事實が奇拔也。やがて、大學教員の職をなげうつこと敝履の如く、甘んじて、一生を一枝の筆に托するに至りては、益奇拔也。

つら〳〵漱石の學や文や人格やを察するに、奇骨あるの士なること、明治の文壇、實に空前なり。日本派の俳壇にありて、正岡子規は、趣味ひろく、大才なる點に於て、大將株の價値あり。內藤鳴雪は風韻高き點に於て、俳壇の仙也。漱石は、奇拔を以て、一頭地を拔く。他の諸子は、凡骨もしくは、小才子の徒、多く言ふに足らず。漱石は、滑稽をも兼ねたり。『かみなりのづに乘り過ぎて落ちにけり』は、まだ月並の痕跡もあれど『某は雀にて候案山子殿』などに至りては、滑稽の妙をきはめて、よく漱石一家の特色を發揮せるものなり。

はじめ、帝國文學に、『倫敦塔』出づるや、われ激賞して曰く、帝國文學空前の美文なりと。其後、『我輩は猫である』の上卷出づるや、われ少しく之を抑へたり。抑へたるは、其大成を期したるなり。飲酒、道樂、社交、旅行等の註文も、この意に外ならず。然るに、中

巻に至りては、苦沙彌先生、二杯の晩酒の處を四杯まで飲み過す。細君苦々しき顏をなす。先生曰く『桂月が飲めと勸めたり』『桂月とは何ぞ』『さすがの桂月も、細君に逢つては、一文の價値もなし。桂月は現今一流の批評家なり。その桂月の言ふ事故、よき事なり』といへば『桂月だつて、梅月だつて、よけいなお世話なり』といふ。『酒のみならず、交際をして、道樂をして、旅行をしろとすゝめたり』『なほ、惡きにあらずや』と、細君柳眉をさかだつるに至りて、われ覺えず案を拍ちぬ。謭劣、余の如きものゝ愚評が、作家に對して、こゝまで反應があるかと思へば、大いに張合があるといふものなり。漱石は、なほ余の言を氣にせしと見えて、他の處に於て、『桂月は主人の事を稚氣があると言つて居る』と記せり。問ふに落ちずして、語るに落つ。そんな事言ふが、即ち稚氣なり。しかし、冷やかすことは、さて措き、上巻の三四倍大のものにしたしと註文せしに、うれしや、中巻出でたり、下巻出でたり。容量に於ても、大作の資格を備ふるものとなれり。

茲に、余は、さきに、上巻に對して、頌よりも、むしろ規を以てして、抑へたる批評を

取消して、言はむとす、一九の『膝栗毛』三馬の『浮世風呂』が傑作なる以上は、『我輩は猫である』は、或點に於ては、たしかに、それ以上の傑作なり。空前の作也と。

寫生文に、寫生の必要あり。畫家にモデルの必要あらば、『我輩は猫である』も、モデルあるべし。漱石の人となりもあらはれて居るなるべし。されど、それよりも、直接世にあらはれたる事實に就いて吟味する方が、早手廻し也。漱石の朝日新聞社に入るや、入社の辭を草したり。『大學は我を冷遇したり。年俸僅々八百圓、衣食にも事缺く。故に我を優遇する新聞社に入れり』との言あり。其學ぶ處が英學故、知らず英國の氣風にかぶれて、それを當然の事と思ふのかも知れず。又天眞爛漫、己れを佯らぬつもりかもしれねど、余を以て見れば、例の稚氣むしろ愛すべき點もあれど、立つ鳥、水を濁さずといふ事を解せざるなり。大學の諸公、多くは皆駿馬也。而も槽櫪の間に一生を送るの駿馬なり。冷遇に腹立てゝ、去るなら去るで、大いに好し。されど行きがけの駄賃、大學の惡口言ふの必要、いづくにか在る。『文學論』の梓に上るや漱石大いに怒り、校正者をして謝罪狀を新聞に出

さしめたり。更に活版屋と爭へり。その活版屋と爭ひしは、愚のやうなれども、活版屋を警戒して、出版上に利益を與へたりとすれば、大愚と云ひて可也。されど校正者の謝罪廣告に至りては、全く痴愚なり。公私の區別を知らざるなり。校正者疎漏ならば、私に於ては、大に校正者を叱るべし。されど、公に於ては、責を引きて、自ら謝罪せざるべからず。元來、自著を自ら校正せぬといふことは、讀者に對して、不忠實きはまることなり。されど自ら信用する人ならば、之に托するも、止むを得ざる場合もあるべし。その場合には、校正の誤謬は校正者の罪にあらずして、漱石の罪也。其罪を校正者にのみ嫁して、己れひとり、いゝ子とならむとするは、餘り得手勝手なる我儘者也。一寸氣が利いて、大いに間が拔けたり。所謂頭かくして、尻隱さゞるの類也。卽ち滑稽也。腹に惡意あるにあらず、罪なく、無邪氣也。稚氣、むしろ愛すべき也。

事實上の漱石、旣に斯く滑稽を帶びたり。これを『我輩は猫である』に擬するに、ハヽア、出て居るは、〳〵。その爲めに、『我輩は猫である』に、一種の滑稽を添へたり。大學の薄

遇を怒り、校正者の疎漏を怒り、活版屋の不埒を怒るの漱石は、苦沙彌となりて、金田夫人の鼻の大なるが、癪にさはりて怒りたり。墻外で、サベージ、チーと惡口言はれて、怒りて飛び出したり。湯屋にて學生と喧嘩したり。野球の丸をなげ込まれて、怒りて學生を捕へたり。校長を呼びたり。その結果始めの怒りも何處へやら、龍頭蛇尾に收まりて、門が鳴る、御免、丸を拾はして下さいと、頻繁に學生の入り來ることが增したるだけにて、丸の飛來は、依然としてもとの如きなり。苦沙彌先生が癇癪を起しゝは、右にあげたる場合のみにて、それも至つて無邪氣なる、罪の無き怒り也。平生は、洒落也、飄逸也。白き鼻毛を拔き、珍らしがりて、うゐたてゝ、面白がる也。細君來て、家計の不足を訴ふれば、その鼻毛にて、おつ拂ひて、うれしがる也。氣がきいたやうにて間が拔け、間拔けたやうにて、氣がきゝ、機智にとみ、想像力にも富めり。盜賊に物を取られても、くやしがらず。その盜まれたる品物がもどると聞きても、さまで、うれしがりもせず。友に對しても、來る者は拒まず、去る者は追はず。細君の言ふが如く、巡査を恐れ敬ふは、內氣にして、眞

面目にして、臆病なればなり。我家に入りたる盜賊を、それとは知らずに、刑事巡査と思ひあやまりて、慇懃に之に頭を下げたるは頗る滑稽なり。迷亭に注意せられても、なほ悟らずに、其非を通すは、ます〳〵滑稽也。內氣にして臆病なるは、天才者の一の資格也。しやあ〳〵と蛙の面をするものに、到底大なる發達なし。姪の少女、小慧なり。苦沙彌先生のあまのじやくなることを看破せり。買つてくれと言へば、買つてくれず、いらないと云へば買つてくれるといふ秘訣を知りて、いらないと云ひて、蝙蝠傘を買つてもらへり。得々として之を叔母に語る。そんなら返せと苦沙彌先生に云はれて、忽ち泣き出すなど、目の前に見るやうなり。迷亭も、寒月も、越智東風も、多々良三平も、何れもみな苦沙彌先生の變形に過ぎず。迷亭は洒落のやうなれど小心也。うそをつけども、惡意はなし。パナマ帽の說明を爲し、蕎麥の食ひかたを說明するなど、馬鹿のやうなれど、馬鹿にはあらず。寒月は金田令孃にほれて、吾妻橋より身を投ずるまでの馬鹿者なれど、橋の下にはあらで、橋の上に身を投げたる利口者也。蛙の目玉を研究し、博士論文を草し、博士となり

て、金田の女婿とならむと思ふまでの馬鹿者かと思へば、いつの間にやら、國より細君をつれて來たる利口者也。越智東風は我が愛する美人が他に嫁すると聞きても、やきもちも燒かず、失戀して、華嚴の瀧に赴きもせず、喜んで祝の歌をつくるまでに洒々落々たり。徹頭徹尾、滑稽に富みて、その滑稽には、機智あり、警句あり、いやみ無く、くすぐり無し。諷刺の出來るほどの度量なき人也。否、諷刺の出來るほどの惡人に非ざる也。直截にして、天眞爛漫、いつはらず、ぶらず、衒はずして、氣品自ら高し。終に猫がビールに醉ひて、甕中に落ち、脫するに路なきを知りて、未練も言はず、愚痴もこぼさず、泰然として死するに至りて、漱石の面目、所謂畫龍に睛を點ずるの趣あり。漱石の作、冷かなるやうなれども、眞に冷かなるに非ず。腹には、萬斛の淚ある人なり。されど、自から修養するところ深く、理性も發達せり。生死得喪の上に超脫す。この猫の最期と中卷の序とを對照すれば、面白かるべし。留學中、正岡子規が重病の苦狀を書きたる手紙を送りければ、長々と返書をおくれり。子規それを面白がりて、今一度おこしてくれと、あはれなる事を言ひ來

れり。されど、我は我の仕事あるを以て、返書を送らざりき。子規むなしく死せり。一寸、この事を聞かば、人或は不人情と思ふべし。然れども不人情にはあらず。漱石の所謂非人情也。漱石は善人也。涙ある人なり。されど、自ら生死得喪の上に超脱す。子規の病苦は氣の毒とは云へど、達人にありては、一死もとより大事件にはあらざるなり。一般の俗人なら、いざ知らず。正岡子規とてもあるべき人なら、亦然るべき筈なり。根蒂にこの悟脱あり、故に猫の最後も見事也。漱石自身の最後も、亦同じく見事なるべきなり。明治の文壇、われ漱石に於て、高士の俤を見る。

滑稽も涙ある人の滑稽にして、はじめて眞の滑稽なり。さなくば、いやみとなり、駄洒落となり、くすぐりとなりて、輕薄の氣紛々として近づくべからず。『我輩は猫である』一篇、一寸冷かなるやうなれども、徹頭徹尾、面白可笑しく讀まるゝは、作者其人の腹に涙あるが故なり。又漱石の人格の高きが故なり。唯漱石は、事實上にも、下らぬ事に癇癪を起し、それが作にあらはれて、自然の滑稽となる。稚氣と云へば、稚氣なれども、むしろ

愛すべきものなり。世もし單に漱石の滑稽のみを味ひ、警句のみを味ふものあらば、これよく漱石の作を讀む者と云ふべからず。草枕の主人公が陶淵明の『採ニ菊東籬下一、悠然見ニ南山一』を激賞したるは、やがて之れ漱石の趣味なり。漱石は英文學に精通し、哲學的頭腦を有し、西洋の新知識に富めども、根本は漢詩、俳句、禪、武士道などに含まれたる氣品を身解したる人なるべし。淵明もし小說を作らば、漱石に似たるものが出來るべし。雪舟もし小說を作らば、やはり漱石に似たるものが出來るべし。石川丈山もし小說を作らば、やはり漱石に似たるものが出來るべし。社會の趣味墮落し、浮薄にして、唯、新を追ひ、藝術も徒に西洋の糟粕を嘗めて得々たる世の中に、雪舟、探幽などの名畫は、どし〳〵西洋に飛び出しつゝあるなり。氣品といふことを解せざる者は去つて自然派の小說を讀め、自然派の小說は、また獨特の別趣味ある也。氣品を解するもの、漱石の小說を讀まば、塵外の仙境に遊びたるの心地すべき也。この點に於て、明治輕文學壇上、漱石が獨步也。

さらば、漱石は、氣品の極に達し居るかと云ふに。余は、否と答ふべし。味噌の味噌く

さきは、眞の味噌に非ずとか云ひぬ。氣品の氣品くさきも、亦上乘の氣品にはあらざるなり。寫生文と題する論文の中に、漱石は、寫生文の要を說きて、寫生文家の社會人生に對するは、親の子に對するが如しと云へり。これだけなら大に好し。然るに、其理由を問へば、子が犬に吠立られて、あわてゝにげて、菓子を落して、泣いたからとて、親は其子と同じく泣く能はざるなりと云ふ。漱石のまだ氣品くさきも、こゝ也。其作の冷やかに見ゆるも、こゝ也。子と同じ心になりて、子と共に遊び、子と共に鬼戯もなし、子と共に笑ひ子と共に泣き、しばらく小我を沒してこそ、まことの親なれ。氣品もこゝに到りて、渾然たる大氣品也。潔癖にして理智のすぐれたる漱石には、無理なる註文かもしれざれど、漱石もし其大を望まば、自から力めて其理智をくらますべし。愚になるの趣を解すべし。西園寺侯が聰明純潔の資を以て、豺狼のよりあひのやうな政界に立ち、政友黨の總理となり、內閣總理大臣となれるは、之を能くせるによるなり。書を讀み居りては、漱石の理智は、益長ずべし。しばらく書卷を擲ち、世の愚物、俗物に伍して、外部の圭角を去れば、それ

でよき事也。余の飲酒、道樂、社交、旅行云々を云ひしは、要するに、愚になれとの事なり。必ずしも小說に酒を描け、道樂を描けとの事にはあらざるなり。

單に氣品のみならば、明治の世と雖も、佛に名僧あるべく、野に高士あるべし。漱石のみに限らざるなり。藝術上の手腕として、漱石に多とすべきは、其獨創力也。獨創力なき氣品は、氣品なれども、陳腐となるべし。漱石は奇才也、月竝を嫌ひ、常套を忌む。杜甫は『語不レ驚レ人死不レ休』と云ひたるが、漱石にもこの槪あり。何事にも古人、もしくは西洋人の糟粕を嘗めず。今の自然派の作家が、西洋の自然派の糟粕を嘗むるが如きは、漱石の蛇蝎視する所なるべし。漱石は其小說のみならず、其文章にまで、自家の新機軸を出して、すべて所謂夏目式也。これ藝術上の一大要件也。大を缺きては、大家と云ふべからず。大家と云ふべからざるのみならず藝術上の生命なきなり。トルストイを眞似て、トルストイまで至り、モーパスサンを眞似てモーパスサンまでに至りたればとて、一時の愛嬌にはなれ、こけをどしにはなれ、藝術史上、何等存在の價値なきなり。『我輩は猫である』はたしか

に一種の夏目式也。所謂非人情小說の『草枕』は、猫とは、とびはなれて、亦一種の夏目式也。『二百十日』も『坊ちやん』も、皆夏目式なり。短篇に至るまで、それ〴〵特色あり。『一夜』は、漱石が自から『我輩は猫である』の中に、『先達ても、私の友人で送籍といふ男が、一夜といふ短篇をかきましたが、誰が讀んでも朦朧として、取りとめがつかないので、當人に逢つて、篤と主意のある所を糺して見たのですが、當人もそんな事は知らないよと云つて、取り合はないのであります。全く其邊が詩人の特色かと思ひます』と云へるが如く、まことに禪問答みたやうにて、とんと分りかねるものなるが、とにかく、一種の特色あり。その他、幻影の楯、薤露行、趣味の遺傳、琴の空音など、いづれも夏目式なるが、一篇は一篇の特色ありて、似寄つたものなく、いよ〳〵出でゝ、いよ〳〵新、いよ〳〵奇、以て才の大なるを知るべし。

かく小說其物が世に夏目式と云はるが、文章も亦夏目式と云はる。形容、譬喩など、ありふれた成句は、一つも用ゐず。皆自から新に工夫して、而かも妥帖也。毫も生硬ならず。

警句續出、應接に遑あらず。文才にも長けたる人なる哉。文は長けれども、句は短く、從つて、力あり。複雜なることを明白に描き出す。所謂、痒い所に手の屆くとは、漱石の文章の事也。對話のうけ具合も、今の小說家の中にては、上出來の方也。西洋の新知識に加へて、漢文、漢詩、俳句の素養も深かるべし。和歌和文の素養は餘り見えざるやうなれども、文法語格などの間違は、幾んど無くして、文章家としても、一種の異彩を放てる名文家たるを失はず。漱石は新を好み、奇を愛すれども、妄りに小才を恃みて、格を破りたるに非ず。十分な文學の素養ありて、一旦格に入りて、而して後、格を出でたるなり。故に前人を襲踏せずして、自ら法度あるなり。

今、朝日新聞に出しつゝ、ある『虞美人草』は、未完なれば、しばらく言はざるべし。在來の作は、『我輩は猫である』の外、『野分』の一篇を除きては、漾虛集と鶉籠とにまとまれり。『我輩は猫である』は、漱石の名を成さしめたるだけありて、どうしても、第一の傑作也。之に次ぎて、『草枕』と『坊ちやん』とが見るべし。人或は漱石が小說の技倆を疑ふものあ

り。されど、坊ちやんが書ければ、小說の技倆は、十分也。坊ちやんはよく躍動す。所謂小說の格にはまりたるもの也。

かうまで坊ちやんを躍動させるには、作者自身を描けるに非ずんば、出來ざる事也。當年、『油地獄』は、齋藤綠雨の傑作と稱せられたるものなるが、極めて內氣なる、恥かしがりの、初心なる主人公は、綠雨自身なりとすれば、我儘で、氣が勝ちて、負嫌ひで、而かも無邪氣なる坊ちやんは、漱石自身なるべし。『草枕』は之と異なりて、格を出でたる所謂非人情小說なり。文章最も美なり。警句最も多し。漱石自ら說明せる如く、美を美として描ける小說也。非人情の一畵家、溫泉場に赴きて、非人情の美人に遇ひ、之を描かんとすれど、何處か足らぬ處あり。されど、こゝぞとつきとめること出來ざりしに、停車場裡、人を送りし時、その美人の顏に、『憐れ』が浮び出しを見て、これだ〱、これ畵になると喜びたりと云ふだけにて、筋を云へば、極箇なれども、筆底花を生じ、描寫神に入り、美を極め、妍をつくし、人をして畵裡に逍遙するの思あらしむ。その美人の頭に『憐れ』を缺きて、

畫にならざるを知るの漱石は、我が作にも同じく『憐れ』を缺くの不可なるを知らざるべからず。思ふに漱石は、尋常の藝術家以上に自分の下らぬことを自知せるだけの明あるべし。これ『我輩は猫である』の成れる所以也。されど、人も皆下らぬものと思ふなるべし。これ『憐れ』を缺ける所以也。

余はおもに藝術家としての漱石を見たり。卽ち漱石の輕文學のみを見たり。漱石には『文學論』の大著あり。『文藝の哲學的價値』といふ長論文もあり。その他にも論文ありて、硬文學に於ても、亦有力の士也。漱石の如き作家が、新聞小說の中にあるは、はきだめの鶴と云はゞ、或は誇張に失するかも知れず、安普請の小借家の金屛風とでも言はむか。新聞に小說を草してより未だ久しからざるに、讀者の評判、はやはじめのやうにもはく、毀譽相半せるが如し。『我輩は猫である』に輕快なる滑稽のみを味ひて、漱石が新機軸の氣品を味はざるの致す所たらずんばあらざるなり。

鼠の見たる夏目の猫

夏目の猫は死んだ。元來、我等鼠族の仇敵だが、夏目の猫は、一度も、我輩に仇した事は無かつた。此點でも、わが輩は、うれしく思つて居る。今、その猫が、ビールに醉つぱらつて、水甕の中へ落ちて、死んで仕舞つたのを見ては、實に、氣の毒でたまらぬ。むかし、武田の軍がやぶれて、勝頼の首が信長の前に持出されると、信長は之に唾を吐きかけたが、家康は之に反して、敵ながらも、大將の首だと云つて、丁寧に禮を施したといふ話である。一寸、この信長と家康とのやり口を見ると、信長の方が、亂暴で、家康の方が情誼にあついやうに思はれるが、少し立ち入つて腹の中をさぐつて見ると、信長の方が、却つて正直で、天眞爛漫な處もある。家康の方は、形は、如何にも、情誼にあつくて、禮儀を辨へて居るし、まんざら心にも無いことでもなからうが、また、このやうにして、甲斐の國人をなつけようといふ策略がこもつて居たかも知れぬ。今、我輩は、畜生たりと雖も、信長のやうな蠻的なことはしない。人によく思はれようといふ策略もない。心底から、氣の毒に思うて、甕のふちに上つて、猫の屍骸に向つて、手をあはせて、伏し拜んだ。南

無畜生、頓生菩提、〱、〱。

我輩は、夏目の猫のみに、この禮意を表するのでは無い。多年、我輩に仇した猫に對しても、これくらゐの禮意を表するだけの度量をもつて居る。夏目の猫の最期の覺悟は、まことに見事であつたと、我輩は敵ながらも、感服せざるを得ない。もがいて見たが、到底駄目と悟つて、落ちついて、心しづかに死んだのは、あつぱれ、大人君子の態度である。今の世の修養のない厭世者、煩悶者に、少し丸薬にでもして飲ましてやりたい。こんな點になると、我輩は、平生、猫以上の覺悟があるつもりだ。駄法螺ぢやない。まあ我輩のやうな鼠の身にもなつて見給へ。人間は、我輩に對して、常に惡意をもつて居る。猫を使つて、我等を平げつくさうとして居る。殊にペストが流行りだしてから、我輩の首は、毎日、交番所の巡査の實驗に供せられる。死馬の骨五百金とは、むかしの話しに聞いたが、あはれや、我輩死鼠の骨は、わづか五錢、それでも、慾に目のなき世上の人間、わづか五錢の目くされ金に迷うて、どし〱我輩を征伐しにかゝる。斯樣に、我輩は四面皆敵の中に生

活せねばならぬ。わが輩の命は、風前の燈よりも、果敢ないものである。實に苦しいともつまらないとも、何とも云へない境涯であるが、その代り、死といふ問題は、平生研究せざるを得ぬ。明治太平の世に生れた弱蟲の人間こそ、自分が、命が惜しいと思ふ心から割り出して、死の問題を非常におもしく見て居るが、むかしの武士では、御馬前の討死といふ事は、生れてから覺悟せねばならぬ。死ぬることは、何でもない。命は、いつでも、のし付けて進上するつもりで居る。日本人が戰爭につよいのは、この心がけがあるからだ。そこへゆくと、わが輩も、大に日本武士的だ。いつでも命は、進上する。それも、四面皆敵の苦しい境遇から、自然に養成せられたのである。たつた五錢では情けないが、もつと價があつて、死馬の骨の五百金とまでは行かずとも、せめて、二三百金になるなら、我輩はいつでも死んであげる。こそ〲臺灣の彩票を買ふお方の爲めに死んであげませう。懸賞小說にうき身をやつすお方の爲めに死んであげませう。金故に男を賣るお方の爲めなら、なほ更死んであげませう。

夏目の猫は、わが輩にとつては、恩人である。然し、恩は恩、缺點は缺點として、わが輩が、公平に判斷を下して見ると、夏目の猫は、猫としては、あまり褒めたものでは無かつた。鼠を取るのは、猫の本職と古來相場がきまつて居る。然るに夏目の猫は、鼠を取らずに、頻りに、下らぬことばかり、しやべりつゞけた。之を人にたとへると、文士見たやうなものだ。何等の智德もなく、見識もなく、たゞ青年戀愛の情にかられて、少しばかり、女の衣服言語を觀察せるを、楯にとりて、國民たるの本分は、つくさずに、筆とりて、下らぬ觀察をかきこねるが、今の文士といふものであるが、夏目の猫は、丁度、それと同じ事だ。然し、門前の小僧、ならはぬ經をよむ。夏目の猫は、主人が學者であつて、さつぱりした、脫俗した處があるだけに、今の世の文士連中よりも、もそつと、氣のきいた、面白い事を云つて居る。そのあんばいで進んでいつたら、もそつと、氣のきいた、面白い事を、ぞく〳〵言ひだすであつたらうに、俄に死んで仕舞つて、實に惜しいことをした。

高山樗牛

樗牛の一生

明治三十五年將に暮れむとして、文星一夜湘南の濱に墮ちぬ。嗚呼ゆかしと思ひし鎌倉の地、樗牛の亡き骸を荼毘にするの處とならむとは思ひかけきや。われ鎌倉を訪ひしこと、前後四回、はじめは歴史の古蹟を親しく看むとて、ひそかに雀躍したりき。以後、雀躍するまでには至らずとも、なほ何となくゆかしと思へり。而して昨日の歡樂一夢に歸して、終にこゝに友の葬を送らざるを得ず。

われ君と同じ年に大學に入りたれども、君は第二高等學校よりし、我は第一高等學校よりせり。君は哲學を修め、我は國文を修めたり。入學してより一年餘りは、絕えて相識ら

ず。帝國文學起るに及びて、はじめて相識れり。酒間曾て樗牛醉ひて戯れに余に謂つて曰く、君は體が弱さうなり。必ず早く死せむ。君死なば、われ弔文を作らむと。われ曰く、柳に雪折れなし。君こそ早く死にさうなれ。君死なば、われ弔文草せむと。座に芥舟、醒雪諸子ありき。必ずや、記憶せるならむ。爾來わづかに七八年、惡謔、讖をなして、樗牛先づ死せり。嗚呼誰か思はむや、蒲柳の質の我が身死せずして、壯健なりし樗牛先づ死せむとは。又思はむや、碌々として、生きて甲斐なき我が身の、瓦と全くして、才に、學に、天下の重望を負ひし樗牛の碎けむとは。

天下知ると知らざると、樗牛の死を聞きて、誰か哀悼せざるものあらむ。然るに、眞に哀悼すべきは、死せる今日の樗牛にあらずして、病の爲に留學を辭せざるを得ざりし當年の樗牛にあり。嗚呼絶大の秀才が、文部省より拔擢せられて、西洋に留學せむとせしは、蛟龍の雲雨を得たるに比するも、必ずしも大袈裟にあらず。然るに二豎無情、この才人を拉し去つて、病床にとざしぬ。當時、樗牛が心中果して如何なりしぞや。爾來少康なきに

あらざりしも、愁雲常に樗牛の身にたなびきしや必せり。

而して藝が身を助くる不仕合、病間なほ筆を執つて、天下の讀者にまみえざるを得ざりしは、氣保養になりしこともありしなるべけれども、時には苦しく思ひしなるべし。病つひに重りて、病院の一室をわが天地と限らるゝに至りては、これ傷を負へる猛獅を檻内に押し込むるに異ならず。多情多感なる樗牛、豈によく之に堪へむや。一日ながらふれば、一日の苦痛あり。樗牛むしろ甘んじて瞑目せしならむか。

樗牛、病床に悟脱して、枯木冷灰ならむには、餘りに才あり。餘りに活氣あり。樗牛は一生何か活動せずには居られざるべし。晩年ニィチェに私淑して、美的生活を唱へしは、思ふに、その眞面目ならむか。かばかり勝氣にて才すぐれたる絕大の才人が、空しく病院に呻吟して、思ふやうに學問を研究する能はず、事業をなす能はず、本能的性情を逞しうする能はざるは、げにこの世ながら地獄なり。悲しからずや。美的生活論は、この才人が現世の地獄に煩悶したるさけび聲なりき。われ社會の爲め、文壇の爲に、樗牛の死を惜ま

ざるを得ず。然れども、死生、命あり。樗牛の如く、多く活動したらむには、三十年の生涯も短しとはせず。花々しきかな、樗牛の一生。明治の世、才人多し。されど、樗牛の如く、花々しきもの、果して幾人かある。われ等凡人の一生は、牛の重荷を負うて、のそのそと歩むが如し。樗牛の一生は、駿馬の名人を乘せて走れるなり。もしくは電氣の空にきらめけるなり。

われ大學以前の樗牛を知らず。大學に入りたる後の樗牛は、學生にあらずして、名士なりき。樗牛が青年時代の才情を逞しうし、才筆を揮ひし瀧口入道一篇、名をかくして、讀賣新聞懸賞の歴史小說の選に入り、世みなその才筆に驚きて、作者の何人なるかを物色して止まざりしが、何ぞ知らむ、これ冷かなる哲學を硏究する、大學の一學生が筆のすさびならむとは。樗牛もしこの方面に向つて進みしならむには、優に一代の小說家となりしなるべけれど、樗牛の才氣ありあまりて多能なる、豈に區々たる明治の小說家と、任を同じうして甘んずるものならむや。

樗牛が大學時代の半ばにして、帝國文學起り、樗牛椽大の筆を揮ひて、帝國文學は殘んど樗牛が獨舞臺の觀あり。その四號以前の時文は、殘んどみな樗牛一人の筆なり。爾來入りかはり、立ちかはり、二人にて書き、三人にて書き、四人にて書き、五六人にて書くも、竟に樗牛一人の當時に如かず。

既にして樗牛は太陽に移りて評論に才筆を揮ひ、評論壇の先輩たる逍遙、鷗外諸氏と對峙して、儼然たる一大强國の觀をなし、逍遙、鷗外、筆を中止するに及びて、天下の評論壇は、終に樗牛一人の舞臺となれり。かく筆を執るの傍、櫻痴、逍遙諸名士と伍して、演劇の改善を圖りしこともありき。而もなほ學業を怠らず、桑木、姉崎諸氏と共に、秀才多しと稱せられたる明治二十九年卒業の哲學科學生中の優等なりき。何ぞそれ綽々として餘裕あるや。

官立の學校に藉を有せざる一雜誌記者の樗牛が、留學の命に接したるは、實に當時の異數なり。病の爲に留學を得ざりしかども、病間筆を呵して論文を草すれば、文學博士の學

位は、忽ちその膝に落ちぬ。規則通りに、大學院五年の年限に於て、論文を草して博士となりたるも、また異數とすべきなり。君が大學に入りてより、死に至るまで、僅に九年半、その終りの二年半は、病床に惱みしが、實に君は短き年月に於て、花々しく活動せり。伊藤侯や大隈伯が、三四十年かゝりて政治界に贏ち得たる重望を、君は僅々數年間にて、文壇に贏ち得たり。男子生れて、こゝに至る。また以て偉とするに足る。君願くば瞑目せよ。五十年も一生なり。三十年も一生なり。百日紅の夏一夏を飾るも、花の一期。山櫻のぱつとひらきてぱつと散るも、また、花の一期なり。君はなほ朝陽に映發して、元氣よく散り行く山櫻の如きか。男子は、寧ろ太く短く花々しくやつてのけて、惜まれて死なむ。君の勝氣なる、一日も懶眠する能はず。爲に或は君の死期を早めしかも知るべからざれども、されども、君の短き一生を花々しからしめたり。また何ぞ憾みむや。さるにても、無情なる明治三十五年の年波は、天下の秀才、樗牛を誘ひ去つて、日本の文壇に深き恨みをきざめり。

君の本領は、いづれにありしか、知るべからず。されど君は何事でもよし、たゞ花々しく活動してのけむと期せしにはあらざるか。君、一面は非常に熱す。加ふるに才情、才筆を以てす。君が本來の面目は、それ詩人的か。されど君はまた世才に長じ、常識に富む。而して冷かなる處あり。卽ち胸熱して、頭ひやゝかなり。君やまた傑出せる學者となり得べき能力を有す。もし君の手より文と書物とを奪ひ去るも君はなほ才物なり。政治界に志したらむには、よしや、大臣たるの貫目はなしとするも、少くとも沼南、蘇峯ぐらゐの成功はありしなるべし。されど、政治界に頭角をあらはさむには、年効を要し、履歴を要し、多少の情實をも要す。單に力量のみにて成功すべきにあらず。君はそのまどろしきを厭ひて、念を政治に絕ちて、文壇に活動せしにはあらざるか。君は餘りに多角、多方面なり。何事も人より遙に傑出す。君が萬古不朽の大學者、大評論家、大文章家たる能はざりしは、年齡之を許さゞりしなり。少くとも今十年、壯健にして生存したらむには、學問界か、文章界かに、不朽の大事業を印せしなるべし。君は學者としては、主として美學を研究せむ

としたれど、君の病と君の夭折とは終に君をして美學上に新面目を開かしむるまでに成功せしめざりき。君が文壇に才筆を揮ひしは、生前にこそ花々しかりけれ。時代をつくるほどの影響はなかりしが如し。逍遙が小說神髓を著はして、日本の小說を一變したるが如き痕跡は殘らざらむ。されど、少壯の身を以て、評論を獨占し、獨立濶步、獅子頭を地にたれて吠え、百獸をして走り且つおそれしむるの觀を呈したるは、男子の能事畢れりと言はざるべからず。夭折したるは、命なり。君願くは瞑せよ。

もし君の成功にして稱すべきものを擧ぐれば、君の自ら好まざる所にせよ、それ雜誌記者たるにあるか。君や、政治家にはなり得べきも、恐らくは、才物の域にして、眞に偉大となり得べきを保する能はず。君や讀書を好めり。また才筆を有す。到底君は筆と書物とをなげうつべからず。もし單に學力のみを以てすれば、大學出身者の中にても、君にすぐれたる人少からず。才筆のみを以てすれば、恐らくは、當代獨步とまでは勝れたらざらむ。たゞ才學才筆兼備する點は、君は實に獨步なり。詩人的情熱をも有し、學者的思案思

索力をも有し、世才もうとからず、氣がきゝて、觀察奇警、識見凡ならず。筆を執れば、千言立どころに成り、才氣人を刺し、才情横逸す。學は哲學美學を主として、宗教、教育、歷史及び、語學は英獨和漢に亙り、東西の文學美術に通ず。文藝の評論として、君ばかり適當なるものは、他に之を見ず。余や悉く君の論旨に感服する能はざりしかど、縱横の論、堂々の筆、恰も戰國武士の風あり。言ふ所まがりたるも、とにかく人をして傾聽せしむるに足るは、君の才力の非凡なりしを知るべし。いつも斬新の言を吐かむことは期し難きものなれど、君の論はいよ〳〵出でゝ、いよ〳〵新に、讀者は翹足して、每月君の評論の出づるを樂しめり。かくて、君は常に文壇に問題を提供せり。君一たび口を開けば、反響四方に起る。群る批評家、こも〴〵鋒を君にむけて、可と稱し、否と叫ぶ。君、よき敵と見れば鋒を交へ、木葉武者と見れば、一睨して過ぐ。壯なるかな。君が評論壇に於ける花々しき態度は、當年關羽が千里獨行せしにも比すべし。君を目して、雜誌記者として成功せるものといはずんば、それ誰をかいはむ。嗚呼君にして不治の病にかゝらず、依然として

書を讀み、美學を研究し、官位に戀々たらず、妄りに大學の敎授とならむことを望まず、現世の地位は、布衣の一雜誌記者に甘んじ、ますく識見を長ずると共にますく才筆を揮ひ、よろづをなげうち、一身をさゝげて、之に熱中せしならば、明治の文壇はいかばかり花々しかるべきぞや。惜いかな、今や君卽ちなし。

余は君を忍ぶの情切なり。一々君を批評するに堪へず。されど、なほこの才人の爲に、語る所あらざるを得ず。余は君の文章を愛讀するもの丶一人なり。君の文は華麗より入りて、莊重に進めり。而もなほ才氣を失はず。瀧口入道は、やゝ浪六流の臭氣あり。我袖の記に至つて、體を西文に取りて才筆才情を逞しうせり。淸見瀉一篇に至りては、はじめて粉華を去りて、素顏の美人を露出す。文情楚にして、情哀切なり。恨むらくは、君の美文の多からざることを。君は詩才を有しながら、など多く詩をつくらざりけむ。君の論文も、近松を評論せし頃は、才華爛發せしと共に、多少稺氣もありき。日本主義を唱へし前後はやゝ乾燥に傾きしが、月光美、平家雜感を草する頃には、いよく圓熟し來り、粉華を去り

て、才氣を失はず。長編は莊重にして堂々たり。短文は鋭くして奇なり。されど、なほ、輕妙自在の趣は得ざりしが如し。君が評論家としての態度は、はじめは、成るべく、詩人的情熱を抑へて、冷靜なる哲學者を粧へり。平家雜感あたりより、多情多恨なる才子の面目をほのめかし、美的生活、清盛論、日蓮論等に至りては、最早ひやゝかなる哲學者にあらずして、溫かなる詩人なり。されど、君、詩人とならむには、餘りに才あり。學者とならむには、餘りに情あり。思ひ切つて放言を吐かむには、餘りに如才なし。君は竟に才子たるを免れず。晩年の作、煩悶の聲ありしを咎むるなかれ。蟲けらの類は、たゝかれても音なし。虎や、獅子や、難に逢へば、怒號せざるを得ず。到底枯木冷灰となる能はざるまでに、才氣と活氣とある樗牛が病中の作、虎獅の怒號に類するものある、また止むを得んや。樗牛が學者もしくは評論家としての俤は、おもに明治二十八年以後太陽に散見す。自らよりぬきて集めたるものは時代管見、文藝評論あり。世界文明史、近世美學なども、樗牛の爲に重きをなすものなるべく、釋迦傳、清盛傳は、少年の讀物として作りしに過ぎざるも

なほ樗牛が筆の美なる一班を伺ふべし。

要するに、夭折せし樗牛、雜誌記者として成功せりと云ふもの丶、未だ十分にその能力を發揮したりとは云ふべからず。余輩は、文壇の爲に、二豎の無情なるを痛歎せずんばあらず。余や曾て戯れに樗牛と弔文を爭ひしといへども、もと文章のみに就いて、多少の自信ありたりしに過ぎず。而して余の禿筆は、終に遺憾なく樗牛を弔すること能はず。あゝわれ終に筆を焚かむかな。余や樗牛と學朋なるも、天分ことなれり。才や、學や、識見や、すべての點に於て、君を友と呼ばむには、君はあまりにすぐれたり。樗牛や、何事も我が師なり。常に君の示教を受けたり。今や幽明さかひを異にして、また相見ること能はず。止んぬるかな。思へば、はかなき人の世、今日は弔ふも、明日は弔はる。明日知らぬ身と思へども暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ、と詠じけむ。樗牛を弔ふに當りて、この歌のはなはだ切なるを感ぜずんばあらず。

帝國文學創刊時代に於ける樗牛君

當年の文壇、硬文學としては德富蘇峯先生の『國民之友』あり、三宅雪嶺先生の『日本人』あり。軟文學としては坪内逍遙先生の『早稻田文學』あり、森鷗外先生の『柵草氏』あり。國文界には落合池邊兩先生盛名ありき。高等中學時代、校友會雜誌に腕を鍛ひたる文科大學の連中、何か一と旗あげたくてたまらず、終に我等二學年の連中、中心となりて、『帝國文學』を起したり。其中心中の中心は、高山樗牛君也。庶務を總理して女房役をつとめたるは、岡田正美君なり。外山、井上、上田諸先生大に力を添へられたるが、中心は先輩に在らずして、學生にありき。然るに世間にては帝國文學を文科大學の機關雜誌の如くに思ひて、大に歡迎したりき。樗牛君は之より先、その處女作の瀧口入道、讀賣新聞の懸賞小說に當選して、文壇の耳目を聳動せしめたりき。其叔父太田資順氏、大日本圖書株式會社に

在りて勢力あり。談は叔姪の間に決し、先輩側にては、洋行歸りほや〳〵の上田先生專ら事に當り、大日本圖書株式會社より出版すること丶なり、初號の賣高八千部に上りたるは、當時の文學雜誌としては異數なりき。初の委員は狩野直喜君、鹽井雨江君、(以上三年生)高山樗牛君、島久次郎君、(以上二年生)上田敏君、岡田正美君、內海月杖君、(以上一年生)の七人なりき。四號より委員改選せられたり。卽ち、畔柳芥舟君、佐々醒雪君、武島羽衣君、藤岡勝二君、余(以上二年生)上田敏君、岡田正美君(以上一年)の七人となれり。三號までの雜誌は、樗牛一人にて書きたり。而して余等委員となりし時には、樗牛君は既に太陽の時評に執筆して、逍遙鷗外の先輩と對峙し、天下を三分して其一を有つの概ありき。實に樗牛君は、學才もあり、文才もあり、世才もあり、學生中より既に紳士的にして、同學中、一頭地を拔き、妄りに他に追隨を許さゞりき。幕末長州の先輩中にて、高杉晋作獨り一頭地を拔き、伊藤公、山縣公、井上侯等、いづれも一目以上を置きたりとの事なるが、樗牛君の我等同學に於けるも、亦斯の如きかと思はれたり。編輯終る毎に、委員一同牛肉

店に會飲するが、此上もなき慰藉なりき。樗牛君折々來り會したり。而していろ〳〵世話を燒きたり。編輯所には、醒雪君の下宿を充てたり。當時誰も『帝國文學』が一學生の下宿にて編輯せらるゝものとは思ひかけざりしなるべし。樗牛君は力が非凡なる代りに、同人に對して、ちと傲慢なりき。一夜、醒雪君の下宿に、樗牛君と枕を竝べて一泊せしことあり。忠告するは、この時なりとて、われ露骨にその傲慢なることを諫めしに、樗牛君曰く、余は常に人を凌がむことを期す。その代りに裡面に於て人一倍の努力をする也と。吾此語を聞きて、男らしき覺悟なりと感じ入り、また言ふ所を知らざりき。驥尾に附するとの語あるが、われ、淺學菲才の身ながら、樗牛君を始め、其他諸秀才の驥尾に附したる御蔭にて、在學中、既に文名を知られ、筆を以て世に立つに至極都合よかりき。樗牛君世を去つてより既に十餘年、自ら顧みて我愚を知るにつけて、ます〳〵君の偉なるを感ぜずんばあらざる也。

正岡子規

子規の句

鎌倉や畑の中に月一つ

さすがに俳句の大家、正岡子規なり。國破れて山河あり。邸閣の跡は、今、畑となる。天邊一輪の月、曾て昔の繁華を照らし、今の寂寥を照らす。土窟の鮮血、化して青苔となり、八幡祠畔の銀杏、空しく天に聳ゆ。五山の華鯨眠りて吼えず、長谷の大佛、千年の興亡をよそに、超然として趺座す。忽ち鼕鼓の如く聞ゆるは、由井ケ濱に打寄する浪の音なるべし。千古の絶唱。子規の傑作。芭蕉の『夏草やつはものどもの夢の跡』にまさることと萬々なり。殊に鎌倉を詠ずる詩としては實に空前なり。恐らくは絶後なるべし。ついでに言

ふ、鎌倉も近年人家たちつゞくやうになりて、幽寂の趣は大に減じたり。子規のこの句は、明治二十年前の鎌倉を見て作りしなるべし。

子規の遺著

子規死して、その遺著世に出づるもの少なからず。その詳傳をものしたるものさへあり。されど余はなほ望む、子規の全集を出さんことを。一葉に全集あり。透谷に全集あり。紅葉、露伴、逍遙、鷗外なども、生前既にその作ほゞまとまれり。子規豈に全集なかるべけむや。

子規、病床にあること、七八年、日夕血と共に俳句を吐けり。天、才人を虐すること亦甚しい哉。されど、子規にして強壯なりしならば、或は其力を事業家として竭し、俳家として、專注せざりしかも知るべからず。兎に角に、子規の生命は俳句にあり。後に俳句の

歷史を草するものあらば、德川時代の芭蕉、その門下の十哲、及び蕪村、及び明治時代の子規を特筆せざるを得ざるべし。子規の俳句は悉くまとめて置きたきもの也。俳句、其他文學に關する評論も、子規獨特の見地あり。之を添へむ乎。一種新體の短歌も、子規が幾分の力を盡せり。第三には、之を缺くべからず。第四には、數十篇の新體詩あるべし。なほ余は曾て子規の漢詩を見たりき。小說をも見たりき。これ等は、子規の爲めに重きをなすに足らざれども、才人が多藝の一端を示すも、また可ならむ乎。かくて、ひとまとめとせば、たしかに、明治の文壇に、一種の異彩を放つべきものなるべしと信ず。

尾崎紅葉

尾崎紅葉を弔ふ

憶ひ起す。今より殆んど一年の昔とはなりぬる明治三十五年の暮、紅葉は胃癌にかゝりて、十一月に至りて、終に起たず。之を聞く、かの時の會飲は、酒樓にあらはれたる最後の紅葉なりきとかや。舊袍の酒痕、なほ存して、人は既にこの世にあらず。綠酒紅燈、今や、人生の恨事となる。悲しいかな。

文學上に於ける紅葉の功勞は、こゝに之を說かず。單に社會より見るに、紅葉は、江戶つ兒の粹にして、やゝ俳味を帶びたるものなり。一種の凝り性にして物ずきなりしこと、これ江戶つ兒的にして文に巧なりし所以なり。容貌は、にがみばしつた好男子、縱橫の舌、

最も對話に長じ、機智人を刺し、應答流るゝが如く、まことに席上の花なりき。態度擧止、氣がきゝて、垢拔けがしたりしが、筆蹟も、亦よくその人となりをあらはし、輕快滑脫にして、一種の雅致ありき。啻に筆の力のみならず、直に五尺の身を以て、硯友社の諸秀才を惹着し、更に門下幾多の俊髦を感化せり。

換菓篇一部、腐敗せる今の世に、溫々たる師弟の情誼を具體的に表出せり。君、筆をなげうつも、なほ社交場裡の一名物たりしことを失はず。

之を聞く、君の將に死なんとするや、看病せる門人をよびよせて、今世の名殘にとて、一々その面を熟視し、視終つて、いづれもみな、まづい顏をして居るなあと言ひけりとかや。紅葉の面目、この片言の中に躍動せるを覺ゆ。門人の顏を視て、ただ淚をこぼすのみならば、平凡なる事なれど、淚をかくして、うはべに、わざとひやかす處、これ紅葉が對話に長ぜる所以にして、兼ねて市井の江戸つ兒たるにとゞまらずして、文人として生命ありし所以なり。

紅葉の句

羽子板やそつと風ほど柳腰

紅葉は、小說の大家なり。また俳句の一方の雄也。俳句を以て、小說をつくり、好んで人事を詠ず。老舖の店前、松竹の色鮮やかなり。車上賀正の客、醉眼朦朧として、しきりに振り向く。箱入り娘年十七八、色は雪よりも白く、島田髷のほつれ毛春風にゆらぐ。隣家の娘も加はり、內小僧、大僧、番頭、圓くなりて、追羽子を爲す。小僧はひどく打たれて、泣きさうな聲を出すなるべし。娘うけそこなひて、羽子板腰邊に集まれど、たゞうつ眞似ですます。とりわけて、番頭は目をその腰邊に注ぐなるべし。一幅の活畫圖、情景躍動す。

東歸の露伴

幸田露伴翁、墨堤の草廬を出でゝ、京都大學の講師たりしこと凡そ一年、早くも官を擲ちて歸臥す。思ふに、三徑未だ荒れず、墨江の鱸、秋正に肥えたり。一竿の風月、墨堤は翁を得て、爲めに寂寞ならざる也。

翁が辭職の原因を聞くに、京都大學にては、翁を教授に推薦したるに、文部省にては、暫らく助教授となし置きて、然る後に教授とせむとて、議協はざりしより出でたりとの事也。果して然りとすれば、これ俗氣と俗氣との衝突也。學問界にはにがにがしき事也。

翁や博學多才、而して年なほ壯也。今後、官學には容れられずとするも、なほ早稻田をはじめ、私學少なからず。創作界には、さばかり大なることを期すべからざるも、翁の靈筆は、依然として天下の雄也。翁には、なほ未來あり。自重して可也。

鹽井雨江

世界唯一の大佛を仰ぎ、春日燈籠の數を數へ、七本杉を撫し、群る神鹿に餌を與へ、靑葉に巫女の舞ふを見、若草山に畿内の山川を顧望して、數日の旅寢いと樂しかりし奈良の舊都、掛けても思はんや、親友の遺骸を抱いて哭するの地とならんとは。われ筆を携へて箱根山中に入り、著述成るまで、山を出でずと自から誓ひ、人にも誓ひ、浮世の夏をよそにして秋を迎ふる程に、野尻先生の手簡、忽ち奈良より來る。鹽井雨江胃癌に罹れり。主治醫松本醫學士斯くと診斷し、京都の賀屋望月兩醫學博士も同じく斯くと診斷せり。主治醫の注意に因りて、未だ之を本人に告げず、家族にも告げず、されど妻君にだけは知らする必要ありと思ふ。來つて之を告げよとあるに、余は自から死を宣告せられたる如くに感じぬ。涙を湖畔の秋風に揮ひて山を下り、東京に歸りて雨江の二妹に圖る。二妹みな嫂に

も知らさゞれといふ。たまく余の従弟、支那に赴かんとして、来つて別を告ぐ。二妹の言に和して、決して知らすな。妻君に知らすれば、心の底自から擧動の末に露はれて、病人に悟らるべければ、いよく危篤となるまでは、知らさゞるを可とすといふ。われ平生從弟を信じ、己れの年を忘れて之に兄事す。殊に從弟は少時より多病にして、病の事に通ずること庸醫をして三舍を避けしむるばかりなれば、尽く其言に從はんと決心す。妹の福子、畫筆を擲ちて奈良に赴き、己れ一人承知して看病せむといふに、さらばとてわれ先づ發して奈良に赴きぬ。

雨江喜んで余を迎へ、先づ口を開いて曰く、余の病は胃癌に非ずやと思ひしに、賀屋博士の診斷に由れば、胃癌に非ずとの事なれば、安心せりと。われ之に機を得て答へて曰く、余の叔兄も胃癌に死せり。母も胃癌に死せり。君も或は然らずやと疑ひしが、胃癌に非ずと聞きて安心せりと。居ること一二日、雨江問うて曰く、松本醫學士は何と言ひ居るぞと。余答へて曰く、胃癌にはあらざれども、大患なれば、油斷すべからずと云ひ居れりと。余

は之に機を得て謂つて曰く、君と我といづれが先きに死ぬるかも知れざるが、われ先きに死なば、五人の子あり。君の負擔大なり。君若し先きに死ぬるとも、君の子は二人のみ。われは二兒を喪へり。君の二子を引受くるはわが二子が生きて居ると同じ事なり。又われに母なし。君の母を引受くるは我母が生きて居ると同じ事なり。毫も負擔には非ず。請ふ心を安んぜよと。雨江は衰弱して居れど、全く病床に横はるまでには非ず。食慾もあり。朝夕饌を共にす。酒を饗せらるゝまゝに、われは朝飲み、晝飲み、晩に飲む。雨江は全く杯を手にせず。われ雨江と相識りてより二十餘年、雨江と共に飲む酒は、いつも旨かりき。今や雨江は始めて共に飲む能はず。瀕死の親友を前に置きて、われ獨り飲む酒、豈に旨からんや。老母は我子が不治の病に罹れりとは、つゆ知らず、余に謝して曰く、遙々來りたるに、正男の共に飲む能はざるが殘念なり。病癒えなば、又來て、飲んでくれよと。あゝ、われこの世に於て雨江と共に飲むの期あらんや。年七十に垂んとして、唯一人の息子に先立たるゝ明日の歎や如何にと思へば、胸ふさがりて、言葉も出でず。十日の間、雨江の家

に飲みし酒の半は涙なりき。
　われは雨江を慰めんと欲して、强ひて氣を張りぬ。飲酒談笑、平常の如くに粧ひぬ。日每訪ひ來る吉田學軒を要して碁を圍み、雨江をして見物せしむ。我心豈に碁にあらんや。雨江に勸むれば、雨江勇氣を鼓して、唯一回我と鬪ひて止みぬ。これや雨江が碁の打仕舞なるべき。われ二度とは勸めざりき。
　胃癌といふ病は、今の醫術にては治する能はざる難病なるが、治する能はざればとて、醫藥を進めざるを得ず。まして胃癌を治したりとて、諸所より勸め來る藥あるに於てをや。われ一の塗り藥を持ちゆきて、之を腹部にぬるに、痛み薄らぐといふ。いと嬉し。手にて患部を壓して如何なる病をも治すといふ人、九州に在り。從弟この人にかゝりて病を治せしことあり。是非とも雨江に勸めよと云ふまゝに、之をすゝめたるが、雨江は信ぜざるさまなり。信ぜざれば致しかたなし。且つ松本醫學士に問へば、舟車にて身體を動かすことは胃癌に大害ありといふに、この一種の精神的療法は斷念せざるを得ざりき。雨江に漢方醫

の藥を勸むる人あり。雨江余に其可否を問ふ。すべて醫藥の効能の一半は、之を信ずるに在り。君信じて之に就けと云へば、雨江行きて藥をもらひ來る。されど、二たび行きし時には、雨江をして信ずる能はざらしむることありき。雨江之を余に語る。愚鈍余の如きものにても、げにと思ひぬ。最早口實を設けて、强ひて信ぜしむべくもあらずと思ひあきらめたり。

雨江の漢方醫に行きしこと二度、二度共、歸り來れば、疲勞甚しく、腹の痛み加はる。松本醫學士の言へるが如く、身を動かすことは、雨江の病に大害あるなり。嗚呼雨江は、この世にありては最早外出する能はず。われ平生遊行を好む。雨江の暇ある毎に、誘ひて共に遊行せり。雨江と共にすれば、如何ばかり樂しかるべき奈良公園ならましものをと思へど甲斐なし。をり〳〵二兒をつれて散步す。上なるは男にて十歲、下なるは女にて五歲、明日は孤兒となるべき身の上とも知らず、唯嬉々として余に從ひゆくに、われ何となく涙なきを得ざりき。

明治天皇崩御あらせられたる年なり。日本國中、人といふ人は皆慟哭して、天日爲めに光なきばかりなるに、奈良にはわけて天地の悲みを止めて、大木の風に倒れしもの、其數を知らず。公園一面、實に慘澹たる光景なるを、雨江の身に思ひあはせて、これも涙の種なり。二子の喜ぶこともやとて、鹿に煎餅を與ふるに、女の子は鹿を恐るゝさまなり。去つて猿澤池や鏡池に至り、二子をして思ふ存分、費用を惜まずして鯉に麩を與へしむること度かさなりぬ。女の子後には、勿體なければとて、自から辭するに至る。不便や、五歳の幼女、既に金錢の尊きことを知れるなり。

雨江余に二三の出版物を依囑す。あゝ金に緣なき我等同士は、不治の病にかゝりても、なほ腦漿をしぼりて、藥資を得るの方法を講ぜざるを得ざるなり。さるにても雨江の決心如何にと氣遣ひしに、一夕余に一首の歌を示しぬ。

命何(な)にそは唯露の身とは知れ思ひおく子の餘り小さき

是ある哉〳〵。この決心ある以上は、われはまた何をか言はむ。病の胃癌たり何たるかは、

つゆ雨江に知らするの必要なきなり　雨江は十三年前に父を喪へり。同胞とては、唯二妹の存するのみ。さらでだに學問上われ雨江に兄事せるに、一妹我に嫁して、今は義兄なり。福子看病に來るとも、奈良に親友ありとも、われを除きては、近親に男なし。われ留まりて、雨江の終焉まで看病せざるべからざれども、都に仕事を控へたる身なり。されど、やがて死ぬべき親友を、老いたる母と、幼なき子と、弱き女の身の妻君と、妹とに打任せて、我れいかでか立ち去らるべき。心に泣き、面に笑ひて、雨江の家に淹留すること一日又一日。十日ばかりの月日は、唯夢の如くに過ぎぬ。始めわれ奈良に來るや、雨江に氣の毒の思させじとて、病氣見舞の爲めにのみ來れりとは言はず。桃山御陵を參拜し、兼ねて畿内の山水を探らん爲めに來れりと聲言せり。一日桃山御陵に詣でゝ、一の目的は達しぬ。雨江は赤目四十八瀧の奇を說いて止まず。この夏、吉田、村島の二子と共に遊べり。紀行を草せんと思へど、今は筆を執る氣力なし。君請ふ一遊して之を記せよと云ふ。我れ領きしが、平生の旅行癖も何處へやら、この度は山水の間に優遊するの餘裕なかりき。

心待に待ちし福子、奈良に來る。直に入れちがひて立ち去るも如何にやと思ひて、なほ二三日は逗留しけるが、名殘のつくる期なければとて、漸く思ひ切つて雨江の家を辭す。今は笑顔を以て相別るとも、再び奈良に來らむ日は、涕涙一家に溢るべしと、雨江の家を顧みて、覺えず涙下る。福子送つて猿澤の池に至る。二兒隨ふ。例によりて鯉に麩を與へしむ。釆女祠外、柳條枯れて、生駒おろし身にしむ。卿の境遇は苦しかるべけれど、强ひて勇氣を鼓して兄君に盡されよと云へば、唯はいとばかりにて、涕涙眼に溢る。二兒は何故に泣くとは知らず、例によりて嬉々たるに、ひときは物のあはれを覺え、福子の前にこらへし涙、背きて後ほろ〳〵と下る。

都の子供への土產物など買ひて、奈良驛にいたり、切符を買はむとて、腹を探ぐれば腹卷なし。われ平生旅行する每に、大金は腹卷に入れ、小金は袂に投げ込み置くを常とす。土產物買ふほどは袂の小金にて間にあひしが、切符を買ふには間に合はず。雨江の家に置忘れたることを思ひ起して車を飛ばす。一家驚きて、何故歸りたるぞと問ふ。金の入り居

る腹巻を置き忘れて、切符を買ふこと能はざれば、それを取りに戻りたるなりと云へば、雨江笑ひ、老母笑ひ、二兒笑ひ、妻君笑ひ、福子笑ひ、見舞に來り居れる須藤夫人もまた笑ふ。これが臘井家に於ける最後の哄笑なるべしと思へば、悲しくもあり、可笑しくもあり。余もまた顏に笑ひ、次の發車まではとて、元氣を粧ひて、酒を飲み直しぬ。

われ物心覺えてより醫師にかゝりたることなけれど、青年時代の暴飮暴食、不規則の勉强等、今にたゝりて胃腸弱し。殊に十日の間、汗を出すまでの運動をせずして、無理に飮みし酒の結果、歸京の後に現はれ、頭腦茫然として、何事も手につかず。奈良へは知らさじと力めたれど、いつしか知れたり。雨江手紙のはしに、

病みよわる我身泣く度すこやかに君ましませと祈らるゝ哉

瀕死の病人に、このやうなる思をさせては相濟まずと思へど、今は詮方なし。われは平生運動して汗を出すを以て、唯一の養生法とせり。この運動不足の爲めに、すこし健康を損ひたれど、運動すれば癒る病なり。心を勞することなかれと言ひわけして、

行く秋のあはれを添ふる鹿の聲病みぬる君の如何に聞くらむ

と云ひやりけるに、雨江返し、

病む胸の先づ破れ來ていかにとも聞きだにかねつ夜半の鹿の音

と心がけたるが、夜に入りて、今鹿が鳴けりと雨江の注意してくるゝこと二三度ありしも、余の雨江を訪ひしは、鹿の鳴く頃なりき。歌の上にのみ知りたる鹿の聲は如何なる聲にかといよ〳〵聞耳立つれば、鹿は鳴かざりき。

三宅花圃女史、親戚の人胃癌を治したりとて、女子大學の弘田由己子女史にことづて、、一の藥を知らせくれらる。曰く、初期ならば、必ず治すと。福子に言ひやりて、之を飲ましめけるが、あゝ如何せん。雨江の胃癌は初期にはあらざりき。妻君にも知らさじとつとめたるが、野尻先生の言へるが如く、知らざるべからざる必要起りて毛戸法學博士より知らせられたり。されど老母には秘したり。雨江に秘したれど、慧敏の資なれば、自からそれと悟りけむ、手紙のはしに、『胃癌ではいかんと洒落れても追付かず』など言ひこしたり

き。

危篤となる一週間ぐらゐ前に知らせられたしと、主治醫に賴みおきけるに、大正二年と改まりて間もなく、一週間よりは長びくべけれども、如何なる變化起るかも知れざれば、君若し直に來る能はずんば、妻君でも早く來れと、吉田學軒を經て言ひこす。妻は直に末の男の子をつれて奈良に赴けり。余は職業上止むを得ず十日ばかりおくれたりき。前日甚しく出血して病勢一頓したれど、氣はなほたしかなり。余を見て、松本醫學士は何と云ひ居るぞと問ふ。危篤なれども、失望すべきほどには非ずと云へば、唯默してうなづく。萬一の事あらん後の事二つ三つ語りあひけるが、苦痛甚しくなりければ、その日はそのまゝにして止みぬ。三日の後、氣持よくなりしを機として、後事を問ひもし、言ひもしけるが、雨江の口にすることは、余の平生思ふ所にたがはず。雨江と余との間遺言として多く語るを要せざるなり。その後七八日、雨江は四十五歲を一期として、終に起たず。淡雪の降れる日なり。死に臨みて、老母も枕頭に來りぬ。二兒も來りぬ。門下生の松浦精一氏も恰も

神戸より來りぬ。雨江それ〲遺言しけるが、兒に向ひては、將來如何なる目に逢ひても、我れがついて居つてやるから、心をたしかに持てといふ。病中の作、

事あらば我名を呼べよ其處に我れ答へていづく道しるべせむ

の意を口に出しけるなり。母に向ひては、しつかりなされよといふ。

死なれじな老います母の明日の世を弱き妻子に打任かせつゝ

とは、病中の吟なり。老母にさきだち、幼兒を遺す心の中や如何ならむ。『大町君左樣なら』の一言を此世の言ひをさめとして、雨江は白玉樓中の人となりぬ。

雲井にもわけ上らんと若駒の勇みし春もありにしものを

雨江、氣鋭に志高かりしも、志終に伸ぶるを得ざりき。されど、

身は終に草に果てぬる露なれど淸かりし世ぞほこりなりける

辭世百首を作らんとして、八十五首に至りてその儘になり居れる手帖、空しく枕頭に橫はる。嗚呼鹽井正男の一生は寂寞たりき。されど、淸き詩人として鹽井雨江は千萬年の後

までも生くべきなり。

雨江も余も嘗て野尻先生の教授をうけたることありき。先生は舊師の身を以て、懇ろに雨江の病床を訪ひ、最後の火葬にまでも臨まる。雨江知るあらば、感涙に堪へざらむ。現に教を受けつゝある奈良女子高等師範學校の生徒は云ふも更なり。もと女子大學にて教をうけし人達は、雨江の重患を聞いて、慰問つぶさに至る。雨江はそれらの人々のあつき情をこめたる蒲團寢卷の中に、この世を去りぬ。野尻先生の厚志によりて、葬式はいと見事に新藥師寺に於て營まれたり。白毫寺畔の火葬場までも、國語漢文科の生徒はみな隨ひゆき、嗚咽の聲、高圓山も動くばかりなるに、余は十數年の昔を想ひ起さゞるを得ず。一夕酒酣にして、ふとしたる事のついでに、われ死なば蓆に卷きて海にでも投じてくるれば可なりといへば、雨江は、然らず、可憐の少女子の一群に送らるゝこそ我望みなれと云ひしことありけるが、今事實となりて眼前に現はれたるこそ悲しけれ。

毎年二月八日の夜、若草山の山燒は、奈良に於ける行事の一なるが、雨江の遺骨を擁し

て奈良を去る時は、恰も其夕に際したり。學校の職員其夫人を始め、心ある人々、雨江の所謂可憐の少女子の一群までも、泣いて遺骨を送る。赤き心の迸り出でしとのみ思はれて、若草の一山殷赤となりて天を衝く。その山中には雨江の足跡もあらむ。嗚呼詩人雨江の遺骨は、古今未聞の一種の門火に送られて奈良の古都を去りけるなり。

○

余の今住む家は、もと鹽井雨江の住みし家也。借家なるが、樹木は皆雨江の植ゑたる所也。梅あり、竹あり、桐あり、杉あり、青桐あり、一庭の主（ぬし）とも云ふべき松もありしが、惜しや枯れたり。栗、桃、柿、萘など、遺植今に子供を喜ばしむ。桑も少なからず。雨江は曾て蠶を養ひしことありき。雨江は猶鷄を飼ひしこともありき。家には唯藏書の堆かりしのみ。借家は借家なれど、もと家主が雨江の註文通りに建てゝ呉れたる家也。見かけ粗末なれども、中は寛かにして住心地善く、日當りも善く、風通しも善し。

人となりは、住居の樣にも見えて、雨江は此處に眞面目なる、質素なる、賢實なる、平

和なる生活を營みたりき。雨江の本領は、第一に詩人也、第二に國文學者也、而して廣からずとも深き國文學者也。第三に教育家也。而して眞摯にして感化力の深き教育家也。家庭にありては、子煩惱なると共に、親にやさしく、妻にやさしく、妹にやさしかりき。汎交を好まず、而して交る所に厚かりき。女子大學に往復するの外は、幾んど外出せず。背中を少し丸くし、眉間に皺を寄せ、さつさと小股に歩きし樣、今もなほ目に見るやう也。

今の第一高等學校が第一高等中學校と稱せし頃、余は本科一年に於て、雨江と共に學びたることありけるが、雨江は優等生なりき。されど余はその學力よりもその人となりに推服したりき。雨江はいつも級の總代となりて周旋し、勞を辭せず、難を恐れず。稚氣もあり、不平氣もありたるが、一種の俠氣もありたり。文才も一頭地を拔けり。雨江と反對に、余は劣等生なりき。終に最末席にて落第せり。余の一つ上なる人も落第せり。其人は爲めに自殺せり。されど余は自殺するの勇氣なかりき。二昔も前の一夢也。近く數年前、雨江語りて曰く、自殺したる人は常に余の家に來れり。且つ哀請する所ありしを以て、余は爲

めに運動して見たるが、あらゆる學科が不出來なればとて許されざりき。君は不出來の學科もあれど、出來のよき學科もあり。この人ならまだ見込ありと云はれたるが、當時余は君と親しからざりしを以て、君の運動はせざりきとて笑ふ。惜むらくは我れ當時君の家へ菓子折でも持ちゆかざりしことをとて、余も笑ひき。

雨江は在學中『山櫻』と題する歌の雜誌を發行したることありき。『女鑑』には、每號艶麗なる筆を以て婦人の傳を草したり。大學二年の時、スコットの傑作なる『湖上の美人』を韻文に飜譯して梓に上したるが、これ當時にありては破天荒也。新體詩は外山井上矢田部三博士に創まり、落合先生に中し、雨江に成るとでも云ふべきか。外山博士等は七五の形に新思想を盛りたり。されど、外形內容共に幼穉なりき。落合先生に至りて、外形整ひたり。雨江出でゝ內容外形共に始めて美術品的となれり。和洋を融和して一丸となせるの槪あり。殊に『湖上の美人』の如き長篇を一絲亂れず我韻文に移したる精力や非凡也。我詩界に貢獻したる功勞や大也。帝國文學出づるに及び、雨江は『深山の美人』と題する韻

文を出し、淸麗可憐の趣を窮めて雨江の名益高し。武島羽衣の詩名次いで擧れり。われ二子の驥尾に附して韻文を試作せしこともありき。『花紅葉』一篇は、二子の美文韻文に余の駄作を加へたるものなるが、幸にして天下の靑年男女に讀まれたり。その後、雨江には『暗香疎影』の著あり。雨江の長所は新體詩と和歌とにあれど、美文小說にも雨江獨得の妙あり。雨江は苦吟遲筆なりき。其代りに、決して成句を襲用せずして悉く獨創的也。雨江羽衣及び余三人の合著なる『國文學大綱』には、雨江は『香川景樹』を草せり。女子大學の講義錄に出したる『文學硏究』も雨江の苦心を見るべし。『新古今集講義』は、尨然たる大册子にして國文界に於ける不朽の大作也。本居宣長すら、新古今集の講義だけは失敗せし程にて、古來講義らしき講義なかりしが、雨江の講義出でゝ、殆ど完全に近く、後進者を益すること大也。前に古人を空しうするものと云ふべし。

雨江は明治二年一月を以て但馬豐岡に生れたり。父は豐岡藩士なるが、代々江戶詰なりき。母は江戶の人也。雨江には江戶兒の血まじれるが、重厚にして浮華輕佻を嫌へり。氣

前さつぱりして、金ばなれ綺麗也。洒落は言はざりしが、おり〳〵警拔の言を吐けり。醉へば氣焰大に擧れり。理想高かりしも、直覺力強く、且つ辛抱強くして、行、常軌を逸せず。父は氣骨ある武士肌の善人也。軀幹も長大也。雨江は其氣骨を受け傳へたるが、體つきと云ひ、心までも、母親そつくり也。父は維新の際、藩に引込みしが、雨江が六歲の時上京せり。いづくも同じ舊武士の境遇、所謂士族の商法に失敗せしこともあり。明治以後は不遇なりき。この間、母が內助の功の大なるものあり。雨江は和氣の溢るゝ家庭に生長して、所謂お坊樣風の俤もありしが、もと慧性也。殊に家道の辛酸を嘗めて、分別あり。一面は詩人的にして、一面は家庭的也。同胞とては、姉一人、妹二人のみなりければ、少時より我責任の大なりしことを自覺したりしなるべし。男の兄弟あらばと口にせしこともありき。雨江は眞情を以て余を弟視せり。されど我れは眞の愚弟なりき。放縱不遜の弟なりき。往時を追懷する每に、覺えず慚汗背を浹す。

聞く、雨江の家の系圖は、雨江の幼時、類燒に遇ひて燒失せりと。とにかくに鹽冶氏の

子孫也。従祖父は、青年の頃、火事を見んとて疾走せしに、誤つて轉びて、思ひがけずも、折りたるものあり。一念發起して、相州大山に上りて剃髪し、後終に一代の高僧となれり。外曾祖父は豪商の長男なりけるが、市井の間に銖錙を爭ふを屑とせず、一切の財産を弟に付して別家し、俳句の宗匠となりて、諸侯にまでも指南し、新宿の番所の役吏にさへなりて、佩刀を許さるゝ身となれり。外祖父また俳句を善くせり。父は書を淡泉堂に學びて、其印可を得、御家流の堂に上りし人也。母は慧性にして婉容あり。雨江は斯る家柄に生れたる也。

雨江が學校を出でゝ後の事業は、歌文の創作と著述と國文學研究と教育となりき。國文學中、殊に和歌に造詣する所ありき。奈良に赴任するに際し、余に謂つて曰く、余は親しく大和附近を遊行して萬葉集を研究せむと。雨江平生旅行を嫌ふにはあらねど、また好みもせざりしが、晩年は比較的に多く旅行したりき。萬葉集研究の傍、西行法師を研究し、腹案幾んど成りて壽命早く盡く。惜しい哉。瀕死苦悶の病床にありながら、余に謂つて曰

く、古來西行の墓と稱するもの諸所にあるが、余は定家卿の家集によりて河内にあるものが、其本當の墓なるを信ず。一たび訪ひしが、僧不在にて、要領を得ざりき。病癒えなば、是非今一度往いて訪はむと欲すと。以て其熱心を見るべし。病中自から起たざるを知り、笑つて曰く、古來辭世は大抵一首なるが、余は百首を詠まむと。惜しや、詠みて八十五首に至りて、起たざりき。

初め立教中學校に教鞭を執り、出雲の簸川中學校に轉じ、女子大學校に教授たること幾んど十年、思ふ所ありて、奈良女子高等師範學校教授となり、任にあること僅に三年なりき。到る所生徒に慕ひ仰がれざるは無し。師として一種獨得の德を備へたり。殊に生徒の作文を添削するに懇切を極めたること、世殆んど其比を見ず。雨江晩年に創作の少なかりしは、生徒に忠實にして、精力の大部分を作文添削に注ぎしに由る也。

明治四十三年の夏は、雨江の一家と余の一家と共に沼津に赴きて海水に浴せり。雨江は其子の虛弱なるを憂へたるが、海水浴は効能ありき。されど、母には適せず。母は入湯を

好む。翌年夏は、母にも都合よく、子にも都合よくせんとて、温泉と海水浴とを兼ねたる城崎温泉に赴けり。これ雨江の故郷也。よしや錦衣は纒はずとも、天下一品の詩人也。幼少にして都に上り、三十年ぶりにして再び故郷の青山に對す。感慨無量なりしなるべし。殊にその母と子とにつくせる心がけは、何ぞ一に可憐なるや。而して誰か知らんや、これ故郷の見納めの旅ならむとは。

雨江は平生楠公を崇拜せり。殊に小楠公を崇拜せり。金剛山へは生徒と共に上りしが、去年の春、余の長男雨江の家に赴きし時は、長男を伴ひて再び金剛山に上れり。更に笠置山にも上れり。而して『學生』に出したる楠公遺跡紀行が雨江の絶筆となりけるも、一種の因緣あるを覺ゆる也。

明治四十四年一月、われ一家の近況を十七字にしるして、雨江におくりしことあり。

芳文(よしぶみ)は固形物食ふなど禁ぜられ

草枯れて農學士ちと閉口し

妹を文男をり〳〵泣かす也
水浴で文衛文男は元氣也
雪中を文男裸で跳ね廻り
水浴を愛子はしたりせざつたり
竹馬に女の愛子までが乘り
ちごまけに結つて愛子は嬉しがり
四郎坊は相も變らずお馬書け
四郎坊はやつと獨りで箸を持ち
蜜柑さへ吸へば四郎は御機嫌で
四郎坊は間がいゝんちようと片言で
雪達摩おばあさんだと皆笑ひ
母の會愛子はこんど本を讀み

四郎のおもちやびつくり箱から蛇が出で

雨江の返事に、

母上はまめで毎日孫の世話
かばんさげてさつさと健男も學校へ
お清書の草紙を健男二册あげ
やんちやんと學校健男の日課なり
乳のまで若菜もねつくやうになり
お乳をばいじるはよいかと若菜聞き
君が代は千代と若菜も歌ひだし
若菜がとなんでも手を出すおちやつぴい
海苔の鑵祖母が太鼓に孫をどり
をばさんの畵に時々は弟子二人

霜燒が輕いで奈良がねだんあげ
お肴が無いので奈良の價はきまり
一本の晩酌腰辨の胸を下げ

雨江奈良に在ること三年、而かも其居は舊東大寺境内に在り。大佛殿を距ること僅々一二町に過ぎざるに、一度も大佛を拜觀したることなかりきと聞く。別に意味あるにあらず。唯氣が向かざるを以て、振りむきもせざる也。雨江は一に信念に動き、信念に止まれり。滔々たる名奔利走の徒と夐に其趣を異にする所以也。雨江と親しかりし奈良女子高等師範學校の一敎師は曰く、鹽井君は無愛嬌の愛嬌者なりと。同じ他の敎師曰く、鹽井君の顏は眼が可愛かりきと。げに、雨江は少しも邊幅を修めざりき。短小精悍の概もありて、慷慨悲歌せしこともありしが、女子大學の敎師となりし頃より、鋒鋩自から内に收まりて溫潤玉の如くになりき。聞く、雨江、奈良女子高等學校の生徒を伴ひて吉野山へ修學旅行に赴きしに、一醉漢、女生徒と侮りて戲れんとす。雨江怒つて大喝す。醉漢辟易して去る。平

生の優しきにも似ず、猛く雄々しきに、生徒一同敬服して措かざりきとぞ。さもあるべし、孔子曰く、仁者必ず勇ありと。

『春日野に時雨ふる見ゆ明日よりは紅葉かざゝむ高圓の山』と、萬葉歌人の詠じけむ、高圓山麓に茶毘して、遺骨は東京市外、堀内村常仙寺に葬る。五十日迄はとて、位牌を舊棲居の床の間に安置して、晝夜燈火と線香とを斷たず。春はいつしか庭に入りて、窓前の梅咲きそめ、鶯來り鳴くこと頻り也。都のかたほとり、人家たてこみたれど、鶯はなほ舊を忘れざるにや。雀や鴉の聲のみ聞きなれたる耳に、いとなつかし。それにつけても忍ばるるは、雨江の人となり也。雨江を譬ふれば、梅に啼く鶯也。人家の間に食をあさりまはる雀や鴉にはあらざる也。

酒に死せる押川春浪

草木も眠る眞夜中に、どん〲と雨戸を叩くものあり。起き出でゝ見れば、押川春浪と鷹野止水と也。迎へ入れて、對酌して曉に達す。止水去れり。春浪なほ留まりて、なほ對酌して、正午を過ぎたり。共に出でゝ宮崎來城を訪ひ、又飮む。夜半に至りて辭し去る。春浪、前に在り。余、後に在り。春浪ふと立ちとまり、五紋付のきびらの羽織を脫ぎ、之をやるとて、余に渡さんとす。余は要らぬとて、受取らず。さきに來城を訪はんとする途中、絽羽織のぐにや〱したるよりは、きびらのぴんとしたるが、見ても氣持よし。殊によく君に似合へりとて褒めしことありしが、思ふに春浪は今俄に其言を思ひ出したるなるべし。一旦言ひ出しては、後へは引かぬ氣象、僕も要らず、君も要らず、さらば兩人に無

用なるものなり。打棄てんとて、桑畑の中に投ぐ。我れ拾ひ來りて渡さむとするに、受取らず。肩にかくれば、振り落して顧みもせず。君も要らず。僕も要らず。これでは愈棄つるが，承知かと云へば、言ふにや及ぶといふ。さらばとて、われ桑畑の中に投げたり。東大久保なる前田侯別莊の裏門のあたり也。一方は土手、一方は田、明月天に冲す。見渡す限り、人家なく、人籟全く絶えて、乾坤の間、唯蛙聲の閣々たるを聞く。昨夜來殆んど一晝夜も飲みつゞけたるに、余は疲れたりっされど、所謂梯子酒の春浪の事なれば、このまにては別れまじ。三十六計、にぐるに若かずと思へど、競走の妙を得たる春浪の事なれば、必ず追ひ付かれむ。よし〳〵狸寢入をして見むとて、土手にどつかと腰をおろし、春浪君、僕は眠くて一歩も歩かれず。こゝに寢て行く。これにて失敬と云へば、君を棄てゝは行かれずと云ふ。馬鹿なことを云ひ給ふな。路傍に醉臥することが僕の癖なることは、君も承知せる所ならずや。殊に錢は一文も持ち居らず。たつた單衣一枚にて幕天席地、何も心配することは無し。君はさつさと行き給へと云ひすてゝ仰臥す。草に置ける露、肌に

浸む。春浪も腰をおろしけるが、暫くして余を呼ぶ。余答へず。余の手を引く、余なほ起きず。余の兩手を把つて路上に引きずる。余なほ狸寢入を續く。春浪終に閉口して立去れり。首を囘らせば、既に十年一昔となりぬ。當時春浪は三十になるやならずの血氣盛り、盛に飲みて、盛に氣焰を吐けり。春浪も余も共に博文館に机を並べ居りたりしが、余博文館を追はれて後は、久しく相見るの機を得ざりき。明治四十五年が大正元年と改まりてよりまだ二ヶ月とは經たぬ程の事也。われ箱根山上にたてこもりて著述に苦心しけるに、思ひがけずも、春浪に邂逅す。されど、當年の俤は何處へやら、病み衰へて、形容枯槁せり。夫人看護にとて、附添へり。一夕春浪君夫妻をボートに乘せて、余一人にて漕ぐ。肯かぬ氣の春浪、僕に一つの櫂を渡せといふ。止めよと云へども肯かず。一つの櫂を渡したるが、二三分にして止みぬ。月明かに、風清く、金波湖心に涌く。西に富士山、東に鞍掛山、文庫山、南に三國山、北に神山、駒ヶ嶽、二子山、離宮塔ヶ島の上に縹渺たり。むかしの春浪ならば、如何にか樂しからむ。われ暗に涙を吞む。夫人曰く、貴方は相變らず、お達

者で元氣で結構也と。病める夫を介抱せる夫人の心中を思ひて、われ更に暗涙を呑む。

嗚呼春浪君は、三十八歳の壯齡を以て、世を去れり。さる文人の連中の机を並べたる處にて、春浪君の噂はじまり、さて、春浪逝けり。この次に死すべき文士は誰なるか。先づ大町桂月ならずやと云ひあへりとかや。如何なれば、斯かることが話柄となりしぞと想像するに、春浪は大いに酒を呑めり。故に早世せり。桂月も善く飲む。また同じく天命を全うする能はざらむかと心配せられたるにあらざるか。われ何時死ぬるかを知らざるが、死ぬるまでは、活きて居る也。『酒不レ到二劉伶墓上土一』、死しては酒は飲めざる也。藤田東湖が『瓢兮』の詩の中に曰く、『天壽有レ命非二汝罪一。姓名且附二驥尾一傳』と。世上、下戸の徒、以爲へらく、酒は人の生命を短かくすと。されど、七福神の一に數へられたる福祿壽を見よ。現に支那にありたりし人也。賣卜を業として、酒に代ふ。朝に召されて、何歳なるかと問はれたるに、臣は酒を飲まずんば物言ふ能はずといふ。酒を飲まさる。因つて曰く、臣は黄河の澄むを幾度も見たりと。黄河は千年にして一度澄むと稱せらる。其黄河の澄む

を見たる福祿壽は數千年も活きたる譯也。而して善く酒を呑めり。酒豈に必ずしも人の生命を短くするものならむや。されど春浪君は或は酒の爲めに生命を縮められたるかもしれず。果して然らば、共に痛飮したりし余も、其責なしといふを得ず。恐縮千萬の次第也。

嗚呼押川春浪君は逝けり。人、神にあらざる以上は、何人も長所あると共に短所なきにはあらず。春浪君は酒癖のみならず、他に短所もありしなるべし。されど、春浪君は、澆季の世に、よくも斯る快男子がと思はるゝ人なりき。金錢を視ること土芥の如く、死を視ること歸するが如く、不義不正を視ること蛇蝎の如く、明治の文壇に冒險小說の一派を開きて士氣を鼓舞し、兼ねて運動に青年を鼓舞せり。雜誌の『冒險世界』は春浪に依りて創まれり。後、轉じて『武俠世界』を創めたり。武俠冒險が春浪か、春浪が武俠冒險かと、世を擧つて仰望せしむ。偉なる哉春浪君、君の肉體は朽つることあるも、君の精神は死するものにあらず。君の精神の死なんときは、卽ち我が日本帝國の滅亡せむ時也。日本帝國の存在する限りは、君や死せず。嗚呼押川春浪君、願くは瞑目せられよ。

醉中の小栗風葉

風葉は小說家中の快男子なり。一身すべて、これ才と氣、胸中の磊塊、酒に和して迸り出づ。嘗て共に一酒樓に飲む。一座五六人、みな文壇の名士なり。一婢、紙を展べて揮毫を乞ふ。みな諾して書す。句あり。詩あり。畫あり。他の婦、同じく乞ふ。また書す。その婦、生意氣にも、梅花の傍に、茅屋を書き加ふ。風葉見て、その紙を引きやぶき、呵々大笑す。かゝる處に、風葉の面目躍如たるを覺ゆるなり。

田岡嶺雲

不仕合せなる田岡嶺雲

世の所謂不仕合せなる人を大別すれば、二通りあり。その一は、大我的の人なるが、識見あり、主義あり、信念ありて、一身の得喪、生死の外に超脱し、世の爲め道の爲めに、言はねばならぬことを言ひ、爲さねばならぬことを爲すものなり。その二は、小我的の人にして、或は才を恃み、或は氣を負ひて、狷介孤峭、入りても、出でても、兎角、身邊の事が癪にさはりて、不平多く、愚痴の絶えざるもの也。この二者いづれにしても、世の所謂仕合なるべき筈なし。而して、形は同じく不仕合なれども、その心には雲泥の差あり。前者は小我の外に、大我あり。仕合不仕合には、必ずしも重きを置かず。風吹かば吹け、

雨降らば降れ、鼎鑊何ぞ辭せん。一身は七裂八裂に任かす。如何に迫害せらるゝも人を怨みず。死すとも天を咎めず。後者は小我の外に、大我なし。小達すれば天にも昇る心地し、小窮すれば、地獄にも落ちたる心地す。氣隨が通らざればとて人を怨み、我儘が通らざればとて天を咎む。前者の不仕合は覺悟の上なり。不仕合の中に、樂天地あり。後者の不仕合は、覺悟を經たるものにあらず。不仕合の中に閒日月なし。前者を譬ふれば、巖頭に吠ゆる獅子也。後者を譬ふれば、藩裡にもがく小羊也。

田岡嶺雲嘗て高等學校に入りたれども、病の爲に退學し、後に文科大學の選科を卒業して、教員となり、新聞記者となり、津山に赴き、水戸に赴き、支那に赴きたれど、志を得ず。終に不治の病に罹りて、一室の外に出る能はず。妻もなければ子もなし。嶺雲の如きは世の所謂不仕合なるもの也。されど知らず、前者か、後者か。

われ嶺雲の文を讀むこと久し。嶺雲の文には、氣あり、熱あり、血あり、涙あり。嶺雲よく人を罵る。されど、人を憎んで罵るにあらず。主義に因りて罵る也。嶺雲よく世を嘲

る。されど、世を恨んで嘲るに非ず。信念に因りて嘲る也。窮して屈せず。苦んで其志を墮さず。不治の病に罹りても、窮愁の言を吐かず。悠然として學を講じ、泰然として文を作る。文を作るが故に、文士と言はゞ、言ふべけれども、武士の血を傳へたる文士也。不仕合とは云へ、斷じてこれ、前者の不仕合也。

われ嶺雲の不仕合なるを悲む。されど、不仕合の中に、儼然として武士的態度を有するを欽す。世は封建時代を去ること久しくなるにつれて、嶺雲の如き武士的文士、漸く其跡を絕たんとす。嗚呼わが嶺雲自愛せよ。

數奇なる田岡嶺雲

わが友田岡嶺雲、終に日光の客舍に逝きぬ。嶺雲が醫師より不治の病を宣告せられたるは、既に數年の前に在り。醫師は曰く、一年半の命しか無かるべしと。さるに一年半を經

とも、死せず。其後更に一年半を經れども、なほ死せざりき。其間、嶺雲は泰然として生死を度外に付したり。而して靜に書を讀めり。矻々として著述に從事せり。毫も死神の直ちに後に逼れるを知らざるが如し。數奇傳の一部、實に其最後の著述なり。在來我國に自叙傳なきに非るが、數奇傳の如き瑕瑜掩はざる思ひ切つたる書き方の自叙傳は、全く空前也。嗚呼嶺雲は數奇傳を以て死せり。一死大に振ひたる哉。西行法師歌つて曰く『願はくは花の下にて我死なんそのきさらぎの望月の頃』と。同じく死ぬるなら關東第一の名山なる日光山の下、世にも淸冽を極むる大谷川の畔。嶺雲は死所を得たる哉。

晩成の人たるべき齋藤野の人

嗚呼、齋藤野の人逝けり。われ、はじめて野の人に逢ひし時、謂つて曰く、君は不肖の弟なりと。われ、在來この筆法の惡謔を初見の人に試みしこと少なからず。嘗て之を馬場孤蝶に試みたりき。横井時雄にも試みたりき。新渡戸博士にも試みたりき。

余はかく野の人に向つて試みし時、野の人の之に應ぜし態度より判じて、決して不肖の弟にあらざることを知れり。近く太陽に出でたる嘲風博士の弔文を讀み、それと竝びて出でたる野の人の絕筆、吾が意志の一篇を讀みて、益々不肖の弟にあらざることを知れり。

野の人の兄、高山樗牛は、絕大の奇才なり。その才や、その學や、其人物や、才華爛發、常人をして走り且つ僵れしむ。されど、野の人だけの精神氣魄ありしや否やは疑問也。樗

牛心交の友なる嘲風も云へり、意志の鞏固なることは、樗牛その弟に及ばずと。

野の人は其兄より數年おくれて大學を出でたるも、兄の如き名は無し。その名の如く、野の人なり。名を求めず。榮達を求めず。妻までも求めず。兄弟みな肺病に倒れ、己れも亦同じく肺病に罹りたるも、窮愁の言を吐かず。さればとて、茫然自失せるにはあらず。よく貧に處し、錢盡くるも晏然として、一日も研究の歩をとゞめず。十九世紀文明の由る所を窮めて、希臘主義に到達し、希臘語を修めて、ホメールの原詩を味ひ、餘勇日本に及びて、北齋を或點に於て世界一と稱し、在來奈良朝の美術史を研究せしものゝ妄を辨ぜむとす。これ豈に不肖の弟ならむや。

樗牛の文は、氣が利きて、而かも步趨堂々たり。野の人の文は、多少の才もあり、殊に氣熱もありたれど、緩くして間の拔けたる所もあり。文字の使用のおぼつかなき所さへあり。察するに、これ漢學の素養の有無深淺によりて岐れたる所多きにあらざるか。少くとも、文字の使用の技倆は、これより岐れたるべしと信ず。嘲風博士とても、亦之を免れず。

唯野の人に比すれば、やゝ氣が利きて、女性的優美の分子あるを異なれりとす。さは云へ誠意を以て兄を引導し、また弟を引導す。高山兄弟は、生前も、死後も、嘲風の厚情に浴すること大也。涙あるの人と云ふべき哉。われ野の人と相見しこと二三回に過ぎざるが、同じく大久保村に住めり。日夕其門前を往來す。而して入らず。野の人も亦我を訪はず。折り〳〵其家よりピアノの音の洩るゝを聞きたり。これ不治の病に雌伏する人の手すさびかと、心には、世の無情を感ぜざりしにもあらず。さきに小泉八雲先生も、同じく大久保村に逝けり。大久保村何ぞ精神の人に緣あるや。われは未だ佛敎の不死不生、耶蘇敎の靈魂不滅を信ずるまでには至らざれども、精神の不滅は、之を信ず。精神に大小强弱あり。野の人の精神は强くして大也。宇宙間に印象すること深かるべし。戸山原頭、銃聲絕えて、天地闃寂たるの夜、八雲先生と野の人との精神相會して、天花繽紛、異香よもに逆ることもやあらむ。世に、早熟の人あり。晩成の人あり。野の人は晩成の人なるべし。其志の半ばにして逝きたるは、惜むべけれども、其精神は永劫波動して絕えじ野の人瞑せよ。

一代の才人齋藤綠雨

棺を蓋うて名、定まる。綠雨死せり。二三度面晤せしに過ぎざるも、その文才に感歎するものなり。友として弔はむに由なし。むしろ冷かにその長所を評論するが、亡き文士を弔ふ所以ならずとせむや。

綠雨が一生の間、世に殘したるは、十數篇の小說と皮肉漫評とあるに過ぎず。殊に晩年は、全く小說の筆を絕ちて、をり〳〵漫評をものせしのみ。その皮肉の筆は、ほとんど綠雨の獨壇なりき。余は必ずしもその小說に感服せず。その評論にも感服せず。されど一種の文章家として、その文才に感服せざるを得ず。綠雨は、明治年間、最も文章に苦心したる一人なり。鏤心雕骨とは、この人の謂ひか。その筆、鋭くして氣力あり。思ふに、その

人、氣を以て勝れたるものにて、心こまかく、觀察凡ならず。その文を屬するや、經營慘澹、一字苟くもせず。句々すべて金玉なり。滿腔詩趣あり、巧緻纖麗、恰も錦繡の如き叙事の文もあれば、放言痛罵、奇矯極めて人の肺腑を刺す漫評の筆もあり。才情と鬱麟不平の氣とを兼ね備へて、よく美しく又よく奇なり。殊に其寸鐵殺人的の評論は、綠雨の前に綠雨なく、綠雨の後に綠雨なからむ。

その文、日本の文壇に異彩を放てり。餘り鍛錬に過ぐれば、文却つて生氣を失ふことあり。紅葉の如きは時にこの弊あるを免れざりしかど、綠雨に、この弊なかりしは、才あるのみならず、かねて氣ありたればなり。

余はまた綠雨に於て、藝術的良心を見る。この點は、紅葉に相同じ。文士、文を賣れば、境遇上、濫作せざるを得ざることあれども、藝術的精神あるものは、決して氣に入らぬ作を公にせず。一生窮境に在りたるが如し。彼が才筆と名聲とを以てすれば、多く文を作りて、身を窮境より脫せむことは、必ずしも難からざるべし。されど、彼は氣に入らざれば、

妄りに作らざりしなり。如何に窮するも妄りに作らざりしなり。されば、彼の作は多からず。されど、その作は、總てみな彼の心血を灑ぎたる好文字なり。綠雨の評論は、觀察一方に偏し、すね過ぎ、ひがみ過ぎ、繼兒的眼孔を以て、人生を觀たるが如き弊あれども、寸言の中に、往々直觀的眞理を見る。多く書を讀み、多く古人の思想の跡をたどりて、正大らしく議論の陣を立つるは、難きに似て、實は易し。こけおどしには都合よけれど、さまで價値あるものにあらず。綠雨や、才と氣とを以て、書物以外に、人生を直觀す。而してよく奇警なるものあり。適切なるものあり。これ村學究輩の容易に企及すべからざる所。綠雨の評論は、この點に於て價値あるなり。

綠雨はもと小說を以て文壇に立ちたるものなるが、何故に之を早く廢したるか。思ふに、目の方が肥えすぎて、其手腕其藝術的良心にかなはざるを自覺したるに因るなるべし。綠雨は、明治の一小說家なれども、終に第一流の小說家にはあらず。その漫評は、或は自ら本意とせるものにあらざるべけれども、彼の本色は、却つて之にあらはれたり。時に通を

ふり廻はすが如きは、たま〳〵以てその心こまかく、觀察のするどきを見るべし。齒牙にかくるにも足らざる攻擊にも、必ず答へでは止まざりしは、量なきに似たれども、また詩人的性格として妨げず。

之を要するに、その人奇にして、文も從つて奇なり。一生の心血を文章に寄せて、その文、千古、文壇に異彩を放つに足り、詩人に最も重んずべき藝術的良心を具へ、村學態度をはなれ、眞理を直觀したるは綠雨の特長にして、綠雨が文人にして生命ある所なり。

あはれや、一代の才人、早く不治の病に罹り、殘んど一生を轗軻落魄の間に過し、末路殊に悲慘を極めて、有情の士をして、酸鼻に堪へざらしむるも、死すれば凡て夢也。天は綠雨の肉體を苦めたり。されど綠雨の才筆は永く天地の間に留る。之を以て、彼にかふべけむや。

若し余が綠雨にあきたらぬ所を云はゞ、過敏、奇矯、狹量、すねること、ひがむこと、通がることなどに失して、正大、高雅、豪壯、洒脫、溫藉などの趣を缺く。紅葉を藝者の文字ある者とすれば、綠雨は酌婦の文字ある者なり。共に女性的文士なり。

才の人福地櫻痴

櫻痴は、才の人なりとは、萬口一音に云ふ所なるべし。元來、才は、世に必要なるものなれども、尊くはあらぬもの也。櫻痴は、才の人の中の才の人也。才の人は、浮世に衣食するには、調法なれど、づぬけて、えらくはなれず。才の人なる櫻痴は、何をさせても、人並よりは、少しよく出來たり。口も達者也、本もよめる、字もかける、世才もあり、學才もあり。之を役人にすれば、書記官、もしくは、秘書官の材也。大臣の器にあらず。會社にもちゆけば、重役になり得べきも、社長となりて、奇利を博し得べき手腕もなく、貫目もなかるべし。むかしは、大久保、木戶、伊藤、大隈諸公に愛せられしとの事なるが、これその才の憐まれしなるべし。到底、櫻痴は、使はるゝ人也。使ふ人に非ず。げに櫻痴

の一身は、すべてこれ才。いろ〳〵の才が有りすぎて、智無し。あつても小也。學なし。あつても、これといふ專門の學はあらず。識なし。あつても遠大にはあらず。涙なし。あつても血をふくめる涙はあらず。たゞ輕薄ならず、不人情ならずといふまで也。小才子よりは、少し上の才子也。氣はあれども、膽は無し。少しばかりの瘦我慢はあれども、骨は無し。情にもろくして、酷薄な事はせず。潔癖にして、人に迷惑かけず。野心あり、名譽心盛なれど銅臭は帶びず。この點が、少しばかり詩人肌也。全くの俗物には非ず。されど詩人に非ず。高士に非ず。仁人にあらず。政治家にあらず。學者に非ず。豪傑に非ず。少し大なる才子也。世に調法なる人也。毒にもならねば、かくべつ、藥にもならず。

一代の文章家藤岡東圃

嗚呼、藤岡東圃は果して死したるか。凡そ十日前、外濠線の電車の中にて、偶然久しぶりにて相逢ふ。電車の中とて、精しく相語るに由なかりき。誰か圖らむや、今日忽ち其訃音に接せむとは。

思へば、電車の中の邂逅は、今生の見納なりき。其時、東圃は弱りたる病體也。されど、東圃の病體は、今日に始まりたるに非ず。十數年前、余が東圃を見知りたる時、既に病體なりき。白巾を頸にまきて、ぜい〳〵言ひ居りたりき。なほ聞けば、東圃の病體は、その時に始まりたるに非ず。少年の時既に喘息にかゝりて、四十一年の一生を病の中に送りたる也。われはじめて見し時、肺結核かと思ひしが、喘息と聞いて安心しぬ。喘息の人は肺

結核にかゝることなしと聞いて、益々安心しぬ。世に所謂柳に雪折れなし。東圃は蒲柳の質のまゝに長つゞきがすべしと思ひ居りしに、嗚呼天公は何の意ぞ。一朝俄に東圃を五雲閣上に招きぬ。

病間とは、げに、東圃の謂也。東圃は病中に閒日月を得たる人也。病中の讀書に樂境を得たる人なり。われ世の學者文人に逢ひたること少なからず。されど、東圃の顏ばかり俗氣の無き顏を見たることなし。東圃は四十一歲になりても、童顏也。否、佛顏也。われ東圃に逢ひし每に、何となく尊く感ぜられて、覺えず襟を正さずんばあらず。

十數年前、平田鏗二郞氏との共著となりたる日本風俗史は、われ嘗て一讀したりき。これ當時にありては、破天荒の著也。數年前、世に出でたる國文學全史平安朝編も一讀したりき。日本の文學史は少なからざれど、東圃の著に於て、われ始めて文學の鑑識を見たり。兼ねて創見をも見たり。以爲へらく、東圃は優に博士たる力量ある人也。大學の國文科は、東圃あるが爲めに重きを成せる也。われはまた異本山家集に、東圃の西行研究も凡ならざ

るを見たり。最も傑作と稱せらるゝ近世繪畫史は、われ未だ讀まざれども、東圃が繪畫に關する批評と史論とは、在來多くの雜誌に於て見たり。東圃は、常に文學のみならず、繪畫に於ても、鑑識と創見とを備へたり。その繪畫史が、この種の著述にて天下無類なることも推して知らるゝなり。

なほ東圃は一代の文章家也。少くとも、國文學界第一の文才也。美しくして浮華ならず。澁くして枯淡ならず。才あり、情あり、氣あり、而かも識ありて、運用の妙、波瀾の巧、優に一家の風格を備へて、天下の逸品たるを失はず。東圃の文才はなほ韻文にも及びたりき。嗚呼、東圃は篤學の君子也。文章の大家也。仙骨ある高士也。國文界の大家也。美術界一方の重鎭也。然るに今や亡し。

嗚呼、東圃は果して死したるか。われ訃報を手にして、感慨措く能はず。起ちては坐り坐りては起つ。初春の日影うらゝかに、そよと吹く風だにもなく、窓前一樹の梅の花、空しく脈々として淸香を送る。

交番に小便したる芳賀博士

中村敬宇、或時交番と便所とを間違へて、交番に小便せしことありとて、世に有名なり。敬宇は强度の近視眼なれば、斯く交番と便所とを間違へたるなりと云ひ傳ふれども、眞僞はわからず。もしも單に近視眼故に交番へ小便したるものとすれば、振つた話には非ず。先年芳賀博士も深夜交番に小便し、爲めに警察署に伴れ行かれ、過料金を取られしことあり。例の大醉の餘りに交番と便所とを間違へたるならむと云ひ、又近視眼の故に交番と便所とを間違へたるならむと云ひて、世人は之を一笑に付せり。淺い哉凡俗の見解や。

余は六七度の近視眼也。而して酒も人並には飮むもの也。如何に近視眼なればとて、眼鏡を掛けて居れば、決して交番と便所とを間違ふるものに非ず。又如何に醉ひたればとて、

所謂『上戸、本性あり』。決して交番と便所とを間違ふものに非ず。よしや、交番と便所とを間違ふるとも、巡査が眼を開いて居りさへすれば、交番の中へ小便をさせるべき筈のものに非ず。交番に小便せらるゝは、必ずや巡査が眠り居りし也。讀者諸君、警衞の任に當れる巡査が、夜中眠りて可なるものなる乎。

芳賀博士は、帝國大學の教授也。國文の大家也。帝國大學の講座にて、國文を講義して居れば、それにて濟む身分也。交番の巡査が眠らうが、眠るまいが、そんな事は大目に見て可なれども、博士は尋常一樣の學者に非ず。血あり、涙あり、骨あり。都下二百萬の蒼生の爲めに、巡査の職を盡さゞる巡査を見遁がさゞる也。それも一度なら、或は見遁がすべし。夜遲く歸る每に、交番の巡査の眠り居るを見ては、豈に市民の爲めに公憤を發せざるを得んや。その公憤發して、小便となれり。而して眠れる巡査の眼を覺ましたり。嗚呼芳賀博士は口を以てせずして、小便を以て巡査を說法して見たる也。

愚なる巡査は、己れの罪を棚にあげて、博士を警察に伴れゆけり。規則通りに過料を取

れり。愚なる凡俗は、芳賀博士を小便博士と嘲れり。然るに機敏なる『萬朝報』は、忽ち悟る所あり。一夜深更社員を擧つて、都下到る處の交番を探偵せしめ、然る後、全紙を其報道の記事に充てたり。巡査の勤怠一々紙上に明かになれり。是に於て、都下の巡査一般の眠覺めたり。警察署長の眠覺めたり。警視總監の眠覺めたり。怠れる巡査は、それぐ〵處罰せられたり。これより後、交番に小便する人なきのみならず、在來頻々たりし盗難や、強姦や、あらゆる災難、ぱつたり止みたり。東京市中二百萬の蒼生の財産生命は、芳賀博士の小便の御蔭にて安全なるを得たる也。世にも尊き芳賀博士の小便ならずや。

腹のせまき山路愛山

われ、中央公論に於ける山路愛山の新靖獻遺言の論を讀みて、その人となりをゆかしく思ひぬ。その論の要に曰く「嘗て靖獻遺言を讀みけるが、以爲へらく、これ失敗者の歴史なり。男子飽くまでも、我が力を發展すべし。失敗者の歴史の如きは、之を學ぶの必要なしと。然るに、今にいたりて、又以爲へらく、われ誤れり。靖獻遺言は失敗者といふよりも、むしろ犧牲者といふべき者の歴史なり。世の中の事業には、犧牲者なかるべからず。今や、世俗滔々として利己主義の途に奔りて、獻身犧牲の精神を解するもの稀なり。大に新靖獻遺言を起して、この弊風を矯めざるべからず」云々。余おもへらく、これを飾らず、衒はず、腹からの本音を吐きたるものにて、時弊に的中せるの言なりと。

然るに、近く五月十五日の國民新聞に於ける愛山の書齋獨語を讀むに至りて、われは、大に失望しぬ。余は、斷言せざるを得ず、さきの愛山の言は、腹からの本音にはあらざりき。愛山は、まだ〳〵、靖獻遺言はわからざるなりと。其書齋獨語の言を摘出せむに、「われ秋山一裕氏の應援に出掛けたるに、反對派の壯士に脅迫せられて、演說を中止したりと、或る新聞にしるしたれど、事實全く無根なり。」

これだけなら、まだよし、「余は、微弱の一漢子なれども、所謂壯士の脅迫を恐るゝにあらず」客氣あれども、稚氣むしろ愛すべし。愛山は、斯くて自ら氣を吐きたるつもりかは知らねども、實は、これ愚痴なり。言ひわけなり。怯犬は、よく吠ゆ。腹の据わつて居らぬ人は、よく威張りたがる。自信のなき者は、よく言ひわけをしたがる。まことに自信ありて腹の据わつて居る人ならば、空威張りはせず、下らぬことに憂身をやつして、言ひわけはせざるなり。然し青年時代には、誰も肩を聳かすものなり。どんな事でも、言ひわけして、我が身の潔白をあらはさずんば、氣がすまざるなり。この肩を聳かすことゝ、强辯

して我が身の潔白をあらはすことゝは、修養の途にある靑年に向つては、必ずしも咎むべきことにはあらず。否、これあるが爲に、其人は向上もし、發展もするなり。潔白を求むるにつれて、自信生じ、神佛もその心にやどりて、死すとも悔ひざるに至るなり。惡といはれ、賊といはるゝとも、從容自若として瞑目するを得るに至るなり。また肩を聳かすにつれて、智を磨き、勇をみがき、生死の巷に出入して、膽力も生じ、腹も出來て、壯士の脅迫をびくとも思はざるに至るべく、さすれば、脅迫せられたと云はれうが、卑怯と云はれうが、そんな事は、屁とも思はざるに至るなり。愛山は、未だ、これら、いづれの域にも至り居らぬと見えて、怯犬の如く吠ゆるなり。かく空威張するは、まだ壯士の脅迫を恐れぬまでの膽力なく、自信も無きことを、自らあらはせるなり。穉氣むしろ愛すべしとは、卽ちこの事なり。然れども、之が爲に、竹馬の友の舊惡を筆にし、人身攻撃を爲すに至つては、斷じてこれを許すべからず。啻に靖獻遺言がわかつて居らざるのみならず、士人の風上には置くべからざるなり。

「秋山氏は郷友なり。共に奥村先生に學びたる少年時代の學友なり。このたび、候補者となるや、來りて援を乞ふ。何となく、昔なつかしくて、之を諾せり。一片舊友の誼に報いむとするなり。衣不如新、人不如故とは、余の情なり」と云ふは、大に好し。されど、「秋山氏は、政友會員に對しては、余は准政友會員なりと云ひ、進步黨員に對しては、余は准進步黨なりと云ひ、無所屬の人に對しては、余は純然たる獨立の客なりと云ふやうなる、曖昧なる人なり」そろ〳〵舊友の人身攻擊が始まりたり。「秋山氏は、金あるまゝに、その功名心にかられて、いはゆる運動屋の喰ひ物とならむとすることを聞けり。其愚あはれむべし」人身攻擊が、ます〳〵、はげしくなりぬ。

「反對派の演說會にて、秋山氏に加へたる人身攻擊はげしかりし中に、教科書事件の賄賂行使に於ける事實の如きは、公廷の判決文を摘み來りたるものにして、之を辯疏するの途なし。秋山氏は助くべからずと決心せり」人身攻擊も、こゝに至りて、その極に達しぬ。

よくも、筆をこゝまで進むることを得たるものかな。

なほ愛山の言を引かしめよ。「余は秋山氏に對しては、たゞ一片、故人の情ありしのみ。されど、選擧期日既に切迫したる苦戰惡鬪の日に於ては、我が輩の如き讀書生の推薦演說は、寧ろ害あるも、益なしと信ず」まことに故人の情あらば、進んでその苦戰惡鬪に入つて、友と共にこそ斃るべけれ。かくてこそ眞に靖獻遺言を讀みたるものなれ。かくてこそ新靖獻遺言を興すべしといふだけの資格あるものなれ。若し眞に秋山氏の當選が天下に害あるものならば、何ぞ選擧人の爲に、天下の爲に、淚を揮つて、馬稷を斬らざる。「一書を殘して秋山氏に與へ、氏の身を政治の泥海に投じたるを悲むの情を述べ、直ちに歸路に就きたり」秋山氏の當選が天下に害あるとまでの決心は無く、たゞ政海を泥海と思ひ込み、秋山氏が金を投じて、運動屋の喰ひ物になるを悲しめるなり。一片故人の情あるなり。眞に愛山は、自らも云へる如く、可憐なる讀書生なり。それほどにまで故人に情あるに、何故にか、わざ〳〵五月十五日卽ち選擧期日に於て故人の舊惡を紙上に公にしたる。

「秋山氏本陣の旅館に行かず、予が定宿に投じ、自ら陣營を張りたることの聰明なる所置

なりしを喜べり」お目出度いかな、愛山。かくまでに聰明なる愛山は、「靜岡に住せしこと廿年餘、秋山氏が運動屋の喰ひ物になり居ること、その曖昧なる言を爲すこと、反對派の秋山氏の人身攻擊の最も千萬なることは、少しく知人を訪問すれば、直ちに知り得る」のみにして、卽ち、反對派の術中に陷りて、毫も秋山氏の得點を探り得ざりき。余は、その愛山の聰明なるを悲しまざるを得ざるなり。

愛山のいはゆる運動屋の喰ひ物となりし秋山氏は、靜岡市に於て、僅々數十票の差にて、政海の名士、ハイカラ將軍と聞えたる松本軍平君を斃して漸く當選したり。その苦戰想ふべきなり。善惡必ずしも二致あるにあらず。その運動屋の喰ひ物となるの腹を他にうつさば、國難に家財をつくして、愛山のいはゆる新靖獻遺言中の人となるを得べきなり。もとの靖獻遺言の文天祥の如きも、まづ富裕なる家產を國難につくし、終に其身をつくしたりしなり。余は斷言す、運動やの喰ひ物となるだけの腹がなくば、とても、泰然として、國難に殉するの人とは成れざるなり。

思ふに、愛山は善人なり。わざ〳〵舊友の人身攻撃をした人は無かるべし。たゞ壯士の脅迫に肩を聳かしたる許りに、舊友の舊惡を筆にしたものなるべし。世に恐ろしきは、いはゆる腹のある惡人にあらずして、腹の黑き善人なり。新靖獻遺言を興せと大呼したる愛山は、舊友の犧牲たる能はずして、却つて舊友の名譽を、わが潔癖の爲に犧牲に供したるなり。斷然、これ大事を共にすべからざるの人なり。

余は確信す、愛山のいはゆる新靖獻遺言を出さんには、先づ愛山の如き人を軍門の血祭に供し、風敎上の犧牲とせざるべからざるなり。

さらば、愛山は、到底、度すべからざる人かといふに、否、否、然らず。愛山はもと善人なり。而して氣を負ふ。故に空威張がしたく、腹がせまくして、人を容るゝ能はず。眞に修養して、膽力をつけ、腹を大にし、衒氣、虛榮心を去らば、その人物始めて渾然として大なるべく、高かるべし。こゝに至りて、新靖獻遺言を興せと大呼するの資格あるべきなり。

冥途文壇消息

冥途の文壇も、格別かはりしことは之なく候が、一つこの頃の出來事を御報道申上候。尾崎紅葉が、金鍔を頰張つて、うまい〳〵と、舌皷うち居る處へ、高山樗牛がやつて來て、この頃何か御作ありやと問ひ候へば、例の胃病で筆を取る氣にもならず。娑婆でも、我輩が死んでからは、小說が大に衰へたやう也といふ。樗牛その話をうけとつて、小說は、まさか衰へもせざるべけれど、我輩が死んでからは、評論壇は、全く駄目になれりと威張る。然し、高山君、我輩の全集の大に賣れるのを見給へ。日本一の小說家は、この紅葉也。時に、君の全集も出でしやうなるが、我輩の全集のやうに賣れますかと云へば、樗牛苦笑して、我輩の評論が、君のやうな、へつぽこな小說と一所にされてたまる者かとつぶやく

處へ、文士といふものは、いつも下らぬことばかり言ふもの哉と一喝して、副島蒼海伯入り來る。落合直文氏之に向ひて、近作一つ御覽に入れむとて口吟すらく、

緋威の鎧をつけて太刀はきて
　櫻みる人いま有りや無しや

はゝア、大和魂を有せる歌人は、足下一人にやとて、蒼海伯微笑す。齋藤綠雨、落合氏に向ひて、貴殿が死なれてより門下四散し、いづれも小人か輕薄才子かにて、歌壇振はず、晶子女將軍の薙刀にきりまくられて、いやはや意氣地なき人達のみに候と云へば、我門下には、輕薄才子が多くて、不埒にも、吾輩の歌を改めて、全集に出したるものありしが、輕薄才子のみにもあらず、中には感心なものもありて、大に憤慨して、この度歌集のみを世に出して、原作のまゝを傳へて呉れたり。はゝアと、涙をこぼされ候。綠雨語をあらめて、歌もだめなるが、子規死して發句もだめになり候と云へば、

夏の夜を鳴きあかしたる蛙哉

と、一隅に微吟するものあり。誰かと見れば、正岡子規に候。さうすれば、我等は、蛙に見たてられたるかと、紅葉がふき出す處へ、野口寧齋入り來て、蒼海伯にむかひ、臺閣の諸公の中にて、閣下が無論第一の詩人なるが、閣下についでは、伊藤侯が上手に候。と云へば、伊藤も今度韓國の統監になりて、末路に花を唉かしたるが、思ひ切つて、韓國で死んで仕舞へば、よけれど、あの人は、至誠の氣が乏しければ、あと釜に、桂伯でもすゑて、ぢきに還つて來さうなりと、蒼海伯が言ふに、御說御尤也。一つ伊藤侯を諷刺してやらむとて、

功名餘地付二兒輩一、　老向二邊荒一酬二帝恩一、
美人歌罷坏土冷、　醉魂彷彿化二忠魂一、

と、寧齋が口吟すれば、綠雨さし出でゝ、起句の踏み落しも苦しいし、轉句の平仄の轉倒も苦しい。寧齋君も冥途へ來て詩が下りたりと咎む。寧齋笑つて、相かはらず、綠雨君は、あら探しばかりせらるゝもの哉。そんな事は、婆娑でいふ事也。冥途の詩に平仄もへちま

もあるものに非ずと、負け惜み言はれ候。綠雨しばし考へしが、僕も一つ諷刺の俳句をつくれりとて、

筆しぶつて金鍔欲しき夜長哉

これは、この席上の誰れやらさんにさしあげますと云へば、一同どつと笑ひ候。文士などいふ手合ひは、冥途へ參つても、こんな下らぬことばかり致居候。

文壇名勝誌

◉赤門川　大學川の一支流也。一に文科川と稱す。大學川は、國庫川より發せる大川也。六つの支流あり、法科川、醫科川、工科川、文科川、理科川、農科川、これ也。その中にて、文科川、最も幅せまし。されど、深し。支流より本川へかけて、博士魚を産す。この川の名物也。之を捕ふるには、推薦網を用ゐるを最も便とす。巧者なるものは、論文網を用ひて之を捕ふ。まれには、洋行網を用ゐても捕へ得ることあり。この川には、また多く學士魚を産す。近年、産出額多きを以て、賣れ口よからず。

◉早稻田川　流域は赤門川より遙に短かけれども、幅は之にまさる。寄附山より發し、大隈村に至りて、はじめて、早稻田川の名あり。近年しきりに、早稻田學士魚を産す。風

味、赤門川の學士魚に似たり。されど、價廉なるを以て、需用ひろし。

◉逍遙市　早稲田川の川口にある大都會也。港をひかへて、船舶幅輳す。その中に英國の船多し。もとは、學校多く、書店多かりしが、近頃は、劇場大に榮ゆ。脚本飴が、この市の名物也

◉抱月町　逍遙市より程遠からぬ處にありて、可成り繁華なる都會也。この町も、港をひかへ、近年、獨逸船、つき始めしより、逍遙市の繁華や、茲にうつれり。早稲田文學校といふ有名なる學校。もと逍遙市にありて、一時廢校せしが、近頃、この町に再興し、可成りに盛り也。商業可成り振へども、固有の產物は無し。多くは舶來品也。

◉巽軒山　赤門川の上流にある連山也。其主峯を哲學峯といふ。教育峯、宗教峯、文學峯、美術峯など、左右にひろがりて、横に長きこと、その幾里なるを知らず。遠方より望めば、見事なる山也。

◉竹風神社　ニイチエ尊を祀る。本能滿足の神符を出し靈驗いやちこにして、一時は

大に繁昌せり。繁昌せしにつれて、旅館、酒樓などの大なるもの多く出來たり。この地、風光美なるを以て、遊客多し。

◉萬年橋　大學村と文部村との間に架せる大橋也。長さ百間。國語山を望むには、此橋を最も佳とす。國語山の秀容を賞せむとする者にして、この橋に來らざるは無し。この橋に上らざるものは、未だ共に國語山の美を談ずるに足らざる也。四里ばかり下の方に、東圃橋あり。二橋の中央に、芳賀橋あり。三橋とも、長さはほゞ相同じく、唯萬年橋は木造、芳賀橋は石造、東圃橋は鐵造也。國文山を望むに、最も佳なるを、東圃橋となす。芳賀橋は、國語國文兩山の眺望を兼ねたり。

◉嘲風寺　巽軒山の麓に在り。可成り有名なる寺也。本尊は宗教哲學菩薩也。印度傳來のものと稱して、世之を珍重す。境内に文學觀音堂あり。女人多く參詣す。

◉鷗外市　逍遙市に次げる大都會にして、赤門川の川口より程遠からぬ處にありて、海に臨めり。こゝには、獨逸の商船多く集まりしが、近年貿易衰へて、市はさびれしが、

新に醫科大學出來て、やゝ人氣を恢復せり。

◉硯友湖八景　眉山の秋月、廣津の夕照、江見の歸帆、巖谷の晩鐘、湖の西岸にあり。和泉の夜雨、小栗の晴嵐、德田の落雁、春葉の暮雪、東岸に在り。近年東岸には、溫泉處々に出來て、遊客頗る多し。就中小栗村の溫泉には、男女學生の來り浴する者多し。

◉露伴院　郵便和尙の開山に係る。堂宇甚だ壯大也。古より有名なるが、賽者は多からず。支坊も多かりしが、大半廢れて、今存せるは、鶴伴、鬬月の二坊のみ也。

◉澁柿山　山上に歷史小說寺あるを以て有名也。麓に女人堂の跡、今猶存す。

◉篁村の關の舊趾　むかしは、有名なる關所なりしが、今は廢れたり。されど一種の風致ある處なれば、風騷の士、時に其關趾を訪ふものなしとせず。古人の吟詠少なからざるが中に、

篁村の關　　能飮法師

都をば霞と共に出でしかど

◉天外が岬　長く海中に突出す。崖高く、浪はげし。魔風戀風吹き來れば、往々船舶を覆す。地理を知れる漁夫は、平氣にてこのあたりの沖を船にて通れど、慣れざる者は、恐れて近づかず。

◉赤門川沿岸の社寺　赤門川は舟楫の便あるを以て、其沿岸、到る處、可成り榮えて、社寺の名あるもの多かりしが、今は多くは廢れたり。新に出來たる社寺もあれど、その名少しあらはれたるは、草平寺、瓊音神社などにて、羽衣神社、醒雪寺、嶺雲寺、天隨寺、鯉洋寺、臨風神社、晩翠寺、芥舟神社などは、すべて、すたれたり。その村々の有志者、再建を圖りつゝあれば、いづれ、その中に再興すものあるべし。

◉早稻田川沿岸の社寺　此川も舟楫の便あるを以て、沿岸の諸所に村落多し。社寺も可成りありて、その中には、すたれたるものあれど、新に起りて、可成り名あるもの多し。春雨寺、梅溪神社、醉夢院、孤島神社、白鳥院、未明寺など、可成り有名也。

◉晶子沼　和歌村にありて、大なる沼也。新派葦と稱する一種の葦を生じ、其花頗る美なるを以て、來り賞するものも多し。この沼には、鴛鴦常に多く浮べり。この外、和歌村には沼多し。鐵幹沼、薫園沼、柴舟沼、空穂沼、竹柏沼など、いづれも風景よし。躬治沼は、近年埋められて、田となれり。

◉柳村公園　赤門川に沿へり。園内に、翻譯花、紹介花等多く、ハイカラの學生、來り遊ぶもの少なからず。この頃、象徵花といふ舶來の花多く移されて、物好きの人の、杖を牽くもの可成り多し。

◉新體山の七湯　新體山には、古來溫泉多かりしが、泉脈時々變るを以て、興廢一ならず。藤村溫泉は、一時最も繁昌したりしが、今は、溫泉出でざるやうになれり。その代りに、炭坑發見せられて、昔にまさりて繁昌す。泣菫、有明、泡鳴、白星、花外、醉茗、夜雨の七溫泉、この山にあり。夏は浴客多し。

◉天溪が岡　太陽村にある長岡也。山海田野を見渡して、眺望よし。

◉獨歩島と花袋島　相接して自然生の花木多し。花袋島には文章世界神社ありて、大に繁昌す。獨歩島には、新古文林神社ありて、可成り有名なりしが、近年海嘯の爲めに奪ひ去られて、未だ再興せず。

◉漱石瀧　赤門川の上流にある大瀑也。深山の奥にありしを以て、世に現はれざりしが、四五年前、一匹の怪猫時鳥村に出でゝ、人家をあらしければ、血氣の若者ども、之を捕へむとて、其のにぐるを追ひて、山深く入りしに、思はずも、この瀧を發見せり。直下百丈、頗る奇觀也。觀覽者多くなるにつれて、本年、瀧の傍に、朝日樓といふ料理店も出來たり。

陶庵侯に謁するの記

明治四十年六月十七日より十九日へかけて、西園寺陶庵侯、小說家を招待し給ふ。十七日には川上眉山、廣津柳浪、田山花袋、小栗風葉、柳川春葉の五人ゆき、十八日には、森鷗外、巖谷小波、後藤宙外、小杉天外、泉鏡花、德田秋聲の六人ゆき、最後の十九日には、幸田露伴、塚原澁柿、內田魯庵、島崎藤村、國木田獨步及び余の六人往けり。坪內逍遙、長谷川四迷、夏目漱石の三人は、辭したりとの事なり。

首相の招待狀あるや、余は左の句をおくりぬ。

なめくぢの罷り出でたるうてな哉

野人禮に嫺はずなどゝ、窮屈なこと言はずに其意をあらはしたる積り也。眼前の即景也。

必ずしも、自から蚯蚓なりと卑下したるつもりにも非ず。むかし風の人は、王侯の召しに應ぜずとか、また、今やうの、へぼ理窟いふ人は、さきに俳優をよばれたる後なればとか云ふものあるを聞きたり。二十人のうち、皆小説を作る人なるに、余ひとりは、小説は作れず。されど、侯が、宰相としてならずして、私人として、文藝の爲めに、よび給ふ事なり。よばれて行くに、理窟も、へちまも、あつたものにあらず。よび給ふにも、もとより、窮窟な理窟はなかるべし。首相は、曾て會津戰爭に臨みたる人なり。西洋に遊學したる人なり。貴紳の方ながらも、山林、及び市井の氣を解せる人也。今の總理大臣也。文武あはせ得たるのみならず、詩をものし、俳句をものし、あらゆる藝術の美を解せるなり。かゝる首相が、文藝の士を召し給ふは、從來、市井の氣に充ちたる我が小説家にとりては、此上もなき好機會なり。首相は久しく佛國にありて、佛國の文學を味はへるより、我日本の小説家の有様も知らむとす。我小説家たるものも親しく侯に接して、叩く所あらば、自ら益する所少からざるべし。知らぬことは侯にをそはるがよし。知れる者は、侯に教ふるも、

功德也。更に種は無いか〳〵と蚤取眼する新聞屋に材料を與へてやるも、亦功德也。

午後五時半との事なれば、その刻を見はからひて行く。不知庵、澁柿、藤村、獨步すでに座につけり。余より少しおくれて、露伴來れり。首相の外には、竹越三叉ありて、接待役をつとめたり。八疊二間を、客座敷に充つ。南ふさがりて、東に庭あり。敷石正しく、芝生しげり、木立今や新綠を帶びてしげる上に、陰欝たる五月雨の空、暮に及びて、殊にものさびし。露伴來りて、設けられたる座蒲團、みなみたされるがと思へば、やがて、美人、あまた出て來て杯膳をはこぶ。酒宴はじまれり。電燈つきて、忽ち一座光る。六七の美人、更に光を添ふ。美といふは未だし、艶といふも未だし。光るといふが、美人を形容するに最も適切なる詞なりと見とれたり。

侯よく飮み、よく談ず。毫も官臭を帶びず。三叉、接待役を勤めて一座を賑はせり。侯が青年の時、江戸に來り、甲府へ赴き、柳原家の臣と稱して、徽典館にゆきしに、案外に學問の出來るとて仕事をさづけて、報酬を與へくれしなど、物語り給ふ。傍にありし三叉

は、そは、はじめて、うかゞふ所なりといふ。談は、侯が佛國の小說を談ずるより、くさぐさのことに及ぶ。侯も三叉も座談に長ず。博識なる魯庵、世智に長けたる露伴、故實に通ぜる澁柹、いづれも、口も八丁、手も八丁、話柄それからそれへと移りて、しばしも絕間なし。恰も蘆の若葉に、行々子の鳴き交すごとし。余は、今日の新聞を讀み、昨日三叉が接待役になりて、客にそれぞれ思ふ所をかゝせしを知り、今日も亦かゝる事あらんかとて、午前中、苦心して、一つ詩を作り出せり。すでに出來たる以上は機先を制するもよからむとて、三叉に向ひて、紙筆を乞ふ。侯きゝつけて昨夜の絹帳を持ち來れと命ず。まだ早からむと言はるゝに、三叉笑つて、大町君は、醉つては駄目なり。醉はぬ中に、書かせざるべからずといふ。酒樓などにてこそ醉ツぱらひもすれ、氣を入れて、飲まば、斗酒何ぞ醉はんやと氣張るも、我ながらなほ若い哉。かゝる程に、侯も接待役の三叉も、一座を廻りて、杯をすゝめらる。座の一方には、ぬめ、既に展べられたり。美人墨を磨す。侯、墨の濃淡を吟味していざ書けといふ。

風流宰相解憐才。　詩酒清筵三日開。
怪雨一天昏似墨。　文星夜墮駿河臺。

とかきつけたり。諸氏もそれ〴〵かきつけたるが、余はかさねて、

五月雨や首相文士を召し給ふ

と、また、書き加へぬ。

銀河横天流不息。

とは、藤村の書せる所也。露伴は、

武藏野や草さま〴〵にさみだるゝ

澁柿は、

御園生の雨のめぐみにしげりなん
ことの小草のいや黒むまで

不知庵は、

書は以て姓名を記するに足る。

としるしたり。

侯が『この後にかゝる、君は』と、しるしけるに、獨歩は、『國木田獨歩なり』と氣をきかせたり。三叉は、善飮、善談、筆はとらざりき。侯、一同に向ひて、『お呼び申して諸君を苦しましむるは本意にあらず』と言はれたるは、さすがに、宰相の雅懷なり。

偉人福澤諭吉翁

病んで死に瀕せむとは、われ夢にも知らず。翁の痩我慢說を尤めしに、忽ち其訃音を聞く。一言の弔詞なきを得ず。尤めしは、翁の一部分也。玆に翁の全體としては、翁は君子に非ず、豪傑に非ず、されど、一種の偉人也。教育家として、明治の先覺者として、社會の指導者として、西洋文明輸入者として、一種の事業家として、又操觚者として、明治年間、最も大なるもの丶一人也。幕府の末より明治の初めにかけては、類稀なる學者なりき。超凡の見識を懷きたる人なりき。文明の輸入、これ彼が唯一の目的にして、其一生の事業なりき。獨立自尊主義は、啻に之を口にせしのみならず、之を實行し、且つ之を一貫したりき。

學者としての翁は、如何なりしぞや。日本外史、靖獻遺言、更に進んで四書五經が唯一の學問なりし時に、彼は洋學を學びぬ。短袴高履、腰に双龍を横へて、勤王よ、攘夷よと呼號せし時に、彼は身を洋學に委ねぬ。彼は深邃なる學理を思索し、一家の新學說を考へ出すだけの頭腦を有せざりしかど、學問の幼穉なりし明治の初年にありては、洋學を傳ふるに足るだけの學力を有したり。彼は常識の最も圓滿に發達したる人也。其大なる常識を以て、事理を判斷し、社會を大觀す。これ其適とする所。せまく一學一藝の壺奥を叩くは、彼の常識の許さゞる所也。彼は學問のすぐれたる人に非ず、常識のすぐれたる人也。彼は一種の偉人なれども、天才的偉人に非ずして常識的偉人也。而して彼の常識は社會を驚醒し、指導するに足りたりき。明治の初年以前は、彼はたしかに唯一の社會の先覺者たりき。啻に敎鞭を執りて、人を導きしのみならず、書を著はして、社會一般を指導せり。其感化、其勢力、其影響の如何に大なりしかは、今日の三十歳以下の人は、或は之を知らざるべけれど、三十歳以上の人にして、苟くも多少の知識ある人は、之を認めざるものなかるべし。

明治二十年以後、社會の學問進み、知識進むに至りては、翁は最早學者に非ず、又先覺者にも非ざりき。されど、其著書其新聞に論ぜし言は、なほ一部分の崇拜者を有したりき。畢竟するに、彼の著書は、學者の著書と云はんよりは、寧ろ社會先覺の著書と云ふべし。而して其著書、明治二十年以前は、能く一世を風靡したりき。

教育家としての翁は、如何なりしぞや。彼は國語國史の素養なくして、國體を解せず、漢學の造詣深からずして、儒教の所長をも解せざりしかど、ひと通り西洋の學問を解し、西洋の事情を解し、殊に常識幾んど圓滿に發達して、一家の見識を有したりき。余の性情より云へば、彼の如き冷かなる人を喜ばず。されど、翁は人を教育して、僞善者を作らざりき。余は國體よりわり出されたる忠君愛國說、儒教より出でたる仁義の說を唱ふる者を喜ばざるに非ず。然りと雖も、彼等の多くは僞善者也。口に仁義を唱ふれども、身には不仁不義を行ひ、忠君愛國の假面を被りて、外面を飾り、體裁を粧ひて人を欺けども、裏面には敗德汚行充滿し、心には涙なくして、目には空涙をこぼし、言はよく美にして、行ひ、

いよ〳〵非也。かくて教育せられたる者、僞善者にあらざれば、小慷慨家也。小不平家也。淺薄なる厭世家也。社會の事業を建設せずして破壞す。われ其弊害の多きに堪へざる也。翁の渇望せし所は、文明開化也。理想とせし人物は、社會有用の材也。彼はあまり道德を口にせざりき。されど全く道德を度外視したるにあらず。晩年世に出し、修身要領、以て彼が道德に關する意見を伺ふべし。彼は國體流義、儒教流義の道德を說かんよりも、社會の知識を增し、富を增し、完全にして圓滿なる社會を作らむことを急務としたりき。

これ亦一種の見識たらずんばあらず。なまじつか國體流義、儒教流義より養はれて、僞善者、小慷慨家、小不平家となり、口にばかり立派なることを云ふ人を作らむよりは、實際に社會に立ち働く人を作らむことの益多きに如かず。翁は口の人よりは、手の人を作りたりき。慶應四年の未だ改元せられざりし時に慶應義塾たちてよりこゝに三十餘年、明治の半以前には、官の大學、野の慶應義塾と双々相對立したりき。殊に大學が未だ多く有用の人物を出さゞりし前、義塾より人才彬々として輩出したりき。銀行、諸會社、商業、實

業、在野の政治家の中に、第一流の地歩を占めしもの、若しくは、有望なりしものは、大學出身者にはなくして、多くは義塾の出身者なりき。翁は實に社會有用の材を薫陶したりき。社會は長へに其大恩を記せざるべからず。而して翁は啻に鞭を執りて人材を作りしのみならず、著書、新聞に社會を教育せり。感化せり。十目の視る所、十手のゆびさす所、明治年間、第一の教育家は、翁にあらずして誰ぞや。

翁また操觚者としても世にすぐれたりき。著書に、新聞に、彼は多く筆を執りたりき。殊に彼は文章の大家也。其文章雄大にあらず、華麗にあらず、されど平明にして趣味ある大文字也。才氣縱横、意到り、筆隨ひ、歩趨整齊、絶えて細工の跡を見ず。字を平易にし、句を簡明にし、奇を弄せずして自から奇、巧を弄せずして、自から巧。渾成にして玲瓏。彼の徒らに字煉句烹、彫蟲琢刻を事とする小文士の比に非ず。明治の文壇に、一種の文體を創めたり。亦偉なりと云はざるべけんや。而して六十餘年、野にありて、其人物の平民的なるが如く、其文章も亦平民的也。翁の人物文章能く相一致して、明治の社會を飾れり。

單に慶應義塾といふ大なる、多く人才を出したる、隨て社會に非常の影響を與へたる學校の創立者たるのみに止まるも、翁は既に偉大也。彼は亦時事新報といふ一種特色ある大新聞を發行し、新聞記者としても成功したりき。彼は一種の事業家にあらずや。而かも妄りに他に依賴せず。他の力を假らず。獨立自尊、明治の社會に濶步せり。

翁今やなし。冷かなる一坏の黃土、長へに偉人の魂を埋めつくしぬ。大觀院獨立自尊居士と人物主義を名に負ひたる墓碑の立てる處は、卽ち翁の遺骸のある處、花落ち、水流る。年又年。知らず、國民は何をか此墓前に捧ぐべき。

棺を蓋うて名定まるとかや。翁の人物は高しと云ふべからず。寧ろ俗物也。唯其れ俗物也。故に能く世俗に適切なる人材を養成せり。其主義を一貫して、始終渝らざりしは、翁を偉大ならしむる所以の一なるとゝもに、亦彼の缺點たらずんばあらず。文明輸入は、大なる功勞には相違なけれども、屋上屋を架し、下流益濁りて、終に西洋崇拜の弊に陷りし事ありき。翁其責なしと云ふべからず。而して主義を一貫したる翁は、猪の如く直進する

のみにして、毫もかへりみて弊害を除去すること能はざりき。一得、一失は、何事にも免れざる所なれども、非常なる功勞ありたると共に、亦多少の害毒を流したるものと斷言せざるを得ず。明治の初より既に富と云ふことに注目し、爵位よりも、虛名よりも、金が第一と喝破し、個人を富まし、社會を富まさんとつとめたりしは、時務を知れりと云ふべけれども、其弊黃金崇拜を釀し、銅臭社會に滿ち、廉潔の風地を拂ふに至りぬ。翁また其責なしと云ふべからず。翁の常識は、殆んど圓滿に發達したりしかど、人は萬能なる能はず、惜むらくは、國體の美を解せざりき。楠公の討死を、權助の縊死と罵りしが如きは、一班以て全豹を推すべし。正當なる獨立自尊、もとより喜ぶべきことなれども、眼中國家なく、皇室なきに至りては、日本國民として、決して之を許すべからず。況んや社會敎育の大任を雙肩に擔へるものに於てをや。

余は、翁の死後、直に罵倒するに忍びず。死屍を鞭うつに忍びず。余はたしかに翁の大なるを認む。翁の功勞多かりしを感謝す。其人物事業は、立志傳中の好材料たらずんばあ

らず。されど、西洋崇拜、黄金崇拜の弊を知らず〳〵醸しだし、且つ國體に適せざる、寧ろ之を破壞する所信ありしことだけは、死にめんじてもなほ默過する能はざる所也。翁の如き大なる人物にありては、其一身行爲はさまで過失はなかるべけれども、其下流の凡人もしくは少年の士を誤まりしこと幾何ぞや。嗚呼翁を弔うて及ばず。書して門下の人才を戒む。
終に臨んで、なほ一言せしめよ。翁はそれ廣き平野の如き乎。高山もなく大川もなし。金の出づる山あるにもあらねば、銀のいづる山もあらず。一望茫々として餘り趣味なきが如くなれども、畑も大く、田もひろし。穀物野菜こゝに生熟する也。而して肥料の異臭も折々人の鼻を襲ふ也。

翁の瘠我慢說を駁す

十年の昔、福澤諭吉氏は、瘠我慢の說といふ一篇を草し、勝、榎本二氏にのみ示して、

世には公にせざりしが、其說近頃『日本人』『日本』『時事新報』などに現はれ出でぬ。下らぬ說なれども、明治の先覺者、門下生多く、信者も多き福澤雪池翁の言としては、我國體上、默過するを得ず。

薩長は、幕府の祿を食みしもの、仇敵也。苟くも骨ありて耻を知れる者は、仇敵の組織せる政府に同じく立つべからず。

勝、榎本二氏が幕府有力の遺臣なるに、二十年の久しき、おめ〳〵と薩長人と共に政府の上に立ち、山野に肥遯する能はず。卽ち瘠我慢を守る能はざりしは、幕府に對し、當時戰死の友に對し、又自から良心に顧みて、大に疚しかるべきにあらずや。これ福澤氏の瘠我慢說の大要也。一寸氣が利きて居るやうなれど、實は國體を辨ぜず、大勢を解せざる愚論なるに過ぎず。

室鳩巢、嘗て楠公を非難して、『孔明は三顧せられてはじめて起ちしに、楠公が一命直に起ちたるは功名を求むるに急なるものなり』と云ひたるに、賴山陽世を隔てゝ、『支那は革

命の國也。特に三國時代には定まれる君主なかりき。さればこそ、功名の野心なき孔明は急には起たざりしかど、我日本は皇室國家同時に起りたる國也。人民は一王の赤子也。人民たる者、たとひ勅命なきも、天子の急に赴かざるべからず。況んや勅命ありたるをや』と駁撃せしは、今より六七十年前の事也。亦以て我國體を知るべし。南北朝の際に、南朝の遺臣にして北朝に事へし者あらんには、そは或は瘠我慢を守る能はざりし者なるべし。今日政友會の組織せる政府に、憲政本黨の人があらば、そは破廉耻、無節の徒也。然れども、幕府倒れて、王政復古せる場合は、決して之と同様に見るべきに非ず。

大義、親を滅す。皇室に對しては、將軍も陪臣も、同じく臣民也。朝廷と幕府とは決して兩立せるものに非ざりき。これ日本の國體也。德川幕府、一朝其非を悟りて政權を朝廷にかへしまつりしは、これ皇國の臣民として至當なる事也。幕府の遺臣が出でゝ朝廷に事ふるは、これ忠良なる皇國の臣民也。つゆ非難すべき點なき也。

然るに、當年幕府にありし人々の其子孫等は曰く、『朝廷とは云ふものゝ、實際は薩が天

子を挾んで私をいとなめる政府也』と。これ凡人には免れ難き邪推なれど、權利の勝者功勞ある者に歸するは、至當の報酬也。薩長人士が多く政府の上に立ちしは自然の勢也。然れども行政上、三百年來の行きがゝりもあり、天下の事之を田舍武士にのみ委すべからず。而して雲井龍雄の如く叛謀を擧げむとせしは、これ國賊也。栗本鋤雲の如く野にかくれしは、これ無力也。無氣力也。眞に瘠我慢の何たるかを解し、骨あり廉恥を知れる有力の士は、朝廷の上に立ちて、其權を分たざるを得ず。一つや二つの椅子を幕府の遺臣に分ちたるは、天下の人心を收攬せむとする策略に外ならずと云ふは、これ徒に彼を邪推して、我が眞意を知らざるもの也。殊に海軍の事、阪本龍馬あらばともかく、高杉晉作あらばともかく、豈に之を經驗乏しき薩長武士に任かすべけんや。多年經驗を積める勝海舟が海軍卿となり、榎本武揚が海軍中將となりしは、國家にとりても、外國に對しても、必ず然らざるを得ざること也。且つや勝伯は西鄕南洲と肝膽相照し、其邪心なきを知り、談笑の間に江戸城を附して疑はず。英雄は英雄を知る。この間の消息、豈に雪池輩の俗物のよく解す

る所ならんや。

勝伯が將軍をして恭順の正路に就かしめたりし時、大に反對せし頑冥の徒多かりき。勝伯が官に就きし際にもなほ之を非難したるもの多かりき。勝伯は爲めに暗殺せられむとせしもの、其幾回なるを知らざりき。されど、これ薩長の心事未だ天下一般に明かならざりし當時にありては、なほ恕すべし。なんぞ圖らん、二十年後の明治の聖代にありて、なほ勝伯の心を解せざる愚物あらむとは。嗚呼、雪池の如きは、竟にこれ前世紀のハイカラ黨乎。國家よりも、皇室よりも、黃金が重く、大義名分よりも、一身の休戚が大切なりとするの徒、動もすれば愚言を弄して、世道を害し、人の子を賊せむとす。

翁と大隈伯

官學以外の大なる學校と云へば、何人も指を早稻田大學と慶應義塾とに屈するなるべし。

慶應は福澤翁の學校にして、早稻田大學は大隈伯の經營する學校なり。大隈伯は大人物なり。福澤翁も亦大人物也。かゝる大人物の校長といふことは、官私を通じて、絕えて、他に其比を見ざる所なり。

福澤翁は、始めより敎育家として立てり。上野に砲聲轟き、鮮血迸るの日、同じ東京の地にありて、靜に經濟の書を講ぜりとの事也。當時にありては、大なる學者也。又大なる文章家也。學者としての福澤翁は、時代の進むと共に消滅すべけれども、文章家としての翁は、萬古生命あり。啻に文章家としての生命あるのみならず、大文章家として日本の文章史上に異彩を放つ人也。翁は學者といふよりも、識者といふべきなり。實に文明の指導者にして、社會の木鐸たりき。明治の前半、人才を出せることは、官學よりも却つて私立の慶應の方が遙に多かりき。

豐川良平氏は慶應義塾の出身なるが、慶應義塾に對せる明治義塾の長となり、馬場、大石の諸氏、これが敎員たりしが、振はずして倒れ、その跡が、英吉利法律學校となり、法

學院となり、今の中央大學となる。みな明治義塾の後身にして、場所も同じ所也。早稻田の學校起りしは、明治義塾よりは、ずつと後の事也。

大隈伯は、大政治家也。されど、外務大臣となりて失敗し、總理大臣となりて失敗し、朝に於ける政績は、とても、伊藤公、山縣公などに比較すべくもあらず。野にありても、進步黨の總理の地位もたもたれず、滿腔の覇氣、三寸の舌より迸り出でゝ、大演說家となり、大記者となり、大批評家となり、又大政治家となる。吾人が伯の長廣舌を聞くを得るは、その野にあるのお蔭也。行ふ者は默し、行ふを得ざる者はしやべる。古今同一轍なり。伯は行ふの點にありては第一流の政治家として遜色あれども、その代りに、雄辯の論客として、世界に鳴る。亦一代の人傑なる哉。早稻田の學校は伯を戴けるが爲めに榮え、伯は、早稻田の學校を經營せるが爲めに、大敎育家として、世に推さる。

伯は失敗せる政治家が、餘力を以て、一面に敎育家となりたる也。敎育家としての素養あるには非ず。政治の批評が主にして、實業に及び、敎育に及び、歷史にも及び、知識は

古今内外に亘る。奥行はなけれども、幅はひろし。殊に伯、言を吐けば、壯快なり。獅子巖頭に吼ゆるも、かくやと思はる。伯の立場は、どうしても、經世家也。人を教ふるといふよりも、寧ろ世を評するの點に於て、其特徴を見る。聞く、伯は手紙を書きしことなしと。書に對する趣味なしと云へば、仕方なし。伯の如き人傑の書なら、巧拙以上に、その人傑の彿があらはれて、大いに面白かるべきをと惜まるゝ也。又聞く、佐々木安五郎氏、嘗て伯に蒙古の事を語る。其後、伯、その知識を土臺にして、例の長廣舌を振ひしに、之を聞き居りし佐々木氏、その誤れるを駁し、先日、わざと、うそを教へ置きたりとて笑ふに、佐々木は惡い奴だとて、苦笑せりとの事也。事實か否かは知らざれど、伯には有りさうな事と思はる。適ま以て伯が偉人にして、その頭腦の消化力の大なるを見る也。

今や、福澤翁は既に世に亡し。翁は、よく人を教へ、世を導きたり。その文萬古に輝き、其言千代に生く。譬ふれば、海岸の燈臺の如し。どんと烈しき音たてゝ人を驚かし、仰げば空中に火光燦爛たり。教育家としての大隈伯は、その百二十五歳と共に消ゆべし。伯

の小なる者に至りては、これは線香煙火也。ぱつと光りて、ぱつと消ゆ。今の世、斯る人の多きに堪へず。

伊藤博文公

嗚呼、明治四十二年十一月四日は、伊藤公が大森村に國葬せられたる日也。微雨至る。天公も亦公の爲に悲むか。

思ふも遙けき哈爾賓の停車場に、公が韓國人の毒彈に斃れたりとの報傳はるや。我國は上下擧つて、津々浦々に至るまで、驚悲せざる隅もなく、新聞は公の記事を滿載して、今に至るもなほ絕えず。世界中、國といふ國は、みな弔意を表せざるは無く、公の一死、忽ち世界中の問題となれり。夕陽の西山に沒したらむ樣にも似て、悲絕にして、兼ねて壯絕なる哉。

公の一代の事業は、既に世界中に輝けり。今更余輩の喋々するまでも無し。西鄕隆盛、

大久保利通、木戸孝允は、維新の三傑と云はれたるが、西郷は武なり。大久保木戸は文也。尨大なる西郷の事業は、維新と共に終り、明治六年の征韓論に退き、明治十年の西南戰役に斃れたり。伊藤公は木戸の股肱たりしが、木戸も明治十年に病死したり。それより前、伊藤公は轉じて大久保の股肱たりしが、大久保も其翌年、暗殺に斃れたり。三傑なき後は、伊藤公の獨舞臺也。

始めて總理大臣となりたるも、伊藤公也。始めて憲法を起草したるも伊藤公也。始めて樞密院議長となりたるも、伊藤公也。いつしか總理大臣以上に元老といふもの起り、伊藤公、山縣公、井上侯、松方侯が、卽ちその元老たりしが、就中伊藤公を以て其首となす。

之を古に比するに、全くは一致せざれども、今の總理大臣は、古の大納言也。元老が左右大臣也。もしくは太政大臣也。元老の中太政大臣に擬すべきものは、伊藤公也。山縣公之に次ぐ。井上、松方、兩侯は與らず。山縣公は官、文武を極む。忠亮にして士に下るの概あり。山縣公と伊藤公とを比すれば、伊藤公はハイカラ的政治家の巨魁にして、山縣公

は蠻カラ的政治家の巨魁也。世の中は、突飛に進み過ぎても不可也。保守に偏しても不可也。進守と保守と相俟つて、玆に始めて中庸を得て、完全なる進歩を爲すもの也。明治の世、政治界に偉材多し。されど、要するに伊藤的と、山縣的との外に出でず。山縣的は保守を代表し、伊藤的は進守を代表す。山縣公は黃金を以て政黨員を買收したる事ありしが、これ實に當時の公に取りては尤もらしき政略にして、理想の政治家としては、公の一大缺點也。伊藤公は、一時、朝を退くと共に、政黨の首領となり、自由黨をもとゝして多くの政略を網羅して、政友會といふ唯一の大政黨の總理となりたり。この一事にて判ずるも、伊藤公が文明的政治家たることは、何人も否定する能はざるべし。伊藤公は明治の世の政治に、何事にも魁を爲したり。その餘弊もありたれど、日本今日の進步は、實に伊藤公の政略によらずんばあらず。何事にも魁したる伊藤公は、日露戰爭の結果、韓國が我國の保護國となるや、始めてその統監となれり。これ我國空前の一種の榮職也。げに伊藤公は、武の方面こそ全く缺けたれ。あらゆる政治上の舞臺を經來り、公爵となり大勳位をうけて、

所謂位人臣を極むるもの也。かく何事も政治の先頭に立ちたりし伊藤公は、終に哈爾賓の毒彈に斃れぬ。我國の大臣にして、海外に暗殺せられしことも、實に伊藤公に始まる。これ空前にして、恐らくは絶後なるべし。公を以て、藤原鎌足、藤原道長、平清盛、源頼朝、足利尊氏、織田信長、豐臣秀吉、德川家康など、我國史上一流の偉人に比するに、毫も遜色あらず。われ思ふに、公は永遠に豐臣秀吉と竝稱せらるゝの人なるべし。

われ政治を知らず。伊藤公を評論せんは、世に其人多かるべし。唯玆に余が伊藤公に就いて感服したる一事を擧げて、公を弔ひ、かねて國民を率ゐむとする青年の士の參考に供せむと欲す。そは他なし。公が財利に對して、淸廉なりしこと也。この事は、あらゆる新聞の傳する所、公を知れる人々の語る所、悉く一致して、また疑ふべからざる所也。

明治の世、黄金の風、吹きすさび、一にも利、二にも利、詩を作るよりも田を作れ、義理ばらむよりも炊ばれ、富國といふことを楯に取りて、商人の名が、いつしか實業家と改まり、所謂實業家なるものが、世に時めき始めたり。國家の一面には、實業家も必要なり。

然れども、實業家的根性を有する者をして、政治の局面に立たしむることは、萬古永遠斷じて不可也。實業家の目ざす所は黃金也。私利也。衣食足りて禮節を知ると云ひけむ。實業家なるものも、ひとかどの財產、地位、權力を得れば、うはべに、公益、人道杯といふものもあれど、いざとなれば、利を先にして義を後にし、一身の繁榮をのみ心掛けて、國家の存亡に對しては風馬牛也。支那や、韓國が今日の衰微を起せるも、實にこの實業家根性の橫逸せるに由る也。

諸葛孔明は、支那史上に於ける政治家の善良なるものなり。その出師表の中に、故鄉には衣食するに餘りある田畑を有すとの語あり。かくて、孔明は利を離れて、政治に生死するを得たりき。我國の北條氏に良政治家出でたるが、泰時を其中の首となす。義時死するや。泰時は父の封邑の大部分を諸弟に與へて、自ら取る所甚だ少なし。されど、衣食には事缺かず。かくて泰時は利を離れて、政治に生死するを得たりき。

政治家とは、之を譬ふれば、國民を國家といふ船に載せて、その舵を執るもの也。その

政治家にして、利に執着して、私を營まれては、國民の迷惑、この上もなきのみならず、國家の滅亡は、實に此に基づく。いつの世、いかなる時にても、清廉なる政治家、上に立てば、國家振ひ、貪欲なる政治家、上に立てば、國家衰ふ。もしくは亡ぶ。之を赤穗義士の事件に見るも、もと〳〵事の起りは吉良義央の貪慾にもとづけるなり。赤穗の老臣大野九郎兵衛も貪慾にして、多く財を貯へたりき。蓋し、治世の能吏也。されど、一朝變起るや、金を抱いて逐電せり。これ日本國民の一般に爪彈する所也。幸に赤穗には大石良雄など四十七士の私利をよそにして、忠義に殉ずるものありたりき。これ日本國民の一般に快哉と呼ぶ所なり。

試に我國の歷史をたづねて見よ。良政治家と云はれたる人は、必ずや、財利に淡き人なり。近く之を明治の世に見るも、明治十年以前の伊藤公とも言はるべき人は、大久保利通なるが、その暗殺せられし時、家には僅々數金ありしのみにて、餘財とてはあらざりしとの事也。明治十年以後の大久保公とも云ふべき伊藤公も亦財利に淡かりし事は、天下一般

に認むる所也。伊藤公ありて、大久保公の後繼あり。かくて漸く大體に於ては政治界に實業家根性の橫逸を免れたるの觀あるも、伊藤公以外、大政治家と云はるゝ人は、疑へば、隨分怪しき人もあるやう也。日糖事件に醜態を暴露したる二十八人の代議士は、今の代議士中、小惡の部に屬するものなりとの公評あるより推しても、今の政治家の腐敗は、推して知るべし。われは疑ふ、今の政治界の大家をして、赤穗の臣たらしめば、大野九郎兵衞たらざるもの、果して幾人ありや。

伊藤公を記すれば、明治四十年の政治歷史は竭く。もし之が補助を求むれば、板垣伯也。伊藤公は朝を代表し、板垣伯は野を代表す。この二公、各長短あるが、相一致する所は、財利に淡き所也。伊藤公既に財利に淡し。板垣伯は、尙一層淡し。伊藤公は富まざれ共貧には非ず。板垣伯は常に貧のために苦しめるやう也。伊藤公は常に順境に立ち、故に貧ならず。板垣伯は、多く逆境に立てり。故に貧也。貧なればとて、板垣伯を嘲るべきに非ず。境遇非なれば也。貧にして、毫も其志を失はず。われ板垣伯の益尊ぶべきを見る也。誤解

することと莫れ。余は貧を尊ぶものに非ず。寧ろ貧なるも不義財を貪らざるの精神を尊ぶもの也。私利を離れて、國家に生死するの氣魄を尊ぶもの也。嗚呼、明治四十年の間、前は大久保公により、後は伊藤公によりて、利を離れたる政治家の面目、わづかに一縷命脈をつなぎたり。今後黄金の風は、ます／＼強く吹きすさむべし。

若し伊藤公の後繼者にして、大久保、伊藤、板垣諸公の利に淡き精神を失はば、嗚呼、開闢以來、金甌無缺の日本帝國も、こゝに始めて危い哉。

余は重ねて、伊藤公を嘆美す。公や生前男子の到るべき處に到りつくせり。到り過ぎて、海外に於ける大臣の暗殺といふ古今未曾有の異例をさへ創めたり。死後、國葬の典にあづかれるが、國葬は明治の世、前例なしとせず。されど、みな舊大名、もしくは舊公卿也。匹夫にして國葬にせられしは實に伊藤公を始めとなす。公は徹頭徹尾、何事も人臣を極めたりし哉。知らず、これより後は、何事も餘す所なきか。神武天皇以後、人臣にして死して官幣社に祀られたるものは、唯一人菅公あるのみ也。國事に死せるもの丶合祀せらるゝ

靖國神社は、下りて別格官幣社也。楠公や、義貞や、信長や、秀吉や、家康や、みな別格官幣社に祀らる。藤原秀鄕さへ、別格官幣社に祀らる。下野の唐澤山神社これ也。伊藤公にして、もし殘れることありとすれば、そは唯神にして祀らるゝや否やの一事也。果して神に祀らるゝや否やは、われ神ならぬ身なれば、斷言する能はず。

聞く、伊藤公は日本政記を讀みて、發憤して、志を立てたりと。歷史を讀みて、奮起するもの、豈一人伊藤公のみならんや。維新の志士、すべてみな然りと云ひて可也。今の世にても、苟くも忠君愛國の趣味を解するものは、すべてみな然るべし。伊藤公が日本政記を讀みて奮起したるが如く、後世には、伊藤公の傳を讀みて奮起するの志士多かるべし。伊藤公が維新の前、既に卒先して洋行したるより、文臣として常に進取の活動をなし、第一流の政治家中にても、一頭地を拔きて、終に國葬の重典に浴するまで一生の光榮、一として學ぶべからざるもの無きが中に、余は特にその財利に淡かりし所以の心事を學べと絕叫するもの也。よしや、伊藤公を學びて、位人臣を極むるとも、功名一世を蓋ふとも、こ

の一事を缺かば、これ啻に伊藤公を學びたる者にあらざるのみならず、斷じて眞の政治家にはあらざる也。

逸事紛々たり、後藤象二郎

伯逝きて、玆に十八年の春秋を經たり。大森の里、八景坂の上、新綠滴りて、雨しめやかなる日、北村東紅に導かれて、雪子刀自を訪ひ、昔語を聽く。刀自丈高く、幅之に稱ひ、面も之に稱ふ。七十に垂なんとすれど、其面晴れやかにして光る。眉高く且つ長く、耳大に、顋豐かに、音吐爽か也。伯の平生の嗜好を問へば、刀自曰く、『字を書くことなり。暇さへあれば、習字をして樂みたり』と。『酒を嗜まれしや』と問へば、刀自曰く、『酒は一滴も口にせざりき』と。刀自曰く、『岩崎彌太郎氏が欝陵島に標柱を建つるの事は、岩崎氏の發意に非ず。全く後藤の內命に出でたるものなり』と。刀自曰く、『明治五六年の頃、彌太郎氏來りて、後藤に向ひ、「君の息女を一人貰ひたし」といふ。「子の嫁にか」と問へば、

「否子は幼少なるにより、弟彌之助を養子とするつもりなり。其嫁に、早苗さんが大様に見受けらるれば、貰ひたし」とて、始めて婚儀を取結びたり』と。

伯の體重を問へば、刀自曰く、『三十五歳の時に、二十二貫六百目ありき。晩年病氣の際にも、十九貫餘ありき』と。身長を問へば、刀自曰く、『測りたること無し。著丈は四尺なりき』と。著丈四尺は、日本人として、非常に高き也。西鄕從道曾て御前會議にて、伯に惡戯を試みしことあり。伯、西鄕と隣席し、最敬禮果てゝ椅子に就きしに、何物か臀を刺す。されど天威咫尺、苦痛を忍びて、敢て動かず。退席の時、之を見れば、三角の小石なりき。伯乍ち西鄕の惡戯なるを悟り、『西鄕さん。又貴下の惡戯ですか』と云へば、西鄕眞面目くさりて曰く、『貴下の風采と云ひ、體格と云ひ、眞に內閣首班の貫目あり。唯惜しい哉、丈が五分ばかり低しと思ひし故、一寸接ぎたして見たり』と。この五分低しは、冗談也。

伯の書は、素人の域を脫せり。晩年に至るも、決して習字を廢せず。病んで死に瀕して

も、なほ習字して樂しみたりき。普通の往復書翰を認むるにも、頗る念を入れて之を書し、決して其法を亂さず。恰も手紙を書くを無上の樂となせるの觀ありき。殊に草書に巧にして、其書牘の如きは、行雲流水の妙あり。人の揮毫を需むるあれば、喜んで之に應ず。而して必ず同時に數葉を書し、侍女をして左右の手に各一葉を掲げて伯の前に立たしめ、伯自ら之を對照諦視せし後、最も其意に適したるものを得て、始めて止む。絹地の如きも、亦然り。又其書する所の材料に充てむが爲め、常に書生をして諸子類の古書中より奇語を鈔せしむ。然れども草體に便ならざる文字あれば、勝手に同意義なる他の文字に改作するを例とせり。伯嘗て曰く『童子に習字をなさしむるには、須らく千字文の水書より練習せしめよ。手腕既に固うして、初めて雲烟飛動の妙、意の欲する所に從ふべし』と。

伯は青年時代、川原の夜角力の雄なりしだけありて、怪力人に絕せり。明治の初、一夕板垣等と共に、薩州出身海軍々人の宴に招かる。當時一般に、殺伐の氣風未だ失せず、動もすれば、腕力を以て誇となすの風あり。殊に酒席に於て、血を見ること屢々なり。偶ま

薩の一將校、醉ひて頻に伯を挑む。伯應ぜず。他の將校來りて、亦頻りに罵言を發し、終に躍り懸る。伯、止むを得ず、全力を籠めて膝下に引寄せ、他の將校を攫んで之を擲つこと數間、一同之に氣を呑まれて畏服し、敢て再び暴行を加ふる者なかりき。

一夕、交番所の前にて、伯を載せたる車夫、他の車夫と衝突し、喧嘩を始む。伯は直に他の車夫の肩を摑み、人礫となし、どうとばかり交番所に投げ入れたり。巡査驚き且つ怒り『人間を投げ込む者は誰ぞ』と咎む。伯曰く『余は後藤象二郎なり。其者、往來を妨害す。取締ありたし』と。車夫を叱して、走り去らしむ。

伯の始めて元老院へ出仕せむとする日、朝早く綱曳車にて疾驅し、蓬萊社に至り、禮服を著用せむとす。車夫酒資を貪り、冷語を以て伯を辱しむ。伯爲に激怒し、力に任せて、綱を引きちぎり、車夫二人を捕へ、社の門柱に縛して去る。

伯嘗て長崎なる高島炭坑事務所に出張せし時、事務所の門前に客待ちの人力車夫集まり居りて、馬車の出入を妨げしかば、嚴に日を期して、其立退を命ず。然るに其期に至るも、

車夫等依然として、立退かず。伯勃然として怒り、車を掴んで之を擲ち、落花微塵に打砕く。車夫等大に驚き、頻りに苦情を鳴らし、末、終に地方裁判所に損害要償の訴訟を起し、伯は法廷に召喚せらる。此噂市中に傳るや、傍聽者山の如く集まり、皆片唾を呑んで、其問答如何と待ち設けぬ。判事威儀を正し、伯に對して、型の如く身分、族籍等を訊問したる後、『其方の宗旨は何ぞ』と問ふ。『之なし』と答ふれば、判事折返して『宗旨の無き筈は無し』と詰る。伯、ぐつと癪に障り、忽ち奇問を發して、曰く、『果して然らば、人間死後の靈魂は有るものにや、無きものにや』と。判事不意を喰つて、度を失ひ、一時訊問を中止し、伯を退廷せしめたりき。

伯、或時貸借事件の爲に訴へられて、法廷に召喚せられしことあり。其際、伯の履歴調べの事より、『參議を免ぜられしは何年何月なりしか』と尋ねられたるに、伯は簡單に、『記憶せず』と返答す。原告は『斯る一生涯の大事を記憶せざる理由なし』と詰りければ、伯は忽ち威丈高になりて曰く、『象二郎、不肖なりと雖も、維新前より土佐藩の家老なり。靴磨

か、草履取の分際より成上りし出來星紳士ならば、參議の任免を大事件として、後生大事に記憶すべきも、象二郎は此の如き人物にはあらざるなり』と。それより雄辯を鼓して、散々に揶揄翻弄せしかば、原告は激怒の餘、口訥して辯ずる能はざりき。

伯は維新前、既に竹內綱に向ひ、土佐の穢多を擧つて、南洋の無人島に移し、開拓に從事せしむるの腹案を語りし由なるが、松方內閣の時、伯頻りに拓殖務省の新設を主張して止まず。松方其故を問ふ。伯曰く、『厄介なる豪傑連を、悉く海外へ追ひ遣らむが爲めに、殖民政策は最も必要なり』と。松方大に笑ふ。

伯の大臣官邸に在りし時、玄關の書生に、『不在を以て來客を謝絕せよ』と嚴命せしことあり。偶ま書生他室に行きしに、來客あり。屬官其伯の嚴命を知らずして、之を伯に報ず。伯大いに怒り、圖卷を擧げて之を逐ひ、且つ叱し、且つ擊つ。翌日自ら某を喚び、書生と誤認せしを說き、之を謝す。某、却て伯の眞率無我に服せり。

伯土佐藩の用務を帶びて長崎に出張せし時、豫て外國商人の我官吏を侮りて、頗る倨傲

の風あるを聞き居たるが、一夕之と會見するや、外商果して無禮千萬にも、一脚を卓上に擧げたりしかば、肯かぬ氣の伯は、負けては居らず、忽ち兩脚を卓上に擧げて、之に報いぬ。彼れ大に驚き、これより伯を畏敬するに至れり。

伯、容堂に召されて、坂本龍馬と共に、シュリン艦に搭じ、長崎より神戸へ向ひて、下關近く航進中、曉霧深く、咫尺を辨ぜず。艦長由比直衛、雀の聲を聞き、大いに驚き、舵を轉ぜしも、轟然一聲、忽ち一島の礁角に乘り當て、全艦爲めに震蕩す。便乘し居りし山東直砥は、寢床より投げ飛ばされ、シャツ一枚にて甲板に出でたる程なりき。忽ち舷板の破れ口より、海水混々と入り來る。坂本等は、水夫を指揮し、蒲團衣服等を破れ口に詰め込みぬ。かくて辛うじて神戸に着きしが、伯は始終頓着せざるものゝ如く、其投錨まで、士官室より出でざりき。

後藤新平、人に語つて曰く『凡そ人は其功績により、名譽の表彰を受けしものは、皆其記念物を客間に陳列し、以て之を誇るを常とす。後藤伯に至りては、決して斯る事なし。

予曾て、彼のパークス危難救助謝禮として英女皇より賜はれる寶劍を一見せむと欲し、之を伯に乞ひたるに、「何處かへ仕舞置きたり」と答へられたるのみなりき』と

明治の初は、攘夷熱猶失せざりき。伯の初めて馬車を橫濱に購ひて、途上を往來するや、或は其奇禍に罹らむことを慮れ、之を諫むるものあり。伯笑つて曰く、『余は寧ろ衆人をして、之を見習はしめむと欲するのみ』と。終に顧みず。

伯、豪放磊落、小事に拘泥せざるに似ず、神佛崇敬の念、頗る厚く、神社佛閣の前を過ぐる時は、必ず禮拜せり。

伯は其生涯を通じて、能く秘密を守るの人なりき。或は其洒々落々の性より推して、所謂明ッ放しの人ならむと思ふ者あらむも、實は然らず。假令其談が親戚舊故に關する誹謗なりとも、秘密とある以上は、決して之を口外せず。世間によく有る受賣談の如きは、決して之を爲さゞりき。

伯の元老院副議長たるや、宮島誠一郎、同院の書記官たり。宮島はもと米澤藩士にして、

詩を善くし、栗香と號す。或日、勝海舟の同院に來りし時、宮島を顧みて、伯に戯れて曰く、『これ曾て戊辰の際、我家に來れる者。奥羽的鼻音を帶びて、其語殆んど狸に似たり。寧ろ僕などを使はせられなば、少しく事務を辨ぜむ』と。伯、頭を揺して曰く、『否、勝先生は使へぬ』と。海舟其故を問ふ。伯曰く、『一度大籬の御職となりし女は、小さき所帶は持てぬものよ』と。海舟大笑して曰く、『いや、一本參りたり』と。

伯の旅行するや、敢て飲食の爲に、時間を徒費することなし。曾て高島炭坑火災の電報に接し、晝夜綱曳車にて、忍びて東海道を下りしが、先づ人を遣りて、驛々に車を準備せしめ、少しも休憩せず。車上にて見つけ次第、大福餅若くは燒芋を噉ひ、纔に飢を凌ぎ、電光の如く疾走せり。又地方漫遊の際、午餐を喫するや、『料理などに手間取りては、面倒なり』とて、自ら店頭に腰打ちかけ、小鍋を借り、鷄卵を煮て、食し終るや、直ちに車に上りしことあり。又或時、上等旅館に投ぜしに、其待遇極めて鄭重にして、容易に膳部を運び來らず。伯は空腹に堪え兼ね、眞向ひの飯屋に走り込みて、車夫等と共に箸を執りた

りしことありき。

伯最も鰯の類を嗜めり。一夕、福島の旅館にありて、侍婢を呼び、『じやこ』を買ひ來れと命ず。婢卽ち藥舖に赴き、麝香數包を持參せしむ。伯爲に啞然、擧げて之を婢に與へしことありき。北越遊說の際、加賀越中の界なる、荒山峠の雪を踏んで、其東麓なる富山縣の吉瀧村に至る。村長出迎へ、茅火を焚き、一行に暖を取らしむ。偶、魚商の生鰯を擔ひ來りて、其傍に憩ふものあり。伯垂涎三尺、自ら之を炙りて、噉ふこと四十八尾の多きに及べり。

東洋のガンベツタと稱せられたる馬場辰猪、眞鍋戒作と善からず。英國留學中、決鬪したる事ありけるが、歸朝後、適ま伯の邸に相會し、互に酒を被つて喧嘩を始む。伯咄嗟、薯蕷汁の容器を兩人の間に覆す。兩人滿身に薯蕷汁を浴び、手指滑りて、相捉ふる能はず。難なく傍人に引分けられたり。

伯は維新前より、多く書生を扶助して、有用の人物たらしめたり。嘗に政客壯士を養ひ

しのみならず。學者あり、實業家あり、工學博士仙石貢、同白石直治など、嘗て伯の書生たりき。中江篤介(兆民)の如きも、亦伯に志願を訴へて、藩廳より長崎へ洋學修行に差立てられたりき。中江酒に醉ひて、善く罵り、時に策士を氣取り『我は張子房の流亞なり』と自負す。伯之を聞き、絕倒して曰く『咄々、足下は三國志中の一禰衡』と。

或地方の一論客あり。伯に向ひて、自己の主義政見を陳述すること、極めて秩序あり。客去りし後、伯之を評して曰く『彼は箱庭的の人物のみ』と。

茅場町なる三菱會社の隣家に、火を失せしことあり。伯馳せ至れば、岩崎社長は、胡床に倚り、社員を指揮して、消防に力を盡さしむ。伯竊に岩崎に耳語すらく『寧ろ燒き拂はせるが、新築を取擴けるに便利ならむ』と。岩崎笑つて首肯す。

四條繩手にて英國公使に斬りかゝらむとせし刺客の巨魁なる川上某は、偶ま其場に來り後れしが、佐渡へ流されたり。明治四年赦に遭ひて出京し、彼刺客の遺劍、伯の許に在るを聞き、之を貰ひ受けむとて、伯を駿河臺の邸に訪ふ。伯直に之を座に延きて快談し、且つ

曰く、『明朝受取に來られよ』と。川上約の如く往きしに、伯は新に造りし白木の箱と共に、之を渡せり。川上は、伯が卽座に與へざりしは、其箱なかりし故なりしことを知りて、深く伯の用意周到なるに感じたりと云ふ。

伯は自由黨の創立に際して、時々莫大の運動費を支出し、板垣を助く。伯敢て之を口にせしことなく、黨員概ね之を知るものなかりき。大阪にて發兌せし『愛國志林』といふ自由黨の機關雜誌の如きも、伯其資を出せり。其他一々枚擧に遑あらず。

伯の朝鮮事件を計畫するや、前後全く其使用する人物を異にせり。他の政治運動と雖も、一段落毎に、槪ね其使用せる人物を轉換するを常とせり。時としては、同時の運動に、人を分ちて、各方面に向はしめ、互に其秘密を知らしめざりき。

伯常に人に語つて曰く、『日本にて仕事なければ、米國に赴き、大統領となりて一仕事なすべし』と。

伯の最初高輪洋館の圖案を命ずるや、其規模頗る廣大に過ぐ。之を諫むる者あるも、皆

聽かず。偶ま大江卓來りて曰く、『未だしなり。何ぞ更に其規模を數層倍になさゞるや』と。伯爲めに笑うて止む。

伯、曾て井上馨と汽車に同乘し、互に其抱負を語り合ひけるが、井上曰く、『吾れは數千萬圓の財を造つて見たし』と。伯聞きも敢へず、井上に謂つて曰く、『吾れは數億圓の借金がして見たし』と。

王政復古の際、伯は西鄕、大久保、廣澤、岩下、辻、中根などゝ廟議に列しけるが、時時懷中より、ぴかぴかするものを取出し、ぱちんと音させて、又懷中に收む。人々その何物なるを知らず。『まさか硝子の懷中鏡でもあるまじ』などゝ噂し合ひけるが、次の會合の日も、相變らず、ぴかぴかするものを取出す。會議果てゝ後、一同伯を取卷き、『お主は自惚鏡でも持つて居るか』と詰め寄れば、伯打ち笑ひ、『これは、西洋人の用ゐる時計といふ物なり』とて、時計を示す。日本帝國の參與ともある人達、こゝに始めて懷中時計を知りたり。伯一日、其の金時計を書齋に置き忘れて外出せしことあり。子息等入り來りて、珍

らしきものよとて、之を玄關に持ち去り、硝子を取り外づし、器械を取出したるに、再び元の如く收むることを知らず、其始末に困じ居たり。偶ま伯、歸り來り、其狀を見て、嫣然笑つて曰く、『轉業(テンゴフ)しちよるネヤ』(惡戲して居るの土佐方言)とて顧みもせざりき。

伯、多愛の癖あり。詩人、書家、畫工より、角觝、俳優、落語家、若くは義太夫に及ぶ。尾上菊五郎、越路太夫の如きは、常に伯の家に出入して、其眷顧を受けたり。伊達太夫はもと伯の書生なりき。伯は曾て菊五郎の爲めに、千歲座の引幕に揮毫せしことありき。伯、人に語りて曰く、『凡そ天下に名ある藝人の談話を聞けば、必ず思はぬ所に、益を得ること多きものぞ』と。或時晩春會といふものを催して、都下待合の女將を集めしことあり。伯曰く、『彼等は皆、深く世態人情の底に通ぜる女豪傑なり』と。

伯、病を南郊に養ひける時、近隣の村家より、一人の美少女を雇ひ來り、藥餌を供せしむ。醫師爲に伯に諷して、之を遠ざけむとす。伯呵々大笑して曰く、『委頓すること此の如し。僕豈に眉斧の恐るべきを知らざらむや。唯之を瓶裏に挿む一朶の山茶花と看做し、病

床の詩想を養ふのみ。先生、過慮を要せず』と。

維新前後の經歷を問ふ者あれば、伯、卽ち頭を掉りて曰く、『いや〳〵、その事は既に陳腐なり。象二郎の經歷は、此れからなり』と。

維新前後、諸名士よりの書翰は、伯大概之を丙丁童子に付せり。唯『木夢帖』四卷、伯の家に殘れり。木夢とは『十八年前夢の跡のみ』の意也。こは明治十八年、大江卓が伯に乞ひて、選收して表裝に附したるものなり。首に伯自から揮毫して『木夢』と題せり。尾に大江自筆の跋あり。『木夢』の中に收められたるは、山内容堂、吉田東洋、岩崎彌太郎、松岡毅軒、坂本龍馬、中岡愼太郎、佐々木高行、細川潤次郎、岩倉具視、德大寺實則、松平春嶽、伊達宗城、大久保利通、木戶孝允、橫井小楠、永井玄蕃頭、近藤勇、辻將曹、伊藤博文、由利公正、加藤弘之、中根雪江、中井櫻洲、岩下方平、酒井十兵衞、松根圖書等の書翰なり。別に、三條實美、小松帶刀、西鄕隆盛の書翰、表裝して傳はれり。

劍難の相ありたる星亨

政治上に於ける星亨氏に就いては、余輩のよくすべき所に非ず。星氏は政治上に於て、政友會の實際の首領たりしと共に、東京市教育會の會長たりき。今や圖らずも暗殺せられぬ。慘なる哉。

聞くならく、星氏は少時人相見に、劍難の相ありと言はれたりきとかや。あくまでも意志強くして、殘忍且猛烈なる人は、手腕ありて、己を利して、味方を利すること大なると共に、敵多く、恨を買ふこと多く、從つて劍難を免れざることあるべし。面相は性格をあらはす。星氏の性格のあらはれたる面相を見て、劍難の相ありとは、必しもあてずつぽうにはあらざるべし。世の所謂お人よしなるものは、毒もなきかはりに、働もなし。大に世に

活動する人は、働きあると共に、また毒を免れず。而して其人の本心に、國家のため、社會のためと云ふ念慮あらば、横着、我儘、殘忍、酷薄の所爲も、恕する所なかるべからず。星氏は明治年間、最も偉大なる人物也。尾崎、林、角田、末松、片岡等の儕輩を壓し、板垣伯をして瞪若たらしめ、伊藤侯をさへ掌上に弄したりし人也。此人にして、社會の爲め、國家の爲めに活動せば、目ざましき大事業擧りけむを。惜むべき哉。

予輩は刺客を謳歌するものに非ず。明治年間、岩倉、板垣、大隈、澁澤諸公は、幸に暗刄を免れたるも、大村、廣澤、大久保、森諸公の如き一代の人傑、前後暗刄に倒れぬ。亦慘ならずや。暗殺は實に社會の安寧を害する弊事に相違なきも、伊庭想太郎が星氏を國賊と見なし、その立派なる五十年來の經歷をすて、立派なる紳士の地位をすて、妻子をすて、身をすて、國家の爲めに害を除かむとしたる心事を憫れまざるを得ず。伊庭氏は、紳士としても教育家としても、立派なる人也。普通壯士的刺客の比に非ず。而して白日公然、衆人のあつまれる議事堂に於て、よしや他の連座の人々は自家の防衞に急なりしにもせよ。悠

然として六刀まで致命の傷を加へたるは、流石に劍客にして、且つ膽氣ある丈夫にあらずんば、出來ざる事也。而して普通の刺客の如く、自殺せむとはせずして、男らしく縛につきたるは、流石に當年の三河武士の子孫也。

余輩は暗刺を非とするもの也。伊庭氏は、國家の罪人也。嗚呼伊庭氏の如き好紳士をして、國家の罪人たらしめたるは、惜しみ、且つ悲しむべき事ならずや。

當年の海上王岩崎彌太郎

一

明治年間の偉人をあぐれば、岩崎彌太郎の如きは、たしかに其人也。三菱會社を起して海運を盛にし、草莽より崛起して、日本一二の富豪となれり。業をなすこと此の如く、財を獲ること此の如くんば、亦偉大なる哉。蟲も殺さぬお人よしや、毒にもならねば藥にもならぬ人や、到底世に事業をなす能はざるべし。世に事業をなす者は、策略も必要なれば、多少毒氣ある事も必要なり。慾望大ならざるべからず。膽も大ならざるべからず。世上の毀譽にかゝはるべからず。失敗に屈すべからず。彌太郎が一生の行爲、疵をさがせば、はてもなけれど、事業家として萬世に傳ふるに足り、又事業家をなさむとするものゝ一の模

範たらずんばあらず。

二

日本一の富豪となりたる彌太郎も、もとは土佐の東隅、井の口村に住ひたりし一の鄕士なりき。鄕士の何たるかは、今の世知らざるもの多かるべし。鄕士とは維新以前土佐國の外、數國にのみありたるものにして、侍にはあらざれど、平民にもあらざる一種の格也。土佐あたりにては、鄕士はもと長曾我部の臣也。山内氏土佐を鎭するに及びて、之を臣下とするわけにも行かず、平民に下すことも出來ず。鄕士として、侍と同じ資格を持たせ、帶刀を許したりしなり。

彌太郎は、鄕士の家に生れ、父は庄家をつとめければ、幼時より學問を習へり。當時の學問とは漢學なり。彌太郎は出來よく、且つ詩をよくし、神童の稱ありき。

藩主巡回して來りし節、彌太郎の才名を聞かれ、召し出して、詩を賦せしむ。時に年わ

づかに十四、田舍の一少年なれども、擧止度あり。其詩と云ひ、其手蹟と云ひ、世にも美事なる出來なりしが、藩主をはじめ左右舌を卷いて驚嘆せり。

明治の世の事業家といふものは、何處の馬の骨ともわからぬ成上りものにて、無學者なるが多けれども、彌太郎は武士の胤なり。學才詩才のありしこと此の如し。この一事以て海上王の十歲時代の一班をあらはすに足るべし。

三

二十一歲の時、江戶に上りて、安積艮齋の門に入れり。されど、十歲の神童、二十才の才子とかや。十四歲の時、藩主を驚かしたりし神童も、艮齋には見限られたりき。下りて才子となりたる乎。曰く、否。艮齋の氣に入らむには、彌太郎は餘りに偉大なり。彌太郎は腐儒となるを願はず、その行放縱不羈なり。もし艮齋の氣に入るやうなる人ならば、學者もしくは教育家となりて終るべし。恐くは他日海上王となる能はざりしならむ。

四

翌年、彌太郎の身の上に、一の厄難下りぬ。庄屋をつとめたるその父、公事沙汰につきて、郡奉行に誣ひられて、獄に下りぬ。

彌太郎之を聞き、晝夜兼行して鄕に歸り、郡吏に面して、父の寃を辯じたれど、その甲斐なし。彌太郎憤慨に堪へず。夜郡役所の門の柱に二句を大書す。曰く。官以ニ賄賂一成、獄因ニ愛憎一。と。むかし、兒島高德は行在所の櫻を削りて、天莫レ空ニ勾踐一、時非レ無ニ范蠡一。といふ二句を書したりき。これは忠故、彼は孝故、忠孝、道は異なれども、その精心は一也。前後一對の美談といふべし。

郡奉行之を見て、いたく怒りしが、誰ともわからざれば、命じて削り去らしめ置きけるに、彌太郎又も外面の白壁に同じ句を書きたり。奉行もはや默する能はず。彌太郎ならむと捕へて糺問しけるに、つゝみかくさずして、白狀しけるこそ男らしかりけれ。奉行もこ

れ孝心のいたす所なりとて、重くは罪せず。居村をたちのかしめたり。たちのきを命ぜられて、高知附近に來り、兒童に書を敎へて、その日を送りけりとぞ。

五

當時土佐の參政に、吉田東洋といふ偉人あり。政治家にして兼ねて學力あり。惜むらくは、この偉人、勤王家にあらずして佐幕黨なりき。且つ暗殺せられたるを以て、その名、後世に赫々たらず。

彌太郎は、この人の門に入れり。同じ門下に、後藤象二郎あり。福岡孝悌あり。この二人、東洋の門弟だけに、もとは佐幕を唱へしも、東洋のあとをつぎて、藩政にあづかるに及び、時勢の變を察して、其說を變じ、維新の元勳となりて、後藤は伯爵となりぬ。福岡は子爵となりぬ。岩崎は海上王となりぬ。その餘蔭によりて、弟も子も男爵となりぬ。

六

彌太郎書を讀み、刀を帶びたる身なれども、腐儒とはならはず、空論を吐くを喜ばず。勤王、佐幕、開港、攘夷以外にたちて、心を殖產に注ぎしは、亦一種の見識たらずんばあらず。

その鄕里の山林の拂下をなして、大阪へ材木を積み出すなど、商人の眞似しければ、人みな爪はじきして譏りけれども、彌太郎は毫も頓着せざりき。

彌太郎にして、斯る覺悟なくんば、到底海上王とはなる能はざりしならむ。

七

後藤、福岡等、藩の要路に當るに及び、彌太郎は國產力の役人となれり。力量よりは、門地が問はるゝ世の中、彌太郎は、貨殖局下役の一人たらざるを得ざりき。その上にある

人ども、いづれ無能迂濶なる人也。彌太郎は、出頭するも、一言も吐かず。人その故を問ふ。曰く、頭取以下の言ふ所、いづれも兒戲に類す。到底共に事をなすに堪へずと。かくて、間もなく辭表を出して鄕にかへれり。天馬、竟に羈すべからざる也。

八

土佐は海國也。九十九浦、太平洋に面して、漁獵の利多し。且つ他國に行くに、北山を越えて讃岐の丸龜に出る道あれども、太だ不便也。海路直に大阪に出るが便なれば、航海の道は、わりあひに發達せり。殊に米艦渡來以後、土佐の漁民にして、亞米利加に漂着せし中濱萬次郎(今の中濱醫學博士の父)の歸來せるあり。西洋の事情もよく知れて、殊に航海に重きを置けり。維新の頃までに、土佐藩は五十餘艘の汽船を有したりき。坂本龍馬は海援隊を組織したりき。後年彌太郎が一躍して海上王となりけるも、そのもとづく所ある也。

九

後藤象二郎は、汽船買入など、藩用を帶びて、長崎に出張しけるが、國事のために呼びもどされぬ。代りは、誰かと詮索せしが、彌太郎竟に引出されぬ。後藤部下の山崎早六、高橋勝右衛門等、新らしき上役來りけるを以て、色々役務上の行きがゝりを話さんとしけるに、彌太郎、制して一も聞かず。君等はこれまで通り、事務を續けよ。余は別に思ふ所ありとて太だ無頓着也。山崎等氣遣ひて、後藤の方針を云ふに、とりあはず。されど、ひそかにさぐるに、西洋人の商館にゆき、薩摩藩の五代と出あへるやうす也。

漂流し來れる朝鮮人と筆談することありしが、彌太郎ふと思ひ立つ事あり。朝鮮の欝陵島へわたりて材木を切り出し、更に朝鮮の內地に入り、國王に謁して、其許を得て、牛皮を買ひて、西洋人に賣りて、奇利を得んとて、五色の縮緬五疋、朝鮮國王への土產にするつもりにて買ひもとめ、杣職數人までつれて、英船にのりて欝陵島に赴きぬ。

朝鮮人との筆談によりて、彌太郎以爲へらく、欝陵島は樹木の繁茂せる無人島なり。朝鮮にも屬し居らざれば、われ往いて之を占め、材木を切り出して、藩の財政をふやし、且つ朝鮮の牛皮は價廉なれば、之を買ひ、西洋にて靴を造るに用ゐるものなれば、之を賣りて大いに利を得んと。

されど、欝陵島に至りて、詮索するに、古來朝鮮領也。岩崎發見の島とかゝむとて用意せし木標も、徒勞に歸しぬ。その上に樹木とて繁り居らざれば、彌太郎の失望一方ならず。一の大計劃、全く畵餅に歸して空しく還れり。

今一つ牛皮交易の方をやつて見んとて、再び英船に乘りて朝鮮に赴きたるに、當時朝鮮は鎖國主義を執り居りて、英船を見るや、巨砲をうち出さんとし、刀をふるひて人民のさわぎ立つさまなれば、上陸だにする能はずして、又もむなしく歸り來れり。

誰か思はむや、海上王にして成功せる偉人にも、なほかゝる滑稽に類する失敗あらむとは。凡そ天下の事濡手で粟をつかむやうに、たやすく出來るものにあらず、まづ目先がさ

とからざるべからず。思ひきりがよからざるべからず。豪膽にして、びくつくべからず。幾多の失敗に屈せず、艱難を忍びて、飽くまでも猛進せざるべからず。

十

長崎を去りて、大阪に來りぬ。藩主の信用を得て、藩の財政をあづかりしが、川田石川等を使ひて大阪附近の運送業をはじめぬ。維新となるや、藩の汽船は政府に獻上せしに、彌太郎拂ひ下げを願ひて、やすく買ひとり、以て海上に雄飛する素地をつくれり。はじめの航路は、高知神戸間なりしが、終に西は馬關に及ぼし、東は横濱に及ぼせり。而して本社を東京にうつすに至れり。

こゝに至りて、三菱會社の事業大いに膨張せしが、西南戰爭起るに及び、國家に對して大功ありたると共に、三菱の社運、益隆盛を極めたり。

明治七年頃より三菱會社が地盤をかためて、先づ競爭せざるを得ざりしは、外人の手に

なれる米國太平洋郵船會社なり。こは米國より横濱に達し、神戸、長崎を經て、上海に達する航路を有す。競爭の結果、その會社の船を買ひ取りて、日本の海上は、全く三菱會社の手に歸せり。

十一

彌太郎は、幾多の競爭者を壓倒して、旭日冲天の勢を得たりしが、世ばいつまでも鬪爭の巷也。三菱の隆盛を見て、うらやむの餘、そねむ者あり。終に官の保護より成立ちたる共同運輸會社、世にあらはれたり。これは政府を後に控へたれば、最も恐るべき大敵也。彌太郎も、畢生の勇を振ひて、之と鬪ひて、優劣未だ決せざりしに、天、年をかさず、胃癌にかゝりて、明治十八年の春、空しく死去せり。年五十二。東洋の男兒。とまづ大呼し、つゞいて曰く。東洋の男兒、期する所頗る多し。その十の二三を行ふを得たるのみにて早く病に斃る。命なる哉と。あゝ、偉人彌太郎が最後の言なりき。

これ決して、空威張りにあらず。天若し之に命をかさば、必ずや歐洲にまでも航路をひらき、日本の三菱會社たらずして、世界の三菱會社とならしめしならん。然るに內に早く競爭者起りて、未だ大いに勝つ能はざるに身先づ死せり。其遺憾果して如何なりしぞや。

三菱、運輸の二會社相爭ふは、國家の爲めにも不利なりとの說、朝野に起りて、彌太郎の死後、數月、明治十八年の秋、終に合併するに至れり。今の郵船會社是也。

十二

日本の海運勃興したるは、全く彌太郎の力也。かゝる事業をなしたるものは、世之を優遇せざるべからず。其行に瑕疵も多けれども、今一々指摘せず。要するに豪壯にして不羈、而かも細心にして、よく勵精事に當り、毎日の出來事、必ず調査せざれば眠らざりしといふ。磊落なれども、規則正しかりしを知るべし。かゝる性格は、事業家として最も必要なり。

維新前後、土佐より人才を多く出したりしが、その中にて、最も大なるものを、彌太郎となし、後藤象二郎となす。この二人は、所謂大陸的也。而して事業の上より云へば、彌太郎の事業、當時に倫を絕せり。嗚呼東洋の男兒、未だ其志の十中二三をとげざりしも、明治年間の一の大事業をなせり。其身死して、事業はなほ殘るなり。

余の恩人佐々木高美先生

余には、恩人多し。佐々木高美先生も亦其一也。先生は、佐々木高行侯の子、佐々木行忠侯の父、海軍中佐にて東郷大將の副官となりしことある佐々木高志氏の兄也。

土佐協會とて、土佐人の團體あり。會員數千人の多きに上る。これ土佐同志會と武揚會との相合したるもの也。武揚會は軍人養成を主としたる軍人の會なりき。同志會は、もと大學生の親睦を圖る小團體にて、會員の範圍を大學と大學豫備門(高等學校)とに限りたり。余が之に入會したる頃は、その範圍を大學以外、高師、高商に及ぼしたるが、それにてもなほ會員の數は二三十人に過ぎざりき。先生、英國留學より歸朝すると共に、顏、渥丹の如く、美髭漆よりも黑き二十四貫の大兵、我同志會に現はれたり。その頃より會員の範圍

を官立以外の私立學校にも及ぼし、更に學生以外の朝野の紳士にも及ぼし、同志會俄に膨脹せり。先生大に其間に盡力する所あり。先生は同志會に取りて、福の神也。善く談じ、善く笑ひ、胸襟を披いて、書生を容れ、少しも紳士振らず。衆心之に歸すること、なほ北斗七星の北極星に於けるが如し。年の暮の終會の日、衆に謂つて曰く、『正月二日は例として終日在宅して來客を待ち受く。飲みに來れ』と。その頃は我れ酒に渴したりき。仙石博士の御情にて、土曜日每に一本の酒を惠まれたるが、それでは、ちと不足也。折り〳〵酒店にて桝酒(桝の儘にて呑ましたり。後、コツプを用ゐるやうになれり)の立飲を爲したり。當時、酒に目の無かりしこそ愚かなりけれ。先生が『飲みに來れ』とは、所謂下地は好きなり、御意は好きもの也。二日、年賀廻りを爲して、五六合の酒を入れたる上、薄暮先生の宅に至る。同志會の連中、先づ在り。いざとて、先づ獻されたるは、七合入りの大杯也。われ之には驚きたるが、『斗酒何ぞ辭せんや』と氣張りたる鴻門の樊噲にも負けるものかと、馬鹿な事に力瘤入れし時代也。殊に陸放翁の『平時一滴不レ入レ口、意氣頓使三千人驚二』の境

遇に在りしことゝて、三口にて瞬く間に七合を飲み干したり。なほ五合入りの大杯あり。又三合入りの大杯あり。その三合入りの大杯にて、更に五六杯も飲みたり。斯くて放翁の所謂『意氣頓に千人を驚かしめ』て、『我れこそは天下の豪傑』と、如何に糞力を入れても、到底先生の敵には非ざる也。先生は三合入りの大杯を何十杯呑みても、平氣の平左衛門也。われ多く酒客に接したるが、先生ほどの酒豪を見たることなし。

先生は酒豪なるのみならず、碁を打ちても、優に初段の域に在り。われ碁を好み、當時笊黨の雄を以て自負せしが、先生に對しては、六目置きても覺束なかりき。英文の小説を達者に讀みこなすこと、我が同輩一同、誰れも先生の足下へ寄り付けざりき。先生は漢學の素養もあり。詩を作り、筆蹟も妙也。一面は父高行侯に似て、尨大なる俤あり。一面は母高行侯夫人の氣質を受けて、敏捷なる點あり。而して能く書生を愛せり。今、一高の校長となれる瀬戸虎記や、伊藤薊山や、余や、いづれも貧書生也。而して學資上、先生の補助を受けて、學業を續くるを得たるもの也。この三人は、毎日少くとも一度は先生の宅に

行けり。その他、先生の門に出入する學生多く、先生の家には、川田久信、岩崎鏡川、國正藤太郎、津田茂麿諸氏、書生として養はれ居りたりき。

先生は、角力を好めり。友綱門下の力士、常に先生の門に出入したり。先生の宅にも、高輪御殿の官舍にも、土俵を設けたり。而して先生は二十四貫の大兵なれば、誰も先生の相手になるものなし。余等の角力取るを見て樂み、いろ〳〵批評せり。先生の外甥なる藤井九萬三(工學士)、今、海軍主計中監となる石本久間男などが余の好敵手なりき。當時高行侯は、昌子房子兩内親王殿下御養育の任に當れり。なほ今の竹田宮殿下をも預り申したり。先生は竹田宮殿下御養育直接の主任者なりけるが、豪傑趣味を鼓吹せむとし、余等の如き、野性武骨の書生をして、其左右に接せしめむと力めたるかと察せらるゝ也。先生は二十四貫の大兵、一二里も歩けば股と股とすれあひ、絹のバッチ忽ち破れて出血するに至る。されどなほ勇を鼓して、余等と共に遠足したることありき。

一夏、先生は我等を伴ひて、房州館山在に避暑し、一屋を借りて自炊自活をなせり。初

め先生に隨行したるは、藤井九萬三、瀨戸虎記（理學士）、生駒勇（工學士）、及び余の四人也。三四日滯在の後、先生は一時歸京せり。『この間に、房州を一周して來ずや』と云へば、藤井應じ、生駒も應ず。ひとり、瀨戸のみは應ぜず。元來、瀨戸は運動嫌ひ也。而して議論好き也。理科生としては世間的也。法科生としては學者的なりき。瀨戸に留守を賴みて、余輩三人、菅笠に絲㡇を負ひて、立ち出でたり。第一日の夜は白須賀の濱邊に野宿したり。第二日は淸澄山上の旅店に宿しけるが、宿帳に前夜の宿所を記するに方りて、三人ちと困りたり。終に野宿とせずして、記憶をたどりて、場所と宿屋の名とを假用したりき。第三日は鋸山の上の日本寺に宿し、第四日、富山の頂を蹴て歸り來れば、瀨戸曰く『前夜更闌けて、うと〳〵し居りしに、ふと眼を開きしに、腰から下の無き人見ゆ。幽靈にやとて諦視すれば、物干竿に懸けたる手拭なりき』と、われ之を冷かして狂歌を作れり。

寢ほけては物も怪しく見えぬれば
　顔を拭けとて動く手拭

二週ばかりの後、先生は弟の高志氏、中村久弘父子、千頭直雄、伊藤薊山などを伴ひて再遊し、俄に賑かになりしが、枕が不足す。夜になれば、枕の奪合ひが始まる。中には日の暮れぬ前より、枕を懐に入れ居るものもありき。

翌年の夏には先生に隨行して、富士山に登れり。藤井、生駒、中城、及び余の四人、先生と共に東京を發し、佐野に下りて、醫師岩崎長康氏の家に至る。高志氏、當時海軍兵學校に在りけるが、江田島より來り會せり。岩崎氏に一宿し、翌日は須山に一宿し、第三日始めて山路に就く。馬を利用する能はざるに至りて、先生も徒步す。二十四貫の大兵、三人の剛力、綱にて前に引き、二人の剛力、先生の尻を押せり。而かも先生屈せず、笑つて富士の頂を極めしこと、今もなほ目に見るやう也。

その頃、高行侯は兩内親王殿下を奉じて、毎年、暑を日光御用邸に避くるを例としたりき。富士山より下りて後、余は高行侯の談話筆記を命ぜられて、日光に赴き、御用邸に起臥しけるが、一日思ひたちて、白根と男體とに上らむとて、薄暮ひとり湯本に至る。もと

より貧書生の旅裝也。殊に一人旅也。どの宿屋にも、門前拂を食はされたり。蹄鐵形に竝べる宿屋を、一々『宿を賴む〳〵』とて廻り行きて、終に唯一軒を餘すのみとなりぬ。われ以爲へらく、『野宿我に在りては、難事に非ず。されど、宿料懷に在り。殊に宿屋が悉く滿員なるに非ず。然るに宿屋に宿するを得ざるは意氣地なし也。よし〳〵手をかへて見む』とて、殘れる一軒に行きて、賴みしに、斷られたり。余は止むを得ず、豫め考へし如く、御用邸を持ち出したり。『我は日光の御用邸に來り居る大學々生（實は第一高等中學校）也。決して怪しきものに非ず』と、此言を聞きて、俄に容子を改め、『さらば、どうにか部屋を都合せむ』とて、二階なる三疊の一室に入れたり。他に八疊六疊の空室多かりき。御用邸にて間に合はずんば、余の懷には、中禪寺にある二荒山神社の祠官間宮用角氏への紹介を持ち居れば、それを示さむ。それにてもなほ、承知せずんば、三里の道を中禪寺へ戻りても可也。然し翌日白根に上るには、湯本に宿するが便利也。せめて晩食だけ、どうにかして、野宿せむと決心し居りたりき。宿屋は何處でも一人旅の人を嫌ふ風習あり。況んや

破衣破帽なるをや。余は登山を主として、行脚的服裝をなし、而も一人旅の場合が多かりき。從つて宿屋に虐待せられたること少からず。湯本の如きはその一例也。

その後、大學を卒業する前年、高行侯に招かれて、日光御用邸に赴き、土佐の一勤王家の傳を書きしことあり。當時われ文章を誇張する青年の習氣を脱せず。侯見て笑つて曰く、『これは、餘り豪く爲り過ぎたぞ』と。その時、先生は、御用邸に近き一寺院に寓し居れり。余は先生の寓居に寓しけるが、毎朝門前の溪流へ顏を洗ひに行けり。一日、眼鏡を溪流に落して、俄に盲目となり、眼鏡の行方を探す能はず。日光の町に唯一軒の眼鏡店あること余の目に入り居りたれば、たどる〳〵その眼鏡店に至り、近視の眼鏡を買はむとするに、之なし。たま〳〵之あるも、極めて弱き度のものにて、余に取りては、懸くるも懸けざるも、差別なき程なれば、買はずに歸り、一兩日の間は、俄盲目となりき。之に懲りて、爾來旅行する毎に、別に一箇の眼鏡を用意するやうになりぬ。

先生は國學院に盡せり。又日本中學校に盡せり。明治二十二年の條約改正反對運動にも

力を盡せり。晩年近衞篤麿公と相識り、大に政治界に飛躍せむとせしが、惜しや、男の厄年にて早世せり。谷干城の日記を見るに、先生に關して、左の記事あり。

明治三十五年七月七日、佐々木より電話にて、高美氏病氣危篤を報ず。既に死後也。好男子、誠に惜むべし。

先生の早世は、豈に獨り谷將軍の惜みしのみならんや。土佐の先輩にて後藤板垣二伯、最も盛名あり。高行侯は二伯の如き盛名は無かりしが、識者は其大にして高きに推服したりき。後藤伯を智とすれば、板垣伯は勇也。而して高行侯は仁也。先生は更にまた其父の盛名の下に隱れて、未だ其力量を發揮する能はずして、空しく逝きける也。

吃る男

庭前の枯木に、俗に『猿の腰掛』といふもの生じたり。その上に、陶製の猿を置きて、小兒どもを喜ばさむとて、末の幼兒を伴ひて一店に行き、坐りて桃を抱ける陶製の猿を見付けて、價を問へば『十五錢なり』といふ。今一つ猿が大桃を抱けるが、その桃くり拔かれて、卷煙草の灰落しとなれるものを見付け、價を問へば、『三十五錢也』といふ。『二つ買ふから、ちと價を引け』とは世間普通の慣用手段也。然るに、余は、『さらば二つにて五十錢か』とて、五十錢銀貨一つ投げ出せしに、老主婦嬉れし涙こぼさんばかりに打喜び、『その猿の灰落しは、造りてより三十年今日までも賣れざりき。貧乏こそ致し居れ。一國者なり。一文も値切られずに、綺麗さつぱりと買ひ給ふことのうれしさよ。その淸き御心を見ては、お

まけをせざるを得ず』とて、玩具の小土瓶一つ、湯呑五つ六つ、幼兒に呉れたり。余とてもまんざら、金錢の價を知らざるものにあらず。されど、少時より口吃るを以て、物を買ふに、直切るなどは、面倒千萬也。故に今日まで一切直切りたることなきなり。

『癩病の友慾しがり』とかや。余は自分が吃るを以て、吃る人を見ては、人一倍に氣の毒に思ふ也。又古今の吃る人が特に余の注意を引く也。余の知れる範圍に於て、吃る人少なからず。三宅雪嶺博士の吃ることは、世に有名也。博士は演説殊に訥也。談話の方が演說よりは少しは流暢也。之に反して我友人の寺崎留吉氏は、熱心且つ眞面目なる博物研究者にして文章に長ぜるが、談話に吃りて、演說若しくは講演には殆んど吃らず。殊に寺崎氏は吃りながら能く饒舌る人也。英文の大家井上十吉氏も吃る。文學士の栗原古城も吃る。同じく文學士にして英文に堪能なる太田善男氏も吃る。歌人の金子薫園も吃る。久保天隨も吃る。黑板勝美氏も吃れど、巧に吃ることを掩へり。茅原華山も演說は流暢なるが、談話は少し吃る。木村鷹太郎氏も、もと吃りし由也。

日蓮と蘆原將軍

日蓮は、佛樣の化身なりと自稱し、妙法を以て、三千世界を救はむと、廣言したる人也。蘆原將軍は、その名の如く、この豐蘆原の瑞穗の國の主者を以て、自から任じたる人也。常人より見れば、いづれも氣違ひじみたる人也。されど、日蓮は千古の偉人也。世を救ひたり。蘆原將軍は、自ら任ずる所は、大なれども、終生、瘋癲病院の厄介物也。知らず、何によりてか、斯く雲泥萬里の差を生じたる。

世話的に、うちくだきて云へば、日蓮も、蘆原將軍も、共に、鼻の、餘り高過ぎたる人也。されど日蓮は、鼻の高さに相應するだけの實力あり。蘆將は、毫も、その實力なしと云へば、一寸、說明が出來るやうなるが、これ、偉人と常人との區別にして、必ずしも、

偉人と狂人との區別に非ず。日蓮は、鼻が高きと共に、足も、高く地をはなれたり。世人と、取ッ組合ひをなさず。蘆將は、鼻ばかり、天上に朝すれども、足は地に固着し、世人と取ッ組合ひを爲すこと、餘りに甚し。これ、實に偉人と狂人とわかるゝ所なり。

さらば、足、地を離れて、世人と取ッ組合ひを爲さずとは如何なる事ぞやとの問が起るべし。心熱し、氣昂りて、飽く迄も、進取し、向上せむとするも、物に執着せず。死生を一笑に付して、泰山のくづるゝとも動かず。まして、世人が白刄をふりまはし來た位では、びくともせず。人を侮りもせねば、恐れもせず。單身天下に濶步して、毫も憚らず。人を憐みて、人に依賴せず。恩を賣らず。はめられやうが、譏られやうが、少しも頓着せず。進める處まで進みて、それからは、運に甘んじ、思ひ切りがよく、愚痴をこぼさず。未練なる事をせず。心中、毫も怨むる所なければ、怒る所もなく、生前の富貴、死後の名譽など、念頭に置かざるが、これ卽ち、足、地を離れて、世人と取ッ組合ひを爲さゞるもの也。此の如くにして、はじめて、人に說法すべし。世を救ふべし。かゝる人は、鼻が高きと共

に、身體も、高し。その鼻も、自然に高まりたるものにて、强ひて、いつはりて、人の前に、高くするに非ず。聖人と呼ばれ、偉人と呼ばれ、名僧善知識と呼ばるゝ人は、皆、この域に達したる者也。而してこれ位の事は、三尺の童子も、口だけには、わかり居れど、これが眞の腹の底からわかり居るものは、天下、果して幾人かある。日蓮の如きは、眞に腹の底から、わかりたる人也。故に飛ぶ鳥をも落さむ許りの執權を敵として恐れず。幾度か殺されむとし、島流しにせられたのも、驚かず。千挫、屈せず。萬折、撓まずして、終によく、日蓮宗を開きたる也。机上の學者は、恐らくは一生、この境に達する能はざるべし。學校出たての青二才の輩が、小才を恃みて、妄りに、鼻を高くし、少しばかりの哲學の書を讀みかじりて、眞理をさとれりと吹聽し、新執の偏見を挾みて、天下を律せんとし、人が敬して遠ざくれば、よい氣になりて、われは、神なり、救世主なり、福音を傳ふるものなりと、増長するもの、近時漸く多し。形は一寸日蓮に似たれど、其內實、日蓮には遠く隔りて、瘋癲病院に、片足つッ込みたるもの也、蘆原將軍の子分也。

次に、足、地に固着して、世人と取ッ組合ひを爲すとは、如何なる事ぞやとの問が起るべし。これは、前に言ひたる事の反對なりと言へば、それで、わかる事なれど、少しばかり云つて見れば、口と腹とは、一致せず。口にはえらさうなことを云ひ居れど、毫も膽力なし。臆病也。氣は小さし。胸はせまし。人を容るゝ能はず。金がほしく、名がほしく、高樓に住まつて見たく、盛服をつけて見たく、譽めらるれば、喜び、譏らるれば怒り、心には、恐しと思ふことや、恥かしと思ふことが充滿し、政治家の前に立てば、世才をあらはして見たく、學者の前に出れば、學識をあらはして見たく、酒樓には大盡とまで行かずとも。あまり貧乏人でなしと思はれたく、美人には、好男子とまで行かずとも、樣子の好い方と思はれたく、我に敵する人あらば、恐れ、我に背くものあらば、恨み、我身の缺點は、棚にあげて人の云ふ所、なすことが、癪にさはり、貧くれば、すべて恥辱と思ひて、下らぬ事に負惜を云ひ、萬事、氣にかゝりて、常にびく〳〵し、白刄を見れば、腰を拔かし、どうしても、小我の心を去ること能はず。新執の偏見にかたより、執着甚しく、愚痴、

不平、未練、胸に溢れて、一日半時も安らかなる能はざるが、まづ、足、地に固着して、世人と取ッ組合ひを爲す者也。

蘆原將軍は、これが餘り甚しくして、一方には、鼻が餘り高すぎたる者也。その子分は、今の文壇に、頗る多し。學者にも多く、政治家にも少なからず。世人一般に平均すれば、百人の中、十五六人あるべし。學者、文人、美術家の中には、重患、輕患をあはせて百人の中、少なくとも四五十人はあるべし。

今更、かゝる人を救ひて、瘋癲病院の門より、片足ひきあげさせむとするも、まづ〳〵不可能の事也。それに力をつくすよりも、ゆく〳〵は、瘋癲病院に片足つッ込まむとする人を、ひきもどす方が、氣のきゝたるわざ也。早計に判斷すること勿れ。余は、必ずしも、無理に鼻を高くせよと云ふ者に非ず。德備はれば、其鼻自然に高くならざるべからず。これ人が進歩する所也。されど、鼻の高きと共に、身體も、高く上らざるべからず。かく人をして、足、地をはなれしめむとするは、これ余が多年、靑年に向ひて、說きつゝある一

眼目にして、今、一朝一夕に說きつくし得べくもあらず。唯一言すれば、天成の偉人ならざる限りは、机上のみならず、酒樓のみならず、白刄の下にも立ち、怒濤の上にも立ち、獨り山上にも露宿し、天下、到る處に、難行苦行して、膽を練り、氣を壯にし、新執を去り、名聞の念をはなれ、氣取らず、衒はず、ぶらず、飾らず、侮らず、恐れず、驚かず、恨みず、怒らざるやうに、久しき年月にかけて、修養すれば、普通の人は、五十歲に到りて、どうにか、かうにか、それが、腹からわかるやうになるべし。

諧謔なる馬醫山岡翁

われ敬して、翁と稱す。姓は山岡、名は重劼。劼は『かた』と訓む。馬醫の官となり、大尉相當の地位にて、現職を去りたる人也。嘗て今の大山大將、點檢の際、軍人の名を讀み上げて、翁に至り、山岡重までは訓めたるが、あとの一字が訓めず。左右に問ひて、よいかげんなる訓み方をなす。眞の名と異なり居るを以て、返答せざりきといふ。

その名のよまれ難きが如く、其人物性格も動もすれば、誤つて人によまる。凡眼見て愚物と爲す者多し。されど内は細心にして、思慮あり。氣骨あり。外は飄逸洒落也。毫も衒氣なく、妄りに人と爭はず。一たび言を吐けば、圓轉滑脱、奇氣人を壓す。年七十に及びても、極めて壯健なり。常にひよこ〳〵出歩く。冬は好んで銃獵をなす。よく酒を飲む。毫

も亂るゝことなし。醉つて、飮みかけの盃を手にしながら眠る。おい〳〵と起さるれば、目をひらきて、直に其杯を口にす。『こりやせ〳〵』と手を合さむとするに、兩手入れちがひて、音を發せず。人見て笑へど、平氣にて、とりかへず。さうかと思へば、右手は握りて、叩くやうに上下し、左手を伸ばして、さするやうに出したり引込ませたりし、左右しば〳〵交代すること、膝に接してなら、出來易けれど、翁は、膝を離れて、巧に之を爲して『出來まい〳〵』と笑ふ。口を左にゆがめると同時に、左手を握り、右手は伸ばして左手にもてゆき、次に口を右にゆがめると同時に右手を握り、左手は伸ばして右方にもてゆくことを、交る〳〵爲して『出來まい〳〵』、兩手の一指だけ伸ばし、面前に相對して輪を空に描くに、普通は、兩指とも同じ方向を取るものなるが、翁は一を右に轉ずれば、他を左に轉じ、交る〳〵之を繰返へして、『出來まい〳〵』とて、兒女を笑はす。

翁將棋を好むこと十年一日の如し。されどきはめて、へた也。毫も勝負を意に介せず、元氣よく突貫し、待つたといふことは、おくびにも出さず。『負けたか、はゝあ』と笑ふ。

翁時に人を揶揄ふことあり。翁の一親友、短氣にして、醉狂の癖あるが、からかはれて、怒つて翁をなぐるに、翁は一向平氣にて、びくともせず。酒さむれば、醉狂の翁、往いて謝す。依然として、もとの親友也。

翁は、酒落を云ふに妙にして、言に應じ、事に應じ、咄嗟口を衝いて出でゝ、いつも人の頤を解く。嘗て新に煙草入れを買ひて、酒席に赴く。口悪き一友、見て冷やかして『和主や、その煙草入れを何處で盜んで來た』と云ふに、直に『うん、その和主の盜んで來た家の隣りで』と應ず。冷やかしゝもの、啞然として言なし。或る酒席にて、婦人の話はじまり、一人が『產後七十五日は謹まねばならぬとの事なり』と云へば『いんにや、きつちり、十五日と極つて居るなり』といふ。『どうした譯で』と問ひかへせば『それを知らぬか、小學校の生徒でも知つて居る。三五の十五日にあらずや』

現職にありし頃、馬醫の事なれば、乘る所の馬は、もとより、見すぼらしきものなり。一軍人途に逢ひて、冷やかすつもりにて『その馬は步けるか』と言へば、『うん、步ける。

御覽の通り、こゝまで歩いて來た』と答ふ。嘗て馬に乘り、夜に入りて途を行く。提燈をもち居らず。巡査見つけて、つか〳〵寄り來り、轡を捕へんとするより早く、『あぶないあぶない。この馬は荒れ馬だ。そりや喰ひ付く。跳ね付く。叩き付く。』吃驚して茫然たる巡査を後に、『はい、どう〳〵。』

嘗て近郊へ銃獵に赴き、小鳥五羽ばかりうちて路を行く。盛裝せる一貴婦人、子兒をつれて來掛りけるが、誤つて獵夫と思ひ、『もし〳〵ぢいさん。其鳥を賣つてくれないかネ』といふ。翁わざと、とぼけて『賣るには賣るが、迚もお前では買へまい。』婦人むつとしたる樣にて、『全體いくらと云ふんだね。』『まあ十圓なら賣つてもいゝ。』婦人驚いて『餘り高い。まけないかネ。』『一文も、まからん。』『餘り人を馬鹿にしてるぢやないか。』『そりや見たことか。お前では、買へまい〳〵。』

翁、容貌魁梧にして怪異。而して劍術、柔術に長ぜるを以て、身をこなすこと、きはめて輕し。明治の初年頃、高知の城下より車に乘りて、其居村に歸らんとす。一坂に至る。

狸が出でゝ人をばかすと噂が高き處なり。『どりや、おりてやらう』と、車より下るより早く、車夫は車を其儘にして、雲を霞と逃げ行く。『こりや〳〵車賃をやらう』と大呼すれど耳にも入れずして去れり。蓋し翁の顏が人並はづれて大なるを變なりと思ひしに、車夫に、らくさせんと身をこなすを以て、思ひの外に、車が輕ければ、『いよ〳〵例の古狸なるべし』と思ひたれば也。

翁は土佐の人。さきに日露の戰役に、軍使となりて旅順の敵營に赴きたるを以て名を彰はせる山岡中佐の實父也。夙に兄の遺孤を養うて嗣となす。之を視ること、我子の如し。その人、今、陸軍砲兵大佐也。目測に妙を得たること、日本第一と稱せらる。一家みな人材也。翁や、もとより名聞を好まず。もし余が玆に翁の性行の一斑を書きしるせることを知りなば、必ずや、豎子、餘計な惡戲をなすと一笑するなるべし。

翁の家、漢籍多し。われ十三四歳の頃、漢學を學ぶに、書を買ふに由なし。常に往いて借り來れり。事はなほ昨の如し。而して、余が頭上すでに二毛斑ら也。今昔を思ひくらべ

て、うたゝ感慨に堪へず。

翁が大山大將の呼方を誤れるに返答せざりしことに就いて、一言、余の解釋を加へむに、今の世の實利一方の人より見れば、愚とけなすべし。されど、妄りに上に屈せず、權に媚びざる土州人士の氣風が迸出せる也。土州人は一般にこの氣風を帶ぶるを以て、所謂出世をせず、轗軻不遇に終はるもの多し。圓轉ならざるは、小と云へば、小なれども、氣骨なきに優れり。陰險なるにはなほ更まされり。土州人士は、槪して氣骨ありて、毫も陰險の風なし。不遇に陷りて屈せず。あくまでも正々堂々の戰ひを爲して、斃れて後に止む、一種男性的なるを失はざる也。板垣伯、馬場辰猪の如き、かゝる氣風の代表者也。翁は包むに洒脫の皮を以てす。土佐にも珍らしき人也。

仁術の實行者根本鯨坡先生

『常州太田に過ぎたるものは根本先生に大新樓』と謳はれたりけむ。根本先生は太田の醫師也。大新樓は三層にて百餘疊の大廣間を有せる酒樓なり。

太田に久しく教鞭を執り居れる伊藤蓟山を訪ひしことありけるが、壁間の一軸に、鯨坡と署して、藤田東湖の韻に次せる七絶、

突兀奇巖聳東海。雄俊勢壓三公樓。
登臨呼酒發豪興。憶起先生昔日遊。

鯨坡の何人たるかを問ひて、始めて根本先生の人となりを知り、欽慕の情に堪へざりしが、旅程匆忙、相見るの機を得ず。再遊の日にはと思ひしに、先生は逝けり。大新樓は大

洗に移されて、遊仙閣と稱する旅館となれりと聞く。

太田に過ぎたるものと稱せられしにても、根本先生の名醫なりしことを知るべし。其診斷の確實なりしこと、往々人を驚かす、ある時、多賀郡田尻村茅根嘉吉といふ人の妻病みて、來診を乞ふ。先生診て曰く、この病人今夜十二時には必ず死すべしと。家人それ迄留まらむことを乞ふ。唯は居られずとて、酒飲み居りしが、果して其言の如くなりき。

先生は機智に富めり。或神經病の患者、頻りに熱度の高きことを訴ふ、先生曰く、藥を倍にして飲めと。患者喜んで去る。家人問うて曰く、無謀にあらざるかと。先生笑つて曰く、唯水を與へたるのみと。

先生の言行一として、超凡ならざるなし。病家に行きても快癒の見込なければ、藥を調合せずして歸れり。常に曰く、病氣の診斷さへつかば、之に適する藥は一種にて足ると。已むを得ざる場合の外、患者に、二種以上の藥を與へたることなかりき。意に適せざれば、權門と雖も、往診したることなし。電話を備へず。人其故を問へば、徒に事繁くなりて、

面倒を增すのみなればなりと。車上にては常に目を閉ぢ居たり。これも知人等に遇ひて挨拶するを面倒と思ひしならむ。先生は藥價を記入する帳簿を備へず。得意の病家、年末に藥價を支拂はむとすれば、其資産に應じて、一定の額を徵す。二十圓の家は、每年二十圓也。藥の多かりし年も二十圓、少かりし年も二十圓也。嘗て藥價を請求したることなし。又藥價に端錢を付けたることなし。一中學生、長病の後、藥價の支拂に往きたるに、十五圓なりといふ。生徒はそれ丈けの額を所持し居らず。實を告げて曰く、自分は他人の厄介になり居るものにて、所持金僅少なりと。先生曰く、さらば御身の好きな丈け置いて行けと。生徒七圓を拂ひて去れり。病家貧困なれば、金錢を惠むを常とせり。太田より一里餘隔れる額田村の一貧家に往診せし際の如き、其窮狀を見兼ねて、竊に枕下に五圓を置きて歸れり。この種の行は珍らしからず。一患者全快したるが、貧困にして藥價を支拂ふこと能はず。盆栽を贈りて謝意を表しけるに、先生喜びてこれを珍藏したりき。

先生は漢學の造詣淺からず。詩書を善くせり。殊に酒を好む。終日酒氣を絕たず。患者

門に集まれども、一人を診しては奥に入りて一杯を傾けたり。先生は書生を愛し、學資を給したるもの、前後、數ふるに遑あらず。先生は大正二年を以て逝けり。年五十七。

余が先生に就て知れるところは、以上の逸話に過ぎず。その藥價簿を備へざるが如き、貧者を惠むが如き、以て高風の一班を知るに足れり。

擧世滔々、名に奔り、利に走り、物質的文明いよ〳〵進みて、精神的文明愈々下り、人は衣食住の奴隷となりて士魂地を拂つて空しからむとす。『醫は仁術なり』の語、われ久しく之を聞く。而して其實行者を根本先生に於て之を見しに、今や亡し。惜しい哉。

大勇の大工某

われ嘗て多數の學友と共に、一酒樓に飮みしことあり。いづれも血氣の青年也。隣室に一群の客あり。みな大工の兒分也。ふとした事より、衝突起りて、喧嘩はじまる。彼れ寡く、われ多し。多きもの勢つよく、大工を悉く緣側より下へなげつくす。唯一人、喧嘩をよそに、床柱によりて、平氣な顏して杯をかたむく。二三人ゆいて、之をなぐる。毫も抵抗せず。なほ平氣にて酒を飮む。人か木像か、怯夫か、豪傑か、あゝよめたり〳〵、これ大工の棟梁にして、萬死びくともせず、なぐりあひぐらるは、何でもなし。小供が、いたづらはじめたるかとおちつきすましたる也。大勇、沈勇とは、かゝる人の事なりと、はぢ入りて、一同ひきとりたり。

これ一青年の余に語りし所也。記して、血氣の勇にはやる青年の士を戒む。

亡き叔父

明治四十一年八月八日、夜十時、叔父は、宿直先にて、卒中にて頓死しぬ。年を享くること五十八。

わが父は、余の十二歳の時に病死せり。同胞三人、その二人の姉は、今なほ存す。一は七十九、他は七十七、みな壯健也。わが兄二人。伯兄は、余の十八歳の時に早世し、叔兄は一昨年の秋を以て逝けり。母も同胞三人、その上の弟は、五六年前病死し、母は昨年の春病死し、その下の弟、卽ち余の小叔も亦終に逝けり。

父方母方直系に於て、余は男子の中の最年長者となりける也。七月の半ばよりこの方、余は鹽原に遊び、天幕旅行に赴き、家にありしこと稀なり。八月四日、小叔來る。酒を置

いて共に飲む。われ鹽原のことを語り、明日よりまた那須山に赴くことを告ぐ。さらば、十日頃、また那須の話を聽きに來むとて去りけるが、誰か知らむ、これが今生の見納めならむとは。

余はその翌日、旅程に上り、十一日の夜、おそく歸り來れば、叔父は既に世にあらず。處定めず進みゆく旅なれば、家より余に叔父の死を報ずるに由なかりし也。

叔父は酒量大なりき。殊に多血質にして、頸太く、胴方形なりければ、必ず卒中にて逝くべしと、心に思ひ居たれど、平生極めて元氣にして、極めて壯健なりければ、六十歳未滿にして、かく早く卒中にかゝらむとは、夢にも思ひがけざりき。

十二日朝早く叔父の家に赴けば、恰も聟の黑住繁太と、長男の喜之己とが、骸骨を收めて來りたる處也。あゝ、昨日までも、壯健にして能く飲み、快活にして能く語り、能く笑ひしわが叔父も、今日は唯一壺の灰となりぬ。近親の誰彼、より集りて、代々木の寺に葬りぬ。埋葬に間にあひたるは、せめてもの余の心やり也。

叔父の家は、世々、要馬の指南役をつとめたり。その父四十三歳にて病死しけるが、時に大叔はわづかに九歳、小叔は四歳、要馬の指南の家は、叔父の家の外に、寺村氏あり。寺村左膳といふ人、斯道の達人也。父に代りて、二叔を教育す。小叔は、四五歳の頃より馬に乘り始めて、要馬の術を學び、十五六歳の頃には、既にその蘊奥を窮めつくしぬ。

今日この頃にても、談、馬の事に及べば、微に入り、細を穿ち、夜の更くるのも知らず、而して親戚の中にて、身にしみて、其談をきくものは、唯余一人のみなり。今日は、類稀なる名馬を見たり。昨日は乘方の實に上手なる人を見たりなど語る。世が昔の世ならば、立派なる要馬の先生也。されど、明治の世には役に立たず。殊に不幸にも、開港と云ひ、攘夷と云ひ、勤王と云ひ、佐幕と云ふ、物騷なる世の中に人と爲り、唯一死君に報ぜんことを期し、落つきて學問をするに由なかりき。

われ折々叔父に向ひて、叔父さんに刀筆をもたせては、役に立たず、算盤をもたせては、猶更役に立たず、家にとざしては、無能の父也。無能の夫也。元來、家庭の人には非ず。

馬に乘らせて、槍を持たせて、陣頭に立たしむれば、本領、はじめて、あらはる。天晴れの勇士なりといへば、叔父呵々として笑ふ。もし昔ならば、お弟子入りして、必ず高弟になりて見ますると氣張れば、お前なら、物になつたかも知れぬと笑ふ。あゝ、わが叔父は、適所に適才を發揮するを得ずして、あたら、空しく死せる也。

要馬といふは、我が土佐藩にのみ行はれたる武術かと覺ゆ。馬にのりて、擊劍を爲し、槍をつかひ、弓を射る。一騎打も出來れば、隊を爲しても出來る。明治十三年の春、舊藩主、この要馬を吹上御苑にて天覽に供しぬ。大叔父は東京にありて、陸軍の將校たり。其の他要馬を學びし人も東京にありたれど、それのみにては足らず。鄕里には、一方の指南役の寺村左膳氏なほ在り。小叔父もあり。その他、要馬を學びし人少なからず。凡そ數千人、舊藩主より東京へ呼びよせらる。寺村氏は更なり、小叔も其中にあり。われ時に年十二歲、母と共に、小叔に伴はれて、東京に上り、大叔の家に養はるゝことゝなりぬ。われ要馬のことは、たゞみゝにきゝしのみなるが、この時、吹上御苑に倍觀するを得しは、要

馬の見始めにして、兼ねて見納めなり。寺村先生は、要馬の奥書を小叔に傳へて逝きぬ。小叔は傳ふるに、適任者を得ずして逝きぬ。嗚呼、あらゆる武術を兼ねて、痛快猛烈を極めたる要馬は、永遠に世に消滅する也。

小叔は、五六年前に、妻を喪へり。子四人、上の二人は女にして、下の二人は男也。殊に下の男子は、今年始めて學齡に達せしばかりにて、當時はほんの二三歳の幼兒也。家に妻なきは、火鉢に火なきが如しとやら、何かにつけて、不便なること多し。人多く後妻をすゝむ。叔又もその氣になりしが、繼母は子に取りて弊害多し。願くは、子供の爲に不便を忍ばれよと諫止せしが、今になりて見れば、其方が都合よかりしぞ悲しき。

小叔急病の報、家にいたりしは、夜の一時頃なり。長男は東海道筋へ旅行して、家にあらず。家には次の娘と幼兒とあるのみ也。娘驚いて、伯母の家にかけつく。この伯母は、大叔の妻也。男の子三人、みな東京に居らず。娘五人、みな嫁して、ひとり家に居る。一人も男無し。伯母また近くに住める黑住にかけつく。小叔の長女の嫁せる所也。

世には、いろ〳〵の事が一時にかちあへば、かちあふもの哉。小叔の長女の黒住の妻となれるもの、孕みて、臨月となり居りけるが、この時、正に、産氣を催して、苦み始む。初産の事にて、黒住も途方にくれ、かゝる時は、經驗に長けたる伯母に相談するに若くは無しとて、黒住は生をもたらし、伯母は死をもたらす。生と死とが、不思議にも、こゝに行きあひたる也。

伯母を呼び入れて、産婦を見てもらひ、車を走らせて、産婆を呼ぶ。舅氏の急病も大事なれど、妻の産も大事也。黒住は伯母と相談の上、使を余の家に走らす。ほんの五六日の旅のこととて、われ旅することを伯母には告げざりし也。使歸りて始めて余の旅せることを知り、黒住は止むを得ず、産婦を伯母に托して、小叔の勤先へ赴きぬ。夜十一時、卒倒してより、全く人生を辨へず、翌朝十時半にいたりて、全く息絶えぬ。

小叔の急報、産婦の耳に入れじと力めたれど、自然とそれと知りたるが、氣丈の女の事とて、心身にさはり無く、小叔の死と殆んど時を同じくして、子を生みぬ。これ小叔の初

孫なり。小叔は猛烈にして氣丈なるが、よく〳〵氣にかゝりしと見えて、たび〳〵立ちより、まだ生れぬか〳〵と問ひけるに、終にその初孫の顏を見ずして逝ける也。黑住夫婦は、一方に死を見、一方に生を見る。悲喜一時に到る。其心中、想ふべき也。

叔父は、要馬の達人にて、武術に心身をきたひたる人なれば、もとより生死を度外に付せり。一死、叔父にありて、何の事も無し。唯死して、借財こそ無けれ、遺產の一つも無し。二十歲の女の子、十六歲の男の子、七歲の男の子、今や母なく、父もなき孤子也。

余の外父は大酒家也。大叔も、小叔も、年壯なる時は、二升の量ありたりといふ。而かも醉つて亂るゝこと無し。孔子の所謂酒は量なし。亂に及ばずといふもの也。我父は、酒をのまず、飮むもほんの一二合の量なり。祖父も亦酒を好まず、曾祖父も亦酒を好まず。余の酒を飮むは、母方より傳はりて、我家の格を破りしと覺ゆ。酒量は二叔の半にも及ばず。たゞ醉つたる上の態度は、よく小叔に似たるが如し。氣も相合へり。相逢うて飮む每に、覺えず興に乘じて、小叔も飮みすごし、余も飮みすごす。母が世にありし頃までは母

へのおつとめを兼ねて、二三日目毎に必ず來りて大に飲みしが、母の死後、余の家ますます貧になり、余の體ますます病弱になりけるに、遠慮やせられし、來らるゝことも、月に二三回ぐらゐなりき。これ小叔に對して、ひそかに遺憾に堪へざる所也。

九日の夜、伯母、小叔の靈前に通夜せむとせしが、何となく家の事が氣にかゝりて堪へられず。余の義兄大谷善三郎、同じく在り。今夜はわれ通夜すべければ、歸りて、つかれをなほされよといふに、さらばとて、家にかへりて臥す。井上未亡人、この頃來りて逗留せり。伯母の第三男、生れし時より貰はれて、其養子となりけるが、近年、故ありて、離縁せられ、今は東京にあらず。されど井上家と伯母とは、舊によりて親しく相往來せる也。夜半はからず、どつと大なる物音す。伯母、傍に臥したる下婢を呼びおこして、あの物音は何ぞと問へば、なに、鼠でせう。いやいやとて、自ら燭を點じて、音したる方に往いて見れば、こはそも如何に、井上未亡人、便所の戸口の緣側に倒れ、目を開き、瞳動かず、齒をくひしばりて、泡を吹く。見るも恐しき鬼相なり。

こは大變と、伯母直に飛び出して醫師にかけつく。醫師來る。診して曰く、腦貧血也。危篤也。早く親戚の方へ電報を打たれよと。車屋へゆけば、出はらひて居らず。止むを得ず、自ら郵便局まで出掛けたり。草木も眠る夜半の事也。下女は四十あまりの女なるが、夜を恐れて、一歩も屋外に出づる能はざる也。嗚呼危機一髪、伯母もし小叔の家に通夜し居りて、下婢のみに家をまかせおきしならむには、未亡人の倒れし音を鼠のさわぐ音と聞きなして、そのまゝに置きしなるべく、さすれば、未亡人はそのまゝに死せしなるべけれど、伯母が家にありし爲めに、伯母が早く物音に氣づきたるために、伯母が早く醫師の手當をしたる爲めに、井上未亡人は漸く蘇生することを得たる也。未亡人の喜、知るべし。げに、いろ〳〵の災難が一寸に集るもの哉。それも、わが伯母なればこそと思はる。女も氣が弱くては、世に一身を全うすること能はざる也。

同じく那須に遊びし島崎未亡人も、長屋權太郎も、みな余の傍系の親戚也。歸り來れば、余には小叔の凶報來り居り、未亡人にも同じく其叔父の凶報來り居り、權太郎には其姉聟

の凶報來り居りたり。三人ながら揃ひも揃うて、凶報に接す。おもしろ、可笑しく旅に遊びし一場の夢さめて、今は語るも互に涙也。わが叔兄の遺家、伯母の家の迎へに住す。嫂、五人の子を擁して寡居す。われ訪なひて、變りはなしやと問へば、人には、變りなし。ただ犬が死にたり。御存じのロス也。『まろ』と仲よかりしが『まろ』にさかりがつきて、近所より犬多く集り來る。『まろ』は、ロスと親しみて、他の犬を嫌ふ。犬にても、戀の意趣あるべし。ロスは他の大なる犬に、さんざん嚙まれて、あはれや、終に死したり。交番に屆け出でしに、犬殺しに渡さるべしといふ。されど、十三歳の娘、それは、かはいさうなりとて、泣いてきかず。止むを得ず、寺に葬りたりなど語る。犬も弱くては、戀人たる能はざる也。

わざはひは、これのみにとどまらず。わが父のすぐ上の姉は、余の家の近くに住む。夫は郡奉行までつとめたれど、早く死せり。長男は、明治の初、藩より西洋留學を命ぜらるるまでの秀才なりしが、歸朝して間もなく死せり。次男は養子にゆき居りしが、これも二

三年前に死せり。三男は身を工學士より起して、今は南滿洲鐵道の理事までに世出し、くらしもよし。この春七十七の壽筵盛に開かれて、げに老後の幸福なる身の上と余もひそかに喜びけるが、天氣晴日のみはつゞかず。人には吉凶代る〳〵來る。かはゆさ盛の孫の第三女、この頃腦膜炎にて死せりとて、歎喜一瞥、袂を秋風にしぼる。

われ鄕を出でてより、既に三十年、未だ歸りて父の墓に謁するを得ず。靑山の墓地には、母や、大叔や、伯兄や、叔兄や、從妹や、墳墓纍々として相並べり。代々木の寺には、外祖母や、小叔や、叔母や、相前後して地下に永眠す。生れては死し、死しては生る。伯兄の遺子、兄妹二人。二人とも、小叔の死と前後して子をあげたり。叔兄は五人の子あり。われに四人の子あり。死を弔うて及ばず。幼きものゝおひ立ちを樂むうちに、知らず知らずわれも老いゆく也。

常陸山君足下

常陸山君足下。われ、深川の八幡祠畔に横綱碑を見る毎に、轉た感慨に堪へず。維新以前の事は知らず。明治以後、角力の盛なるは、實に今日を以て第一となす。その角力の盛なる事の大なる一原因は、實に御身あるを以てなり。されど、角力は、獨りにては取れず。御身の强敵として、梅ケ谷あり。御身あるが故に、梅ケ谷ますく\勵み、梅ケ谷あるが故に、御身の技、ますく\進む。御身と梅ケ谷とは明治の角力界の雙璧なり。

余の趣味を以てすれば、余は、御身の角力振りに隨喜渴仰する者なり。まづ御身の體格完全に發達して偉大なり。顏付は、力士としては威嚴あり。武家の出にして、中等教育の素養ありと聞く。其土俵の上の態度は、如何にも、どつしりとして、貫目あり。覇氣場を

壓して、見る目も、痛快なり。而も機敏にして、粗笨ならず。いはゆる放膽と、小心とあはせ得たるものなり。われ、御身に於て、はじめていはゆる横綱らしき角力を見るなり。

われかく御身の角力振りに隨喜渇仰するにつれて、亦大に悲しまざるを得ざるものあり。他なし、御身に寄する年波なり。演劇や、音樂や、年長じて、技益々長ず。團藏は近く七十にして、滿都の大喝采を博せり。されど、體力は年と共に衰弱す。あはれ、御身の全盛は、いつまで續くべきか。今までこそ、梅ケ谷は御身に對して弱味あれ。されど、年は若し、今日は人の身の上、明日は我が身の上、幾年かの後には、弱味は必ず御身に移らむ。駒ケ岳や、錦洋や、或は御身の上に出でむ。今や、櫻花、夢の間に散りて、新綠既にこまやかなり。げに、花の盛りの短きにも似て、角力の盛りも短きものなるかな。知らず、御身は、力衰へても、なほ場に上らんとするか。力衰へざる前に、早く善後策を講ずるか。御身の氣象としては、必ず、後者に出づるなるべし。

老衰せる力士が、年寄株を讓りうけて、年寄となるは、尋常一樣の徑路なり。御身にあ

りては、容易の事なるべし。さは云へ、これ少數の有力者の事なり。力衰へて、年寄となる能はず。殆んど生活に窮するものも少からず。中には幕の内より貧乏神に下り、二段に下り、三段までも下りて、漸く命をつなぐものもあり。それでも、幕の内に上りたるものは、まだ仕合なり。一生、三段より上にのぼる能はざるものも多かるべし。さるにても、鬼ケ谷は、幕の内にありしこと、二十餘年、第一流とはなる能はざりしかど、幕の内にとまりて、力士としての一生を終れり。その盛りの長かりしこと、他に比倫を見ず。一種の勇者といふべし。力士は、斯くあらまほしきものなり。大砲は、御身が横綱とならざりし前、既に横綱としての實力はつきたりしかど、なほ、昨今までも、凡俗の嘲笑をよそに、平氣にて場に上りき。角力の爲に盡したるものと云ふべし。われ大砲の雅量を多とし、鬼ケ谷の勇氣を多とす。おもへらく、この二人の如きは、力士としての一種の標本なり。御身は如何なる善後策を講ずるかは、もとより、余の知り得る所にあらざれども、もし梅ケ谷に負けぬ前にとて、逃げ支度をするならば、これ餘りに神經過敏なり。卑怯なり。凡俗の嘲

笑を氣にしすぐるの小才士なり。一身をいさぎよくするに急にして、力士に忠實ならざるものなり。一寸、氣がきゝたるやうにて、却つて、天下の識者の同情を失ふべし。

御身は、さきに、海外に遊ぶこと、數月に及べり。余は、その何の目的なりしかを知らず。もし、御身が老後、尋常一樣の年寄たるを甘んぜずして、海外に力士の新領土を開かむとせしものとすれば、余はその意氣を壯とす。川上は演劇を以てし、天一は手品を以てし、山下七段は柔道を以てして海外に成功したりき。力士も、そのやうに行けば、洵に結構なることなれども、西洋人が力士の趣味を解せむには、今日は、時機なほ早し。西洋人は裸體畫を喜べども、實體の裸體を忌む。然るに、力士の美の一半は、裸體に在り。日本人は、在來は裸體畫を忌みながら、力士に實際の裸體美を感受せるなり。單に、この一事を以てするも、今日の處、西洋人の趣味は、角力を目して野蠻の技と斥くること必せり。われ想像するに、御身の洋行は角力の上には、恐らくは得る所あらざりしなるべし。御身の歸朝するや、五月場所までには、十分、下稽古するの時日ありしなり。然るに下稽古に

熱心なりとの噂は傳はらずして、却つて、議員の候補者とならむとの噂傳れり。これ、若し事實ならむには、大に滑稽なり。苟くも、常識あるものは、みな之を非難せり。御身請ふ、深く反省して、その非難に、道理あることを悟れ。力士必ずしも永遠に議員の資格なしとせず。されど、今日の處、御祝儀に命をつなぐの力士は、紳士よりも、むしろ幇間の域に近し。斷じてこれ議會に國政を議するの資格なきものなり。今の議員に、力士よりも、幇間よりも下れる人なしとせざれども、我が國は、力士までも煩はせねばならぬ程に、人材は缺乏し居らざるなり。また他の方面より云ふも、角力を代表する議員の必要、いづくにか在る。果せるかな、御身は候補者を辭したり。その辭したるは、賢なり。辭せざる前に候補者になつて見ようかと野心を起さゞらしめば、なほ更賢なり。而して洋行の失策は致し方なしとするも、歸來一心に下稽古を勵みなば、なほ一層賢なり。これ實に角力に忠實なるものなり。日下開山の光榮を擔へる常陸山にして、苟くも己れの任務を知らば、當然かくあるべきなり。

御身は力士としては、餘りに小才がきゝ過ぎて、いつも腹の見えすきたる小策略を弄するやうなり。一場所毎に、御身は、必ず苦情をもち出すが常なり。新聞紙の報ずる所によれば、この度の五月場所とても、例の苦情を持ち出して、半場より出場せむと、だゞを捏ねたるに、さらばその出場の日を初日とせむとて、御身は、小策略のうらをかゝれたり。御身、苟くも力士たる以上、角力に忠實なれ。角力に忠實ならば、負くとも、同情あるべし。餘りに傲慢にして、我儘にして、小策略を弄しなば、勝つとも、同情なかるべし。元來角力は、二千年來の我が國特有の技なり。大和魂のあらはれたる一種の武技なり。力士はその力士らしき處に、力士としての價値を見る。小俗才、小策略は、却つて力士としての人格を下すべし。

勝敗の決、もとより、あらかじめ知るべからざれども、この度の五月場所には、梅ケ谷に六分の勝味ありて、御身に四分の勝味あるべし。御身もし敗れなばそれは無理も無し。二年越し洋行して、稽古するに由なかりければなりと、いはゆる盲人千人は味方するかも

知れざれども、常識あるものは、決して、そんな事では承知せざるべし。もしや敗れたりとも、それで、直ちに御身の相場がきまるものにあらず。角力に尙ぶべきは、意氣地なり。區々終局の勝負のみのものにあらず。荒岩を最屓するもの多く、海山に同情を寄するもの少からざるは、日本人の氣質があらはれ居るなり。請ふ、男らしく、梅ヶ谷と勝負を決せよ。余は切に御身の勝たむことを祈りて止まざるものなり。近年力士の風、漸く墮落し、やゝもすれば、事に托して休場し、勝負のみを氣にしすぎて、角力の根本の大和魂を失はむとするは、角力道の爲になげかはしきことなり。御身苟くも、日下開山として世に立つ以上は、自ら卒先して、かゝる弊風を一洗せむことを圖らざるべからざるものなり。

力士には、元來、小策略の必要なし。われ御身の爲めに圖るに、飽くまでも力をみがけ。力のあらん限り鬪へ。いよ〳〵力盡きたる後、然る後、年寄になるなり、何になるなりして、角力道の隆盛を圖れ。これ何の奇もなく、至極普通平凡の事なれども、力士として世に立ちたる御身は、かくして、力士としての終りを全うする外には、斷じて、他の道なき

なり。

谷風の名は、今の世にも、ひゞき渡る。われ聞く、谷風は、むしろ、小野川に對して、土俵上には、多く敗を取りたり。されど、人格が立派なりしを以て、當時にも尊ばれ、美名、今にも傳はると。御身、よろしく谷風を學ぶべきなり。谷風ならずとも、近く、鬼ヶ谷を學びて可なり。大砲を學びて可なり。われこゝに御身に對して、苦言を呈するは、御身の角力振りにほれ込みたるを以てなり。御身をして、眞の名力士として、終りを全うせしめむと思ふを以てなり。願くば、之を諒せよ。

因業爺論

いつの間にやら、我國に、元老といふものが出來たり、伊藤、山縣二公、井上、松方二侯が、その元老なりとの事なり。山縣公や、高雅敬すべし。伊藤公や、豪放、愛すべし。井上松方二侯にいたりては、敬すべき所以を知らず。愛すべき所以を知らず。大西鄕や、小西鄕や、大山公や、薩州には、總理大臣以上の人物少なからず。長州にはそれほどの大人物はなけれど、その代りに、總理大臣だけの貫目ある人は少なからず。伊藤公之なり。山縣公之なり。桂公之なり。兒玉大將をしてもし命あらしめば、或は內閣を組織することありしなるべし。薩の松方侯は一寸、總理大臣になりしことあり。長の井上侯は、總理大臣になりしことはなけれども、ともかくも、總理大臣の株のある人にて、從つて、元老に列

せしなるべし。聞く、井上、松方二侯は、財政の事に長ずと。すべて財を司るものは、澁い顔して、財布の口をしめて居らざるべからず。敬せらるべきものにあらず。愛せらるべきものにあらず。芝居で云へば敵役なり。赤面の惡者なり。人世には必要な役なれども、人氣は得られざる役なり。

人心の異なるは、その面の如しと云へり。されど、日本人は、日本人的の顔あり。支那人は、支那人的の顔あり。西洋人は西洋人的の顔ありて、大別することは出來るなり。人物もそれと同じく、軍人的、學者的、宗教家的、政治家的、詩人的などと、系統を立て丶分類するを得べし。世に一種會計吏的系統といふ人物の系統あり。因業爺といふも、この系統に屬するなり。余は、その因業爺、即ち一種の會計吏的人物に就いて、少しく研究して見むと思ふなり。

讀者よ、誤解する勿れ。余は井上、松方二侯を目して、因業爺となすものにはあらず。二侯が財政を司るに長ずといふの一事に因りて判ずるに、必ずや會計吏的系統に屬せざる

を得ざるべし。然らずんば、財政を司るに長ずる能はざるべき筈なり。因業爺と云へば惡く聞ゆれども、もと〳〵會計吏的系統の一種なり。地位を得て、偉大になれば、井上侯ともなるべく、松方侯ともなるべし。少し上りては會計吏ともなるべし。下りて地位を得ずんば、高利貸となりて成功すべし。女とならば、尻目で嫁をにらむ惡姑となるべし。とにかくに、よく金錢を處理して、至極必要なる人なり。

井上、松方二侯の如き名士にありては、國士的分子もあるべく、武士的分子もあるべく、政治家的分子もあるべし。されど、知らず、普通一般の因業爺とは、如何なる性格の人ぞや。

余の想像する所によれば、因業爺とは、私利と自愛との兩念を相合して、その念の非常に强き者なり。もし自愛の方が强くして、私利の方が淡ならば、厭世家となるべく、煩悶家となるべく、宗教信者となるべし。華嚴瀧の亡者と宗教信者とは、その差、わづかに一步のみ。因業爺は自愛もつよけれど、私利の念も强し。どんな目にあひても、煩悶せず、

厭世とならず。まして、華嚴の亡者とはならず。命よりも金が大事、一生懸命に、金にかじりつく。とても、從容、義に死するの武士とはなれず。その代りに、面の皮が千枚張りなるを以て、金は溜るなり。猶太人、これなり。支那人も、かゝる人多し。日本人の中にも、をり〳〵斯る人あるなり。

因業爺は、一轉して、甚助爺となる。その强き自愛の念は、我が子に及ぶ。我が愛する女に及ぶ。その愛する女が、猫でも、牡猫を愛すれば、忽ち目を丸くす。芝居に行きたりと聞かば、瞋恚の焔、忽ち胸一杯になる。嫉妬の念、非常に强し。我が女に、のし付けて進上するといふ雅懷は、蚤の垢ほどもなし。女の髮を切る。進んで、女を殺す。まことに厄介千萬なる人なり。

されぱとて、因業爺は、案外に、金錢上には正直なり。小心なり。會社の金をつかひ込むやうな事は、せざるものなり。またよく、人の世話を爲す。その代りに報酬の念强し。世話になつた者が、絕えず御機嫌を伺はねば、機嫌惡し。あれほど世話してやりたるに、

ちつとも寄りつかず、輕薄なり、愚知らずなりなど、直ちに、むかッ腹を立つる者なり。怒る、恨む、やく、邪念胸に滿つ。到底、成佛する能はざるべし。

茲に、因業爺の一特質としてかぞふべきは女にのろき事なり。英雄は色を好むと云へり。されど色を好む者、必ずしもみな英雄なるにあらざるなり。因業爺は金錢に執念深きとともに、色にも、執念ぶかし。一方には、殘忍非道、鬼の手となりて、金錢をかき込めども、一方には、必ず、にや〳〵と目尻をさげ、菩薩の手となりて、金を女にわたすなり。されば、女にもてるかと云ふに、少しももてざるなり。如何に愚なる女とても、因業爺にほれるものはあらじ。たゞ金が仇の世の中、因業爺には、ほれざるも、金にほれるなり。いやな爺と思へども、弗箱とするには、至極好都合なり。金故に笑ふを、それと知らぬまでも、女に、のろし。愚直なる者の金を奪つて、之を女に與ふ。金の入るわりには、たまりもせず。天の配劑も亦妙なるかな。

乃木大將

晩年の乃木將軍

東京の西郊を逍遙したるものは、處々、路傍の樹枝に布切の結びつけられたるを見しなるべし。これ八十八箇所詣での連中が、深切にも其參詣の路筋を示せるものなり。この心をおしひろむれば、釋迦の大慈悲ともなるべし。古人曰く、人若うしては、學ばんことを願ひ、老いては教へむことを欲すと。干戈百戰の猛將乃木大將が、首を囘らせば卽ち神仙ならで聖賢の、學習院長となりて、華冑の子弟を教育せらるゝは、世にも尊い哉。

日露戰爭に於ける旅順攻擊ほど猛烈なる戰鬪は、武强無雙なる我日本國の歷史にも未だ曾てあらざる所。海外諸國の歷史に於ては尙更の事なり。乃木大將は實に其攻擊軍の大將

なり。十年前の日清戰爭の際にも、旅團長として、こゝを拔きたり。『山川草木轉荒凉。十里風醒新戰場。征馬不レ前人不レ語。金州城外立ニ斜陽一。』とは、何等の高風ぞ。當年七尾城外に賦せし上杉謙信の詩に比するに、氣韻の一層高きを覺ゆるなり。かくて、苦戰半年の久しきに及びて、終に之を拔きたり。旅順口の陷落は、實に日露勝敗の決の判れし所なるが、これ全く日本男兒の鮮血を以て拔くを得たる所也。而して大將の子二人とも戰歿したる也。城下の盟の日、敵將、其二子の戰死を聞いて、涕を流して哀悼せりといふ。人誰れか子を愛せざらんや。されど日本は、我子見事に討死して敗軍の申譯が立ちたりと云ひし瓜生夫人を有する國也。

大義の前には、親なし。大將にありては、十萬の部下、みな我子也。もし事情の許すならば、大將自ら塹濠の埋草とならむことを期せし也。日本の勇强なる所以は、實に此に存す。

大將今や家に子なし。學習院幾百の子弟は、皆我子也。職にある、未だ久しからざれど

も、成績大いに擧り、校風頓に振へりと聞く。大將が老軀を以て、擊劍の相手をなし、夏期旅行に學生と同じくテントの中に起臥するなど、一班以て大將の教育を推すべし。武强一方の人にあらざることも、金州の詩にて推すべし。學習院は、良校長を得たる哉。大將は、其所を得たる哉。かくて、子なき大將の晚年も、寂寞ならざるなり。

乃木大將を弔ふ

大正元年九月十三日午後八時、靈轜將に宮城を出でむとする合圖の號砲の聲と共に、乃木大將は其夫人と共に、自邸に於て自殺したり。其遺書の一節に曰く、

自分此度御跡を追ひ奉り自殺候處、恐入候儀、其罪は不ㇾ輕存候。然る處、明治十年役に於て軍旗を失ひ、其後死處得度心掛候も、其機を得ず。皇恩の厚に浴し、今日迄過分の御優遇を蒙り、追々老衰、最早御役に立つの時も無餘日候折柄、此度の御大變何

共恐入候次第、玆に覺悟相定候事に候。

嗚呼乃木大將夫妻は明治天皇に殉死したる也。なほ大將が辭世の歌に曰く、

うつし世を神さりましゝ大君の

御跡したひて我はゆくなり

誰か圖らんや、大正の世、殉死するものあらんとは。而かも夫妻諸共に殉死することは、古來未だ曾て聞かざる所也。

伏して惟るに、明治天皇は天皇にして神におはす。乃木大將は軍人にして神なる者也。神と神と相感孚する所、玆に異例の殉死あり。此間の消息は、平生天顏に咫尺せし大官上流と云へども、妄りに忖度するを許さず。況んや天下一般の人民をや。一死以て聖明に酬いたる高潔至純の精神は、唯神として仰ぐの外なき也。

海外には殉死の例なし。殊に一切の自殺を不道德とせり。海外の人は、大將殉死の精神を解せざるもの多かるべし。日本人とても、武士的精神を解せざる者は、海外人と同じく、

大將殉死の精神を解せざるもの少なからざるべし。余豈に敢て之を解すと云はんや。余は唯大將の高潔至純の精神に打たれて、一にも二にも感歎の外なく、大將の一死は楠公の討死にもまさりて、萬古永遠、日本國民を感化するものなりと信ずる也。

常人に在りてこそ、死はむづかしき問題なれ。武士にありては、先決問題也。武士の種に生れ落つると共に、馬前の討死は、其先天的運命也。これが他動的にては、まだ眞の武士に非ず。自動的になりて、始めて眞の武士也。而して日本男兒は、武士以外の人とても、苟くも男らしき人は、自動的に發したりき。蓆の上に死ぬるといふことは、武士に取りて不本意極まる所也。又遺憾に堪へざる所也。大將は武士の子也。普通一般の武士なりとするも、一死甘きこと飴の如くなりしなるべし。況んや忠魂義膽一世に傑出したるに於てをや。日本男兒、請ふ地を換へて大將の境遇にありたりとせよ。大將の父は硬骨の古武士也。大將は江戸麻布の毛利邸内に生れたり。十歳までは、そこに生ひたちたり。毛利邸は當年赤穂の義士の中武林唯七等十人の切腹したる處也。父は毎月二回毛利家の菩提所高輪泉岳

寺御墓所へ參詣したるが、其ついでに四十七士の墓を拜したり。大將は八歳の時より、いつも父に伴はれたり。その頃流行せし一枚摺の義士の錦繪を愛玩したり。母は座を正しうして熱心に諄々として義士の事を語れり。武士の子の教育として、これにましたる教育やある。吉田松陰の叔父に玉木文之進といふ人あり。剛毅嚴格にして學問もあり。松陰等も師事したりき。大將も其教育を受けたり。殊に多く山鹿素行の書を讀まされたり。素行は赤穗義士の師なりきと思へば、大將一層素行を崇拜したり。松陰の書も讀みたり。斯くて大將は明治の世に軍人となりぬ。なほ大將は自から幼時の事を語りて云へり。八歳の冬の事也。能く勉强すれば、木履の爪掛を買うて與ふべしと、母約束しけるが、或る雪の朝手習に行かんとせしに、友人どもはみな爪掛あれど、われは無し。羨しくなりて、ぢれて木履を玄關先に投げ出したり。父出勤せんとして、之を見て大に怒り、雪の中に押倒し、下男が運びつゝありし荷桶の水を二杯まで浴せかけたり。今回想して覺えず肌に粟を生ず。父は平生やかましく言ひたることなく、前後これくらゐまでに父より叱られたることなし

とぞ。大將は斯る古武士的の父の血をうけたり。玉木や、松陰や、山鹿や、赤穗義士や、如何ばかり大將を感化したりけむ。明治の世の軍人の中にて、大將は殊に傑出して、古武士的也。一死大將に於て何かあらむ。

明治十年の役には、小倉の聯隊長なりしが、武運拙く、敗れて其聯隊旗を失へり。聯隊旗は　天皇陛下より各聯隊に下し賜はるものにて、一たび之を失へば、萬古永遠、其聯隊には聯隊旗なし。旗手として少尉之に當る。聯隊に取りて、聯隊旗ほど大切なるものなく、又聯隊旗を失ふ程耻辱なることなし。其聯隊旗を失ひし時の大將の心の中や如何なりけむ。忠魂義膽の凝りかたまりし將軍の事なれば、萬死なほ其罪を贖ふに足らずと思ひ込みしや必せり。武士の子と生れて、死は固より覺悟せる所なるが、この時ほど、痛切に死を思ひしことはなかるべし。遺書に、明治十年役に於いて軍旗を失ひ、其後死處得度心掛候とあるは、耻を知れる武士の本意也。然るに、大將は不幸にも十年役には、死處を得ざりき。日清戰爭には、山地中將の部下の旅團長となりて、旅順口を陷れたり。されど、不幸にも

死處を得ざりき。日露戰爭には、大將に進みて、再び旅順口を攻む。支那兵の守りし旅順口は陷れ易かりき。露兵の守れる旅順口は防備至れり。盡せり。世界一般に難攻不落と稱せり。乃木大將ならこそ陷れたれ。又日本兵ならこそ陷れたれ。我兵の死傷多かりしこと、古今內外の戰史に其類を見ざるまでの惡戰苦鬪を試みたり。而かも久しく拔けざりき。內外の非難甚しかりき。もしも明治天皇不明におはさば、他の將軍にかへられて、乃木大將は天草の亂に於ける板倉重昌の境遇に陷りしかも知るべからず。大將が板倉となりて死せざりしは、上に　聖天子の明鑑ありたるに由る。此際大將の生死は、一にかゝりて主上の明不明にあり。大將豈に聖恩に感泣せざるを得んや。下に日本人の忠勇あり、上に聖帝と名將との感孚ありて、不落の旅順も終に落ちたり。この際、餘り多くの兵を失ひて、非難の聲高かりき。大將はあとにもさきにもなき二兒を失へり。されど、不幸にも、大將自から死處を得ざりき。嗚呼旅順の堅城、將軍の勇に非ずんば拔く能はず。然れども、將軍の胸中には萬斛の淚あり。詠じて曰く、

山川草木轉荒涼。十里風腥新戰場。
征馬不レ前人不レ語。金州城外立二斜陽一。

旅順は拔けたり。我軍勝ちに勝ちて、講和成りぬ。上下みな歡呼せり。獨り大將のみは喜ばず。嗚呼旅順に失ひし十萬の生靈は何の日か還り來るべき。大將詠じて曰く、

王師百萬征二强虜一。野戰攻城屍作レ山。
恥我何顏看二父老一。凱歌今日幾人還。

『子等はみな軍の庭に出ではて丶、翁や獨り山田守るらん』の御製、日本國民をして感泣措く能はざらしむ。乃木大將の身になりて見れば、『出ではて丶』が『死にはて丶』となるべく、我身が萬死するよりも苦しき思せしなるべし。斯くてこそ眞の名將なれ。『一將功成萬骨枯』の境遇に平氣にて、己れ獨り功名を貪るは、武士の魂の拔けたるもの也。日露戰爭後、三浦將軍、乃木大將に向つて、君は多くの人を殺したり。今より熊谷の蓮生法師を學べと云ひたることありと聞く。三浦將軍はさまで深き考もあらざりしなるべけれども、乃

木大將にありては、其一言萬雷の落つる如くにや感じけむ。日露戰爭中、彈丸の屆かぬ處に穴を掘りて潛んでばかり居りし聯隊長もありしと聞く。日本男兒は之に百棒をくらはすも、なほ慊らず思はる。況んや乃木大將の氣象に於てをや。嗚呼死を恐るゝものは、死を恐れて、席の上に死なしめよ。恥を知らぬものは、恥を忘れて、榮華の夢を貪り見せしめよ。名に執着するものは名を得しめよ。利に執着するものは利を得しめよ。權に目のなき者は、權を握りて放さゞらしめよ。大將の心中唯一死以て君國に報ぜんとするの一念あるのみ。權や、名や、利や、榮華や、家庭の快樂や、大將にありては、輕きこと塵の如し。死處を得んとして苦みし大將は、思ひがけずも、明治天皇の崩御に遭へり。古來死を悼める歌に名吟多し。『ひんがしの瀧のみかどにさもらへど昨日も今日も召すこともなし』の如き、萬葉集中の絕唱と稱せらる。されど唯殯殿に侍するだけにては、なまぬるき也。鐵路はる〴〵伏見桃山陵まで御伴したるだけにても、まだ〳〵なまぬるし。士は己を知るもの〻爲めに死す。大將はこゝに始めて死處を得たり。殉死の歌、萬葉集になく、二十一代の勅選

集にも無し。乃木大將に至りてはじめて、これを見る。開闢以來、歌壇の寂寞を破りて、武士の精神、萬古にかゞやく。嗚呼、偉なる哉、乃木大將の死や。

殉死といふ事は、海外人の到底了解する能はざる所なるべし。日本國民も、大正の世の人は、或は奇異に感ずるものあるかも知れず。請ふ暫し國史に溯りて見よ。上古に殉死行はれたりき。されど、上古の殉死は自動的にあらずして、他動的なりき。感心すべきことには非ず。上古の殉死は潔癖より出でたり。死したる者の居りし家は穢れたるもの也。諸道具も穢れたるもの也。近く之に仕へたるものも穢れたるもの也。後繼者は新に家を造り、諸道具は屍と共に地下に埋め、近侍者は墓の周圍に半ば埋めて、苦悶して終に死なしめたり。其命のある間は、叫喚の聲四方に聞え、命絕ゆれば、犬や、烏や、來りて爭ひ食ふ。慘狀實に目も當てられず。垂仁天皇の朝に至り殉死を禁じ、土偶を以て之に代へ給へり。降つて戰國時代の末より、江戸幕府の初へかけて、殉死復行はれたり。この際の殉死は、上古の殉死と異なりて、武士的精神を發揮したるもの也。他動的に非ずして、自動的也。我

一身は君に捧げたり。然るに戰場に馬前の討死を爲す能はずして、世は太平となりぬ。何日かまた屍を戰場に曝すべき。如かず君に從ひて死なんにはといふが、後世の殉死の精神也。德川三代將軍薨去の際には、國家有用の大人物多く殉死して、忽ち政治上に困難を來せることさへあり。諸侯互に殉死の多きを誇る風も生じ、子孫の後榮の爲めにわざ〳〵殉死するものもありて、弊害多くなりければ、殉死を禁ぜられたり。大正の世、誰か殉死者あるを思はんや。乃木大將一人のみならず、其夫人まで共に殉死するは益異例也。嗚呼この夫にして、この妻ありと云ふべし。聞く、大將師團長となりて讃岐の善通寺に赴任せし時、草創の際の事とて、大將は妻子を伴はず、一寺院に寓して簡素なる生活をなしたりき。夫人薪水の勞を取らんとて、遙々之に赴きしに、軍人の妻は家を守るが務なるに、家を棄てゝ、主人の許を得ずして、此處に來るは何事ぞとて、相逢はずして追ひ返せりとぞ。げに軍人として、あつぱれの心掛なるかな。そのまゝ歸りし妻も妻也。大將の雄偉なる精神は、その妻までも感化したり。而して玆に夫婦諸共の殉死あり。大將の遺書は、十二日夜の日

付にて夫人の宛名もあれば、前夜までも、一人にて殉死せんとせし也。夫人之を承知せしことも、その文中に明か也。然るに、いよ〳〵十三日になりて、夫人も諸共にと言ひ出したりけむ。夫人絶筆の歌は、自害を覺悟せざりし前の作なるべし。

出でまして歸ります日のなしと聞く
今日の御幸に逢ふぞかなしき

世には三軍を化して、未だ其妻子を化する能はざる名將なしとせず。これ其人格眞に到れるものと云ふべからず。乃木大將は旣に其夫人を化したり。二子また化せられぬ。兄の中尉は南山に死し、弟の少尉は旅順口に死したるが、いづれも潔き最期也。乃木の子たるを辱めず。長子負傷重くして、將に瞑せんとするや、友人なる某中尉、其枕頭に就き、遺言なきかと問ひしに、忽ち眼を開き、大喝して、『馬鹿、何を云ふ。軍人が戰死するは當然也。何の遺言かあらむ』といふ。『然り、軍人の戰死は當然也。遺言と云ひたればとて、女女しき繰言を問ふに非ず。君には父上あり。母上あり。令弟の少尉もあり。此世を去るに

臨み、何か言ひ殘すことは無きかと問ひしのみ』と云へば、暫らく默したりしが、頓て言葉靜に、『君の情は感謝に餘りあり。然し何も言ひ殘すべき言葉なし。唯遺憾に堪へざるは、出征に就く時、父はわれに別杯と共に、こゝにある名刀を與へ、この刀の折るゝまで國賊と戰はざるべからずと云ひしが、未だ一敵兵をも斬らぬに、この重傷を負ひしことなり。今、之を君に贈る。請ふ我に代りて此刀にて敵を斬つて〳〵斬りまくつて呉れ給へ』と言ひ終つて、微笑を浮べて永へに瞑目せり。げに潔き若武者の最期なる哉。乃木大將は臺灣の總督たりし時、墳墓の地と覺悟して、其母を伴ひしに、母は瘴癘の氣に中りて病死せり。大將夫妻は、明治天皇に殉し、其二子は戰死し、其母さへ間接に王事に死して、乃木家は後なし。乃木一家の血肉悉く國家の爲に斃れたりと云ふも不可なし。世にも壯烈なる哉。大將の實弟は、大將少時の恩師なる玉木文之進の養子となりけるが、前原一誠の亂に與みして討死したり。文之進は亂には加はらざりしが自殺したり。大將にありては、一死以て弟が朝敵の罪を贖はんとの心も切なるものありしなるべし。海外人ならいざ知ら

ず、日本人とても、名利に戀々として、恥を知らざるものならいざ知らず。苟くも一片の大和魂を有する者、誰か大將が死處を求めし心を諒とせざらんや。又誰か明治天皇に殉ずるの其死處を得たるを感歎せざらんや。

人或は曰く、大將は軍事參議官たり。又學習院長たり。なほ生存して　今上陛下に盡すべきことあるに非ずやと。軍事參議官は大將ならずとも、他に其人あり。學習院は、大將既に路を開きたれば、必ずしも其人なきを憂へず。大將は生きて、　今上陛下に盡すよりも、死して先帝に盡す方が、大將として、最善の途を取りたるもの也。將軍の一死、海外人は嘲れ。日本人とても、廉恥を解せざるものは疑へ。疊の上に死ぬるを男子の不本意とする日本男兒にありては、唯々隨喜渇仰の外なし。楠公以後、玆にまた楠公あり。明治以來、小軍神は少なからず。大將死して、玆に大軍神あらはる。大將は眞に死後を得たる哉。

十人十色名物男　終

大正五年三月十八日印刷
大正五年三月廿三日發行

定價金壹圓

十人十色名物男

著作者　大町芳衛

發行者　増田義一
東京市京橋區南紺屋町十二番地

印刷者　渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

發行所
東京市京橋區南紺屋町十二番地
實業之日本社
電話京橋八七四・八七五・八七六・九八九
振替口座東京三二六

──(日清印刷株式會社印刷)──

▼▼▼▼南天棒 中原鄧州師述

再版

活才術

■三六版總布金文字入■
定價金六拾五錢
■郵税金四錢■

火に入つて驚かず
水に入つて惑はず

▼閃電光中猶ほ、明智活才の湧然として躍出するの境涯如何？南天老師答へて曰く、須らく禪の奥堂に入り、大死一番、萬法一如の境涯を體得せざるべからず……と。然れども妄念を絶して眞智を現はすの此の境涯豈容易にして到達し得べけんや。

生死の岸頭に立つて悠々自適
隨所に自在妙境を現出す

▼南天老師は、かの至誠以て天地を貫きし乃木將軍畏敬の友也。禪の本義、活才の要道を講述して玆に年あり、内外の等しく瞻仰する處！本書は老師が高遠なる禪話にして、又實に活才妙術の要略を語れるもの廣く之を世の修養を欲するの人士に薦む。願くは何人も本書により人生修養の何たるか、禪の眞諦の何たるかを會得せらるゝを得ん。

此超世逸倫の大修養
此千歲不磨の大活才

▼禪の▼極意▼本書▼に盡く!!!

▼▼▼

男爵　森村市左衛門述

再版

好評如燃

奮闘主義

定價壹圓廿錢
郵税八錢
四六判
總クロース美本

人生の戰場に赴く勇士よ君！君に餞す本書一卷請ふ愛撫せよ！

●新男爵森村翁の實業家としての七十餘年間の生活は奮闘に始まり奮闘に一貫せる活教訓にして、現代稀に見るの一偉觀たり。

●翁の人に接するや常に此主義を鼓吹す。本書の如きは是れ翁の胸底を語れる權威ある大主張たり。

●苟も活社會に活動するの士にして本書を備へざるあるべからず。蓋し讀者を啓發する至大ならん。

内容の一部

奮闘主義の根本と人生：：：奮闘主義と職業：余が七十餘年の奮闘生活：奮闘主義と創業資本：：政治界の墮落：：信仰は奮闘の源泉：：廣く清く大なる心：：：精神的偉人：：健康の第一義：：人生これ奮闘：：：虚より實に：：海外發展は余が元來の主義：：：地方の發展策

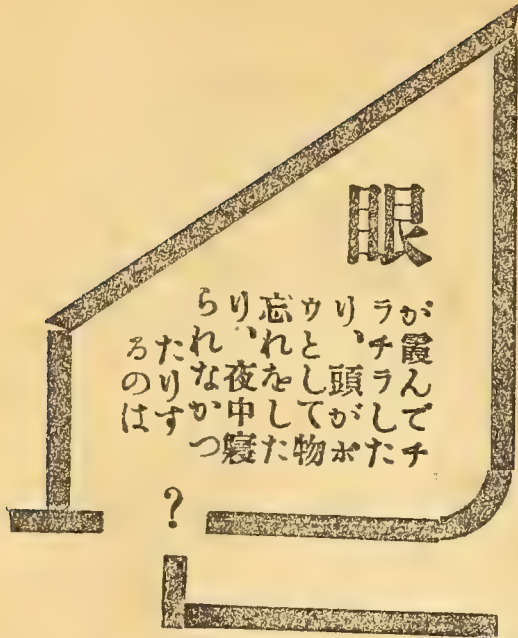
三版

醫學博士 前田珍男子著

眼と神經衰弱

三六判新型
總布美本
定價七十錢
郵税六錢

眼

が霞んでチラチラしたり、頭がボウとして物忘れをしたり、夜中寢られなかつたりするのは？

確かに神經衰弱也!!

●神經衰弱は明らかに現代病也、現代人にして多少とも神經衰弱の氣味なき者は殆どあらず。

●眼と神經衰弱とは至大の關係あるも、今日迄神經衰弱の療法に眼を忘却したり。其の關係を發見力說せるは前田博士にして、高田文相其他知名の士にして其療法に依り全快せる例決して尠なからず

●本書は實に先生多年の研究にして眼と神經衰弱の關係、神經衰弱の療法を述べて懇切詳細を極む。されば眼に故障ある人、神經衰弱の氣味ある人は勿論、明快なる眼と爽快なる精神を有するの士も一讀せよ。